

實驗精神療法

桑原俊郎 閱并序  
宅間 巖 著

明治  
38 10 19  
内交

東京 開發社

序

任天居士は精神學會の療病處の主任となり熱心に患者を治療した其の間にいろ／＼と治療の方法を研究發明したといふので、それを書き集めて遂に此度之れを梓に上すことゝしたといふされば此の書を見らるゝ方は精神的に治病する方法を知らるゝ事が出来るであらうと思ふ別段秩序的に組織的に分類的には出来て居ないといつても隨筆的に讀みもて行く間に一種の趣味を覺え從て心の境涯も進み苦惱も減ずるであらうと思ふ刻成るに及て一言卷首を汚すことゝした

明治三十八年九月八日

相州江の島金龜樓にて

天然居士識す

桑原先生に致はれたる紀念として  
此の冊子を獻  
任  
天

# 實驗精神療法。

## 目次

一、精神療法とは何ぞや。	一
二、治療の奏効。	二
三、醫術との關係。	三
四、病氣の起因。	三
五、本療法の大主意。	四
六、施術の二要件及先決問題。	五
七、方法概論。	六
八、方法各論。	一〇
1、豫備暗示法并回頭法。	一一
2、呼吸法。	一四

3 氣合法……………一六

4 摩擦法……………一九

5 豫期暗示法……………二一

6 睡眠時觀念法……………二二

7 腹式呼吸……………二三

8 斷食法……………二四

9 凝視法……………二五

10 無我法……………二六

11 間接療法……………二八

12 遠隔療法……………二九

13 凝息法……………三〇

14 自己催眠法(一名忘却法)……………三二

15 現死法……………三三

16 坐禪法……………三四

17 瞳孔不眠法……………三六

18 心機轉換法……………三六

19 諸觀法……………三八

20 觀念映射法……………三九

九、實驗三件……………四〇

十、應問錄……………四五

十一、神通力の應用……………五四

十二、信心療法……………五七

附 錄

一、催眠術と宗教……………六五

二、宗教と人生……………七三

三、患者諸君に與ふるの書……………八九

(四)

四、救濟論……………一〇三

五、信仰論……………一〇七

六、續信仰論……………一一九

七、今日一日の記……………一三四

八、立身解……………一四四

九、猫の説法……………一五五

目次終。

凡 例

一、本書は、我師、桑原天然居士の精神靈動を基とし、主として、實驗上の方術を收むるものなれば、委細の理論は同書に譲り、茲には詳述せず。故に本書を見ん人は、必ず精神靈動を併せ讀まれたし。

一、治療實驗の一二例を添へたるは、同例中に方術の幾分を説明しあるによる。

一、治療法は、必しも、一律に律し得らるべきものにあらず。要術者の經驗的自得にあることなれば、本書は普通の方術として、初學者に多少の便宜を與ふるに過ぎず。故に、讀者は、決して方法に拘泥すべきにあらず。只共に御研究を願ひて、實驗上の味を自得せられんことを望むものなり。

一、附録として拙文數篇を添ふ。こは嘗て雜誌精神に登載せしもの、主として宗教に關したる文字なれども、精神療法は、遂に宗教に歸入せずんば、全きものにあらざるを余は信ずるものなればなり。

一、本書は、實驗を主とし、易解を旨としたれば、成るべく翻譯的煩鎖の方術をさけたり。而して參考書として引用したるもの一もあるなし。然りといへども、讀者は、余輩の主張する精神療法の一斑は、確に會得せらるべきを信ずるものなり。

明治三十八年八月二十八日。

東京麴町の僑居にて、  
任天居士識す。

### 實驗精神療法

桑原俊郎校閱。  
宅間巖著述。

#### 一、精神療法とは何ぞや。

精神療法とは、精神上よりして、自動的にもしくは、他働的に、患者の心機を轉換せしめ、隨て心身の障礙を除く法なり。既に心機轉換作用と謂ふ。故に、必しも、催眠せしむるに限らず、談話可なり。説法可なり。暗示といはじ、明示といはじ、之れを廣義に解すれば、教育者が兒童を訓育する如き、宗教家が凡俗を教化する如き等、皆亦、一大精神療法といふべきなれど、限りある小冊子に、餘り汎く涉ること能はざれば、普通に心身の苦惱に泣く直接の患者を

救ふの法を説き試みんと欲す。故に余が精神療法は、必しも催眠術の一部に限るにあらざるなり。

### 二、治療の奏効。

不時の怪我、もしくは負傷などは、病氣と名くべきものにあらず。故に本療法にて元形に復することは出来難けれども、治療上の副動力としては、至大の關係なきにあらず。又、天然の不具者の如き、皆概して言へば、此の療法の範圍外に屬するものなり。而して、普通心身の病氣といへども、萬が萬、全治すべしと思ふは大なる誤なり。本療法を萬能のものと思ひ、只管治療をあせる如きことあらば、却て、本療法の奏効を妨げこそすれ。實に、本療法の主意を逸するものと謂はざるを得ず。只一切を擧げて術者に委託する心的態度となりて、初めて、奏効は顯著なるを得べきなり。

### 三、醫術との關係。

精神といへば、物質に對する語なれども、物質を離れて精神なく、精神を外にして物質を解する能はず。蓋、余輩の主張する所、實に物心一元にあれば、素、之れ、同一物の表裏の名稱に過ぎざるを信するものなり。然るに、物質のみを主とする醫術、又生理的智識を度外視する加持祈禱の如き、皆全きものといふべからず。故に余輩は決して藥療を否とせず。兩々相俟ちて、始めて、奏効も愈々確實なるべきを信するものなり。

### 四、病氣の起因。

飲食を節し、思慮を平かにし、適宜の働作をなさば、病氣はなき筈なり。蓋、病氣は、皆、心身攝生の度を守らざる、所謂無理をなすよ

り生ずるなり。心を働かすに無理をなせば苦悶を生じ、體を使ふに無理をなせば疾病を生ず。精神療法は實に無理をなさず、自然に遵由せしむるにあり。心の無理の主なるものは、思ひ過ぎにして、體の無理の主なるものは、口體の慾を恣にするにあり。この兩者を慎めば、自餘の病症は自然に治するなり。再言すれば、思慮の儉約と、飲食の節制とを守るにあり。尙、總合して言へば、過去を過去として葬らしめ、疾病を自覺せざる方便をとれば、兩者とも自然に治すべきなり。

(四)

### 五、本療法の大主意。

總じて病氣は、病氣その物よりは、病氣に伴隨する念慮の資縁するありて、大部分は、我れと我れ、病氣を捕まへ居るものなり。本療法の大主意として、病氣を少しも苦にせざる状態、一步進んで

病氣の治否をも心に止めず、尙進んでは病氣を自覺せざらしむるにあり。蓋、病氣を自覺せざる人には、最早病氣にあらざればなり。茲に至らば、治るべき病氣は自然の作用にて治し、治らざる病氣は、逆境の恩寵として却て喜ばるゝなり。若し然らば、樂んで以て瞑すべく、否かゝる人には既に死なきなり。茲に於てか、大精神療法として、余は宗教的安心を勸むるを禁ずる能はざるなり。

### 六、施術の二要件、及先決問題。

精神療法の大要素は、實に術者の確信と、患者の信仰となり。この要素を缺かんか。精神療法はゼロと謂はざるべからず。而して、術者の確信は、人格修養の結果によりて、眞の意味を有し來るべきものなれば、精神療法の先決問題としては、術者の人格の吟味にあるや謂ふまでもなし。而して其の補助問題として、術者の

(五)

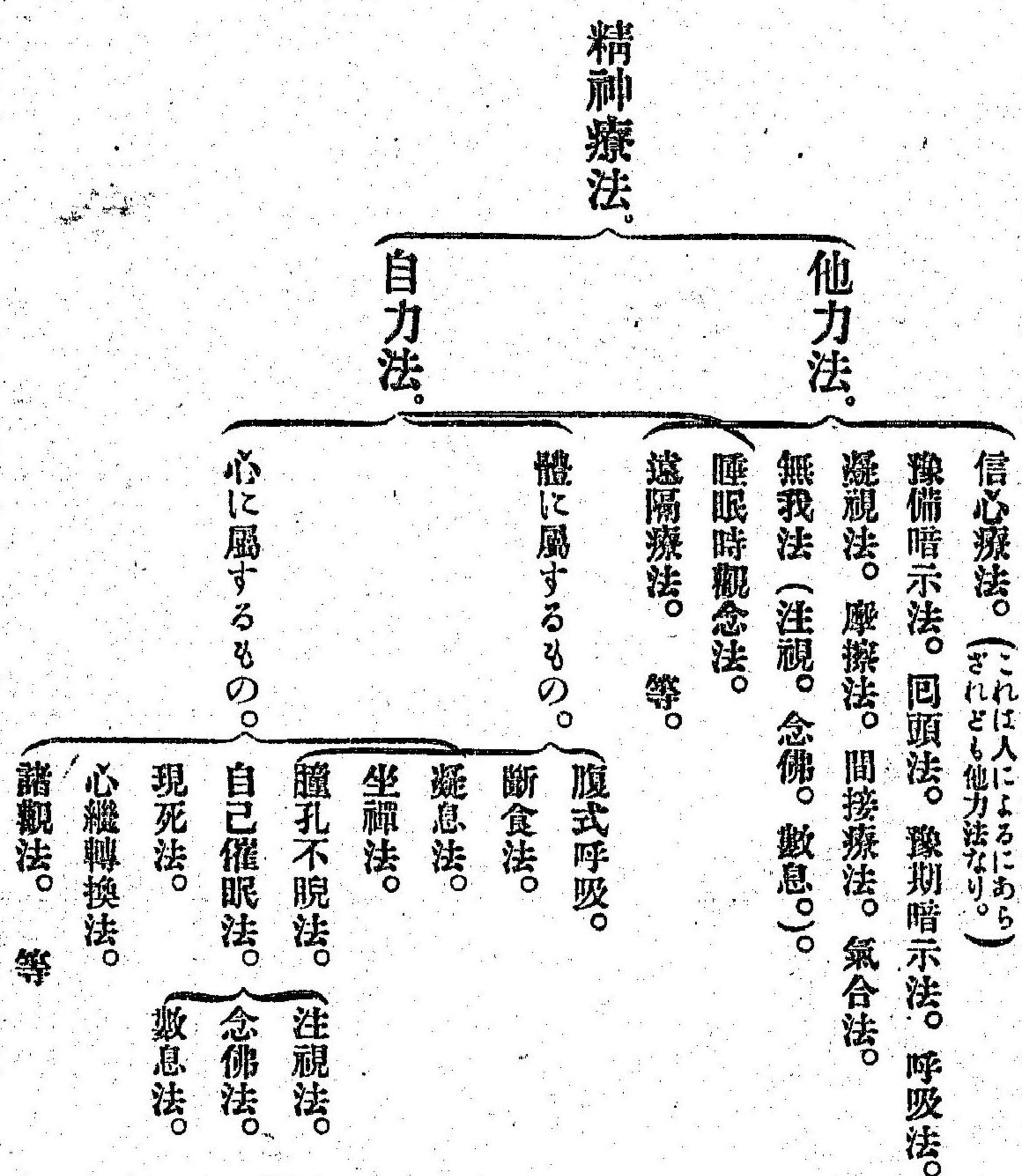


面貌音聲、態度、威容、言語、舉動、服裝等、亦實に輕視すべからざる要素に屬す。尤患者必死的容態にありては、これらの副要素の多くは、疾病の奏効にさまで影響を及ぼさざるが如きも、總じて、患者の疾病の異同、輕重、及心的傾向の種類とにより、又、術者と患者との心的融合の如何により、治療の方術と感應の多少とは、實に千差高別の状態を呈するなり。之れを要するに、方術としては、決して、一律に律し得らるべきものにあらず。只前二大要素の上に、經驗的に自得せば、方術は如何様にも、千萬無量に案出し得らるべきなり。

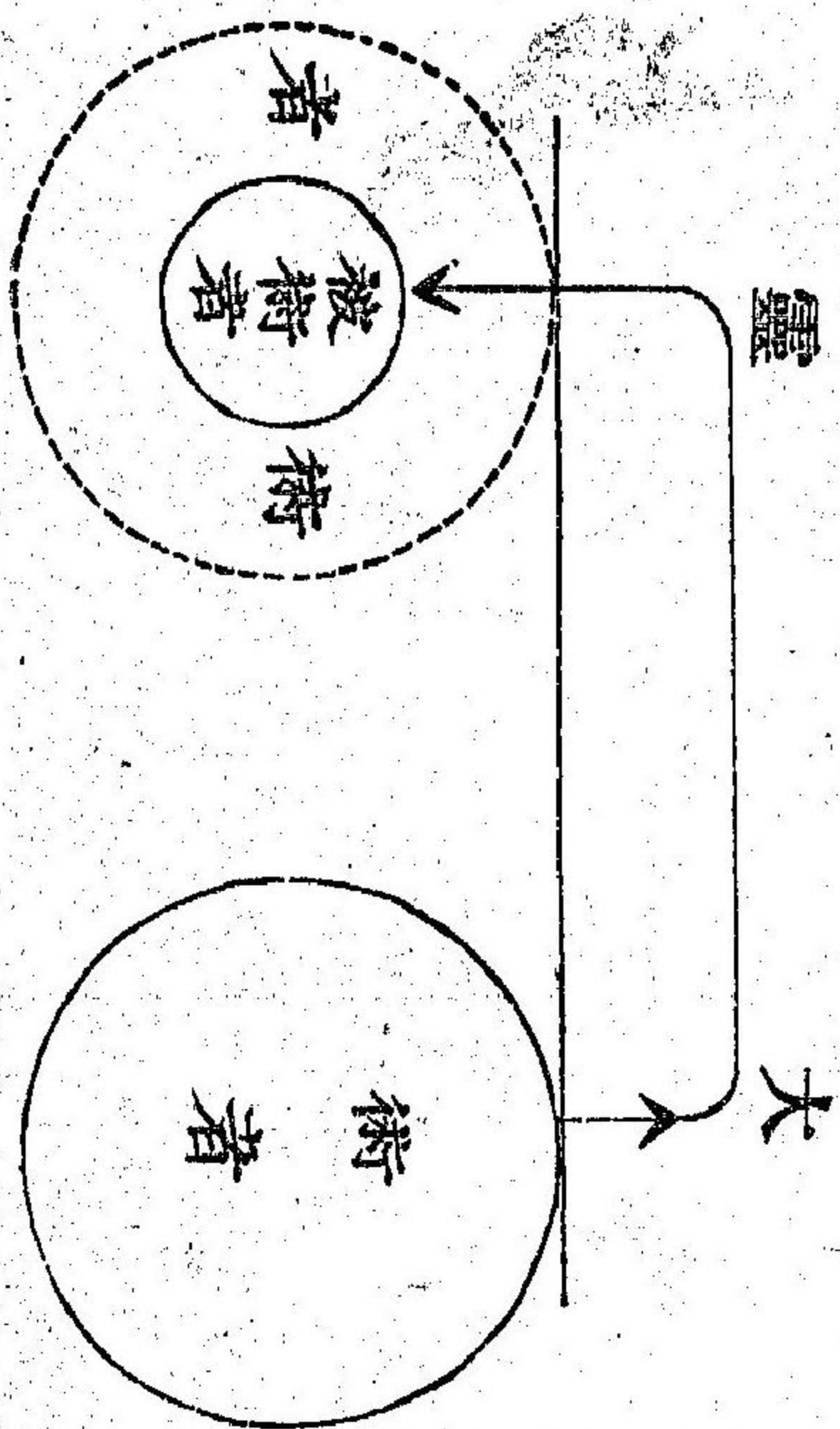
### 七、方法概論。

精神療法を大別して二とす。他力法、對人施術法にて、他の力を藉るものと、自力法、自己の觀念、もしくはは課業によるもの、即、患者

自身の修養に屬するものとなり、之を表示すれば左の如し。



尚、施術上、精神の靈動し、流入する方向に二種あるが如し。即、無意識的(消極)と、有意識的(積極)となり。一は、術者先づ大我に没入し、無我の状態となり。間接的に患者を治するもの、二は有意的に思念を集中し、精神を注ぐものにして、前者は、主に、心的疾患、もしくは遠隔療法等に適し、例へば無我法の如し、後者は、主に、局部の機質的疾患に適す。例へば氣合法の如し、之を圖解すれば、



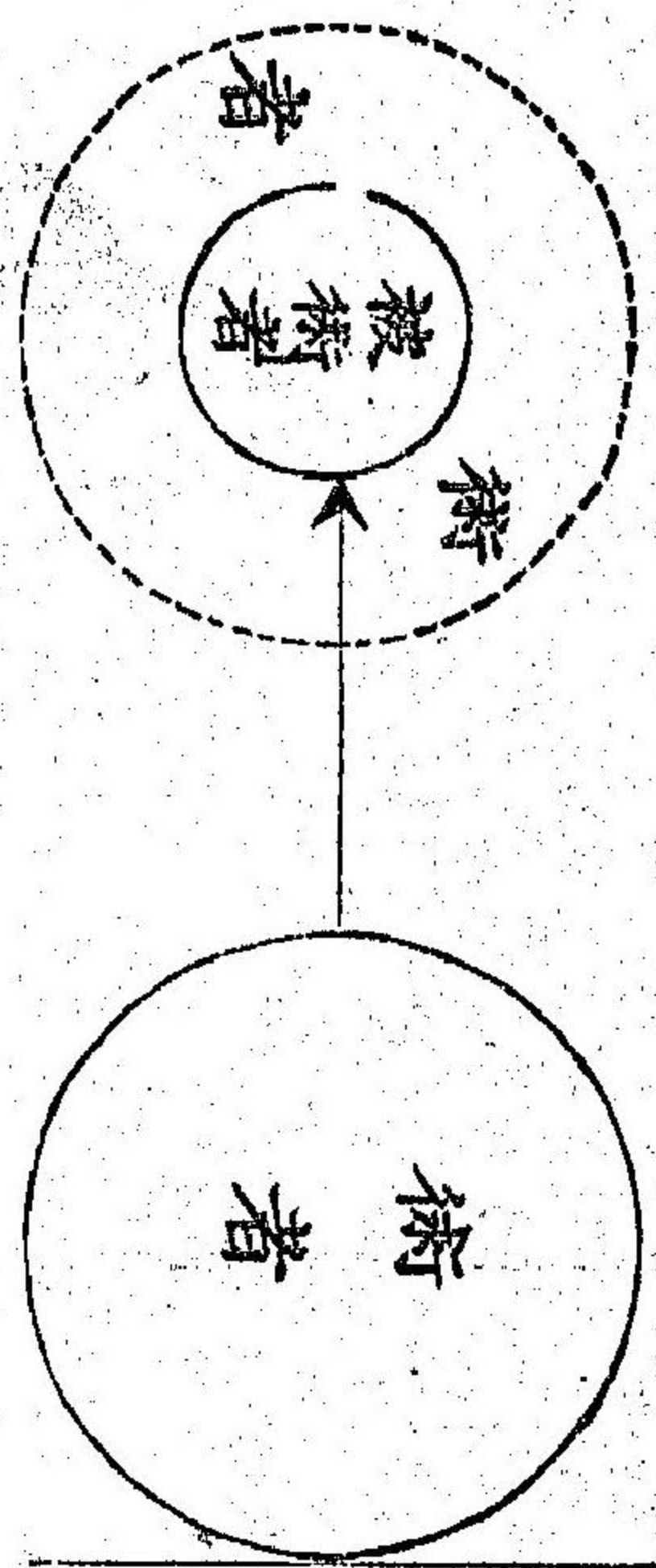
1. 無意識的(消極)

而して、結局は、精神的に、被術者と合體し、能所不二の境界となりて、暗示を下すなり。而して其勢力の根原は、實に宇宙の大靈の作用に外ならずと知るべし。

附記。さきに精神學會に於ての治療の方針とせしは左の如きものなりき。

一、先づ患者を死地に擠すこと。

尤、初めに全幅の信頼心を捧ぐる能はざる如き患者は、本



大 二

2. 有意識的(積極)

治療に無資格のものなれば、一旦すべての我を撲滅する方便を執り、以て暗示(もしくは明示)を障礙なく受納せしむる態度となすこと。蓋し、これは、本治療唯一の要件ならんか。

一、輕症といへども、心的態度に於ては、同じく、一旦、絶體絶命の境界を通過せしむること。

さなくば、効果少く、且つ永續せざらん。

一、要は、暗示(明示)の感受性を昂進せしむるにあれば、必しも催眠を要せざること。

一、一方に於ては、宗教上の信仰(種類は、患者の撰擇に任ず)を鼓舞し、永久安立の地を得しむること。

### 八、方法各論。

以下、各方法に就きて細説せんとす。これは嘗て精神雜誌に登載したるものも交り居れば、順序は前記の表とは大に相違すれど、訂正の餘裕もなかりければ、其儘に置きつ。されど、一方法ごとに解し得るなれば、別に順序を問ふの必要もなしと思ひたればなり。尙、方法は、實に概略に過ぎず。讀者は、これら以上に應用發明して、御教示をたまへかしと祈るのみ。

#### 1、豫備暗示法并回頭法。

催眠術で壯年以上の人をうまく催眠状態になすとは、都會の人間では、事實上往々困難をつくる問題である。殊に神経性の諸症で多年困んで居るものなどは、中々難問だ。樸實な地方の人間でも頗る六づかしいと見えて、往々質問し越される。よし、催眠さしても暗示を與へれば、すぐ覺めるとの小言をきく。本會でも大

に研究して見たが、これらには豫備暗示法が最奏効するよゝだ。即ち施術を始むると同時に、催眠状態を話しつゝ誘導し、併せて其際、病氣快癒の暗示と、受術後よりは、忽爽快を覺へて、心持ち一變すべしと確信的に説きこみ置き、さて睡らした後は、少しの暗示をも與へずして覺醒さすのだ。施術の具合と、豫備暗示の話し鹽梅を左に掲げよゝ。會員諸君も大に研究して貰ひたい。

サ、今から施術しますからね、あなたが自分で睡ろゝとりさまんでもいゝから、睡つても睡らなくても、一切自分の心と身體とを私に打任した氣におんななさい。身體に少しも力をいれんのですよ。私があなたの頭を回しまして、ズーツと撫で下しますと、あなたは全身がグルークなつて、氣がとをくなくなつてきますからね、そして手も足もナンダカしびれたよゝになつて、かなはなくなりますからね、ソレいゝですか。

と言つて側へ回り、患者の頭を前後左右に幾回となく充分推し

曲げ、最後に左手で後頸部を握り、右手に患者の前項部を撮み大きく、圓く、回轉さすのだ。初めは緩やかに、次第に速かになし、數回それをやる。(尤、これは回頭法といつて、催眠術の一方法であるが、此の法に限るのではない)。

サ、これから私がサスリますから、サスルたんびに手足がウゾヤカーになつて來ますよ。目は重ッたくなつて、ナンダカウトゝなつて來たでしょう。サ、そゝしますと、あなたはもう自分の身體といふことは、一寸も感じませんよ。もうもう、輕ウゝくゝなつて、すつかり消えてきますからね。そすと一切の病氣はなくなつて、病氣を氣にする念もすつかり消えますよ。こんなに御痛い所をサスリますとい氣持でしょう。今に痛みもすつかり取れますよ。すみましたら、氣持ちがすつかり變つて、言ふに言はれぬ心持がしますよ。サ、横へおんななさい。覺まします時分には、私が一二三をいひますから、三の時は直ぐ目を御覺ましますよ。サ、何も彼も打任して、あなたはタゝ息だけして居ればいゝんですからね。私が思念しますと、ズーツと感通するんですからね。サ、おやすみなさい。(患者自身の呼吸を寢るまで

これよりハンケチを鼻以上に被ひ、軽く鼻端に近き下眼瞼部を上眼瞼かけて、ソーツと、手指で挟み押さへ、術者は患者を一瞥するなり、ウンと思念を注ぎ、それより長呼吸をするなり、一心に口内にて念佛するなりして三十分乃至一時間(時間は患者の容態による、兎に角充分静臥せしむべし)して、うまく術にかゝれば仕合せなれど、右の順序にて静臥せしむれば、それだけにても慥かに効能がある。この法は催眠し難いものゝみに限らない。普通でも此順でやつていゝのである。

## 2. 呼吸法。

前號、豫備暗示法中にも、其消息を洩したるが、主に患者の呼吸を應用する法なり。其法、

先づ患者を静座せしめ、口を開かして、體中の氣息を残りなく吐き出さしむること約十邊位して、其後眼を軽くつぶらしめ、回頭法を行ひ、尤全身に少しも力を入れしめず、頭より肩及兩手をかけて膝にまで撫下すること、約三四十邊すれば、普通のものに既に睡境に入るもの多し。それを檢するには、軽く患者に向ひ、「最早あなたは體がダルクなり、手足がかなはぬ様になりました。モ眼もクツツイてあきませんよ。」と言ひつゝ、拇指及人指にて、患者の兩眼瞼を軽く撫下し、「サ、モウ決して明きませんから明けてごらんなきい。」と言へば、大概は明かぬが普通なれども、時には、パチと明けることあり。かゝる時には、術者はスカサズ、「決して明きません。」と一喝するや否や、又、直ちに再び患者の眼瞼を覆ひかぶせ、「ソレ明きません。」と確言すれば、患者は、その刹那の氣勢に吞まれ、直に催眠状態に移るを通例とす。其の時の術者の確信と確言とは、

實に眞劍なるを要す。されど、餘り睡らざる具合の患者には、右の  
 檢察を試むべからず。かゝる患者には、前の手膝の撫下後、枕に就  
 かしめ、深呼吸をなさしめ、それを數へしむ。さすれば長くて四百に  
 も至れば、眼球停止し、口端搐搦をなす。既に催眠状態となりしし  
 るしなり。茲に至れば患者の手臂を軽く引上ぐれば、其儘になり  
 居るを見るなり。茲に於てソロ／＼暗示を下すなり。又術者は患  
 者の左側に廻り、患者の兩眼の間、所謂小鼻の部分、右手の拇指  
 人差指にて撮み上げ、ウーンと思念しつゝ、左手は患者の呼息に  
 伴ひ、胸部を軽く撫下するも可なり。

### 3. 氣合法。

術者、患者、相對座して、患者には術者の胸のボタン類を注視せし  
 め、術者は患者の兩掌を各拇指を以て押へつゝ、握り、患者の眼睛

を注視し、患者の呼吸と、己の呼吸とを合せ、殆んど、自己の身體を  
 患者の身體に合體せしめんず。面地にて、燃ゆるが如く、心力を注  
 げば、暫くして患者の眼睛ドロリとなり來り、はや己れは患者と  
 一になり、眼既に患者なく、唯兩々一の呼吸あるのみ。心魂蕩然、虚  
 無々の一刹那、この間の味は實に言説すべからざる靈境なり。  
 患者が氣を呼き、今や正に吸息せんとする瞬間、ヤツと一聲大喝  
 し、「サ、直りました」と手を放せば、患者は吃驚我れに返ると同時に、  
 患部の忽ち平癒し居るを見る、尤これはレウマチスの如き、關節  
 筋肉の痛むものなどに妙なり。尙大喝と同時に肩もしくは背を  
 叩くもよし。患者心身の全部を捧ぐる如き心持ちになすことゝ、  
 患者の全身に力を少しも入れしめざることは、何れの方法に  
 も通じて必要なり。

因に記す。往昔宮本武藏の合氣の術と言ひしは實にこれ

にして「ヤツ」と一聲、其の聲心魂に響き渡り、思はず知らずタ  
チくと云々、皆この消息を云ひしものなり。

濱口熊嶽の加持祈禱も、皆この氣合法の頂上に達したるも  
の如し。彼れが、樹上の蟬に向ひ、九字をきりつゝ、ヤツと一  
喝すれば、ポタリくと、地に落ち來るとの事なるが、これも、  
一念凝注の際、彼自身蟬となり、彼自身地に落つるによりて  
こそ善くするなれ。又本會長が蠅を動かし、金魚を左右する、  
皆實に自身蠅となり、金魚となるが故なり。念力の修練茲に  
至る。豈徒に生物のみならんや。無生物といへども最早自由  
自在なり。古昔弘法大師の法力といひ、役小角の役鬼といひ、  
近くは、由井正雪や、森宗意軒の幻術、みな、解せられるなり。精  
神力の充實、念力の徹到、たゞ驚嘆するの外なし。諸君疑念な  
く、實驗自得せられよ。

#### 4. 摩擦法。

患者の催眠中に、暗示と共に患部を摩擦することは、大に効能  
あることなるが、全體生理上よりしても、身體の諸機關は、交感神  
經の作用よりして、一部の緩和は、全身に影響を與ふるものなれ  
ば、單に患部を摩擦するのみならず、全身をもみ、和らげ、すべの  
機能を進せしむる様にすれば、大に効能あることなり。大方は、  
施術前に、全身摩擦をしてかゝれば可なるも、薄睡状態の患者に  
は、暗示後、先づ頭部を前後左右より絞り上ぐる様にし、それより  
頭より左右の肩先、手指より、足の爪先まで、軽く摩擦すれば、患者  
はスクミ上る風をなし、非常の爽快を感ずるなり、同時に「大邊い  
い氣持がします。無上の愉快です。全身スカートとなりました。」等  
の暗示をしつゝ、摩擦すれば一層妙なり。それを二三十回もなし、

それより「今度は、私が胸先を十邊なでますから、御眼を御さましなつてようございます。」と、きまりをつけて、さます具合にすれば可なり。

(二〇)

注意この醒覺時に「きまり」をつけることは、尤、必要なり。たゞイキナリ覺ますより、か(尤、氣合法は又別なり)十邊なり、二十邊なり、撫摩もしくは、稱呼の後とすれば其間、注意殊に專一となり、醒覺時の心機の轉換、殊に爽然たるを覺ゆるなり。

因に記す。佛教にて、「心身柔輭」といふことをよくいふことなるが、この語は實に精神療法の虎の巻なり。

全體諸疾患は心よりいへば、意識の平調を失し、身體よりいへば、血行の平流を缺き、何處かに偏傾障礙を生じて、所謂コリを來し居るものなれば、此摩擦法の如きは全身をもみ和げて、そのコリを除く唯一の良法なり。それと共に心のコリを除く

こと、是れ大に必要なれども、こは方法も多端なれば、項を改めて掲げん。

### 5. 豫期暗示法。

こは、第一の豫備暗示法とは、少しく種類を異にするなり。即治癒の期日を豫期して暗示を下すなり。こは、大に生理上の智識を要するとなり。凡そ、生理上激變を生じ難き病氣の種類によりては、症狀の依然たるものに「サ、モウ直リマシタ」と、直ちに直らざるものに、見すく暗示を下すことは、醒覺後患者は如何にしても不安の念なきを得ず。かゝる際、生理上の智識ありて、大概治癒の日子を豫定し得れば、何日目には必ず直りますから御安心なさいと豫期し置くなり。而して同時に、催進的に「今夜より御寝みの際、スツカリ直ツタと思つて、能く御安眠なさると、朝々、不思議に、

(二一)



漸々、よくなつて居ますから。」と暗示して置けば、期日と全癒の希望とは、漸次、生理的に變化を來し、大概は期日通りに全癒するを常とす。遠隔療法の一の根底は實に此處にあり。

### 6. 睡眠時觀念法。

こは、何れの方法にも、必、併用すべきものなり。施術の際の短時間のみ、患者を専念ならしむるのみにては、他の多數の時間に、患者は從來の惰性のために、知らず、放心して折角の効力を薄くするの傾なしとせず。故に遠隔治療の方法と同じく、患者の就眠の際、再、受術の心持にならしめ、「必ず直る。」と、一心に觀念して、深呼吸でもして眠るべく命じ置くなり。施術と相待ちて大に効能ある法なり。

### 7. 腹式呼吸。

こは、別段催眠の方術にあらずといへども、本部にて、大抵の患者にすゝむる所の、一種の課業なるが、腸胃神経等の大概の病氣は、必ず、直るを信ずるなり。即、朝起後、就寝前は、殊更に五七十遍以上を日課とし、其他は、間がなすぎがな、下腹部にて長呼吸をするなり。さすれば全身の氣血、常に平調を失はず。妄念も息み、心氣爽快にして、循環機、呼吸機共に盛になり、數日間もつゞけなば、血色見るく、よくなり、殆生れ變りたる感じを生ずるなり。而して下腹部の石の如く硬く力を含み來るや、最早石を嚙じつても消化するなり。禪家の坐禪、神道の息長の法、みな、これにして、實に延命長壽の極意なり。

8. 斷食法。

これまた一種の課業にして「バスケル」の如きは、諸病これによりて治すべしと説けり。遠州掛川病院長山崎増造氏の唱へらるる待饑療法も、亦この理なり。蓋大方の病は、不攝生より起ることなるが、中にも、飽食は最も害あるものなり。試みに一週間も斷食をして試みられよ。決して死する氣遣なければ三日目位には殆んど堪へられざれども、其後は、さして空腹を感じず、割合に疲勞もせぬものなり。さて胃腸の根本的掃除が出来て、真正の體慾に應じて少許づゝの食を攝すれば、血液は常に清涼にして頭腦明瞭となること疑なし。余は、殊に、胃病は、この斷食法、もしくは、待饑療法にて、必治を受合ふものなり。消化循環機能宜しければ、腦病等は烟散霧消するなり。食慾に胃慾と體慾とあり。胃慾は擇り嫌

ひをする嗜好上の貪りなり。之を縦にすれば、必病氣を惹起すなり。真正に餓を生ずれば、最早擇り嫌ひどころの騷ぎにあらず。茶漬香々さながら大半の滋味なり。之を體慾といふ。常に間食をなし、胃の働を休息せしめざれば、疲勞遲緩、遂に慢性の胃弱となり。必ずや、ひもじき時にのみ少許の食物を攝取すれば、決して病氣にかゝることなく、延命長壽、疑を容れざるなり。

9. 凝視法。

これは、最普通に行はるゝ方法にして、誰人も行ひ易く、多くの場合、最奏効する方法なり。これには、光る小球(赤もしくは黄色を可とす。これは生理上視神経を最多く疲らす故なり)か、自己の眼球かを見詰めさせるなり。同時に被術者の手掌を、拇指にて押へ握り居るを可とす。而して、低聲にて、催眠の誘導暗示をなせば、愈

早く睡るなり。即、

あなたの眼はダンク／＼重くなつて來ました。氣が遠くなつて來ました。上眼瞼がダンク／＼下がつて來ます。ソレ／＼もう下がります。もう、半分位下がりました。と云ひつゝ被術者の眼次第に濕み來るを見るや、愈々誘導す。もう、とてもあけて居られませぬ。ソレもうくつつきます。サ、くつつきました。

と少し聲を高めて言切り、一方の手を放して、上頭部より軽く撫で下すなり。間もなく強直状態となるなり。

### 10. 無我法

これは、患者を臥さしめたる後、摩擦法もしくは回頭法を行ひたる後にするか否は臨機にすべし。患者自身にも、無我の状態を

執らせつゝ、術者は左の方法等により、思念を一にし、遂に無我の境に入り、能所無二となりたる時、中心の響大我の聲、靈の叫び。を感じることあり。その時暗示を下すなり。或は無我となりて思念を通ずることを得るやの問時に起ることなるが、そは、既に、受る。施すといふ、初一念に於て感通の縁は通じ居るものなれば、決して患ふるに及ばず。さて無我になる法は左の如きものあり。

一、注視法 先づ患者を臥さしめたる後、ハンケチの類を以て眼を覆ひ手にて軽く押へ居るもよし、患者の面部でも瞥視するや、直ちに鼻頭でも、口端でも、アザでも、シワでもよし、成るべく小さき一點を注視すべし。初めは眼前鮮やかに患者を認むれども、一心に其一點を見詰め居れば、次第に其點より外は見えなくなり、後には、其點までも氣付かず。遂には、術者患者の區別なくなるなり。暫くして徐ろに暗示の機會は自得さるゝなり。注視の代りに

患者と呼吸を合せ居るもよし。  
 二、念佛法——これは宗教上の信仰を得た得ぬに係らず、得れば尙妙なり。遮二無二南無阿彌陀佛を默稱するなり。その時、術者の眼は、患者を注視して居てもよし。半ば閉ぢて居てもよし。そして妄念の沸く沸かぬに係らず、一心に念佛の利劍を以て眞一文字に連續突進すれば、いつの間にか無我の境に入り、暗示の機會を悟り來るなり。  
 三、數息法——これは、自分の息を數へ居る中にいつの間にか無我となるなり。術者の眼は前項に同じ。

### 11. 間接療法

これは、たとへば幼兒の未だ、施術に適せざるものを、其母に施して、母の神通力を應用して、其兒の病を治せしむべく暗示を下す法なり。これも確かに奏効したる實驗あり。されど、かゝる類は、よく催眠状態となり、天眼通を行ふことを得る如き被術者ならでは奏効薄し。

### 12. 遠隔療法

これは、精神學會にて、數多の患者に施し、顯著なる奏効を得し。新法にて、患者の種類により、斟酌はなすべきも、左の如き命令的誘導的の訓示、敢て暗示とはいはず、を確信的に提供し、患者全幅の信仰上に、新觀念を樹立する方法を取るなり。

- 一、何月何日より、午後何時を以て思念を始むべければ、同時刻に就寢すべし。
- 一、就寢の際、余の病氣は一身を舉げて治療を托したれば、必ず全治すべし。と默念し、それより一切の念慮を却け、全身に少

しも力を入れず、睡るまで深呼吸をなし、(苦しめ程度にて) 其數を計ふべし。

一、翌朝目覺めなば、大に快癒を覺ゆべし。

一、一回毎に快くなり、一週間(病狀により伸縮す)にて必ず全治すべければ、安心して決して懸念すべからず。決して疑の心もしくは分別を起すべからず。

一、この箋もしくは名刺、或は端書は、寢時必ず懷中すべし。

以上、大概一週間を一期とし、一期毎に容態を通知せしめ、治せずんば引續き思念しても宜し。

尤、信仰薄ければダメなりと知るべし。

### 13. 凝息法。

これは、自力法の一種にて、方法、効能は腹式呼吸と大差なけれ

ど、妄念を早く止めるには、少しく優れりとす。即ち、ドツカと坐して、(坐し様は危坐でも、跏坐でもよし)腹部を前に出し、少しく後に反り、鼻孔より少しづつ息を吸込み、十二分に吸ひし後、息を止め、ウンと腹へ据え込むなり。而して耐へられるだけ辛抱するなり。段々切なくなり来るや、グツと腹に力を入れて一瞬間耐へ、又グツと一刹那忍び、二遍、三遍、五遍、十遍と續くや、ために、眼を白黒なし、殆息切れんとするとき、口を少しく開き、徐々と呼き出し、殆體中のすべての氣息を呼き出して、更に少しづつ吸ひ込み、前の如くなすなり。絶體絶命とか斷末魔とかの形容は正にこの處ならんと思はるゝ程なり。かくせば、はや一遍にて大半の妄念は靜まるなり。つゞけて十遍もやれば、大概の妄念はやみ、腹の心地はよくなり、爽快となること妙なり。

14. 自己催眠法。(一名忘却法。)

自己に催眠さして、病氣を直す法なり。この法によく熟すれば、所謂神通力を得るに至るなり。巫女等は皆この法の能く熟練したるものなり。催眠中は兎に角、睡りより覺むれば、病氣の觀念も或は復起すべけれど、何回となくやる内には、せめて病氣を度外視する態度となることは出來得るなり。即ち、坐り込むなり、臥すなりして、「サ、余は病氣はなし」と一念思入るや、否や、直ちに、注視法もしくは念佛法、數息法等の何れかの方便をとりて、いつの間にか催眠するなり。自然に覺め來れば、輕症は、一回にして治するなり。

附記、注視法、念佛法、數息法の説明は、無我法の部に説明したり。

15. 現死法。

每晚就寢の際、萬事を放下して安眠することを得る人は、少くとも修養の一地步を占め得たるの人と謂つべきなり。何となれば、人生七十、其の三分の一を睡眠の時間とすれば、計二十有餘年の長き間睡眠する勘定なるが、全體、睡眠は無意義の感あれども、實に其間に一日ノ、新生命を作る餘裕を存養する大切の時間なり。それを無益の物思ひに耽るなど、誠に野暮の至りなると共に、體力を耗損することは莫大なるものなり。蓋一日は一生涯に等しく、人間は朝生れ、夕に死ぬるなり。今此に説かんとする法は、每晚ノ、就寢の際、精神的に大死一番すべしと勸むるなり。就寢の際、サ、余は、今此の幕の上に於て死するなり。」と觀念し、一切萬事を放下し、(無論死すれば何の思もなき筈なれば)充分に安眠すべ

しとのことなり。この習慣が付けば、積み重なりし煩惱も段々解くるなり。尙一步を進むれば人間は、念々に生れ、念々に死す。否念々の念も捕捉することを得ず。吾人は遂に本來無我なるなり。この悟りが付けば一層の向上なれども、差し當り苦惱多き人は毎晩の現死法を試みられよ。益する所蓋多からんなり。

附、本來無我と悟るも、絶對他力安心も其味に於ては相同じ。但だ悟道は機根下劣の御互には難問なれば、易行道の他力信仰こそ、普通の救濟法なれと信ずる者なり。

### 16. 坐禪法。

坐禪とは、結跏趺坐して、動念を静め、無念無想に入らしむる法なり。委しくは、普勸坐禪儀、坐禪用心記等にあり、就て見るべし。然れども、最上の修禪は、行住坐臥の間に心念を移動せざらしむべ

き工夫をなすにあり。左に普通の坐禪法を述べん。

結跏趺坐とは、先づ右の足を以て、左の脛の上に安んじ、左の足を右の脛の上に安んず。半跏趺坐は、たゞ左足を以て右の脛を壓す。寛く衣帶を繫て齊整ならしむべし。次に右の手を左の足の上に安んじ、左の掌を右の掌の上に安んじ、兩の大拇指面相柱ふ。即ち正身端坐して、左に側き、右に傾き、前に窮まり、後に仰ぐことを得ざれ、耳と肩と對し、鼻と臍と對せしめんことを要す。舌は上顎に掛て唇齒相着け、目は須く開くべし云々、是れ坐禪の正規なり。斯くの如くして、心身全く動せず。念想觀を息め、大意力を以て、坦然として外物五官に觸るゝと雖も、心之に與らず。念々無想無念なるときは、漸くにして、雲行き、風消へ、湛々として心澄み渡りて、秋の空の如く清き鏡の如くなるべし。是に至りたるを名けて、大死底に達すといふ。尙、修禪を怠らざるときは、遂に心性の本體に

歸して、所謂大圓鏡智の當體を得て大悟大徹するなり。菅原如庵著膽力養成法はよき参考書なり。

(三六)

### 17. 瞳孔不睨法。

これは、主に軍隊にて修練する法なるが、不動の精神を養ふには大に効あり。昔し、北宮勲の勇を養ふや、膚撓まず、目逃ろかずといひけんげに尤なるを覺ゆ。そは或る一點を捕へ、瞬きもせず、出来るだけ永く見詰むる法なり。初めは五分と續くことは六つかしけれど、慣るゝに隨ひ、瞳孔凝定して動かざるに至る。さすれば、妄念も薄らぎ、物に動ぜぬ好習慣を養成する簡易法なり。

### 18. 心機轉換法。

惣じて言へば、精神療法は、みな心機轉換の作用に歸すべきな

れど、こゝにいふ所は特殊の方法なり。昔し快川紹喜禪師、織田信長のために焼かれし際、「心頭を滅却すれば火も亦涼し」といひて定化せしことは有名の話なるが、勝海舟翁も嘗て曰へらく、頭痛を患へば、灸を足心に點ずべしと、皆これ心機轉換の清涼劑ならずと謂ふことなし。喉乾きし時、梅干の酸味を思ひ、酷暑の時、氷雪の寒冷を念ずれば、大に凌ぎ易きを覺ゆとは、普通に人の言ふ所、兎に角サラリ／＼と其の執着を去り、氣を他に轉ずるなり。さすれば

逢ひ見ての後の心に比ふれば、

始めは物を思はさりけり。

の如く、始めの苦惱は夢幻の如き感のせらるゝものなり。又一面より言へば、如何なる過去の苦痛も、追懷するときは、快味を覺ゆるものなり。現在の苦痛も、それに没入すればこそ苦しけれ。現在

(三七)



のものを過去視し、度外視する態度となり得れば、最早一切の苦痛はなきなり。桑木博士が人生即是夢幻といはれし如く、要するに、浮世は大夢に過ぎざれば、自ら求めて苦しむの愚を學ばずして、成るべく善き夢を見たきものなり。

### 19. 諸觀法。

觀無量壽經に、釋尊が、韋提希夫人のために、極樂を觀する法を説かれてあるが、中々巧妙なるものなり。まづ、日想、水想、地想、樹想等の部分的觀念を構成せしめ、觀念の復現自在なるに至るや、之れを總觀せしめ、それより華座想、像想、一切色身想等より遂に極樂の全體の觀念を附與し、坐ながら極樂に遊ぶの想あらしむ。今こゝに説かんとするは、前項に關係あれども、要するに、有意的に或るものを幻想せしめ、それに注意を専らにして、他の強迫觀念

を除斥する法なり。たとへば臆病なる人に無を有と假定せしめ、又有を無と假定さする如し。無を有と假定するとは、人無き際にも、周圍に多數の人取巻き居りりと假想して、其態度を練り、有を無と假定するとは、稠人の中にて、こゝは無人なりと觀念せしむることとき等、大に心膽を練るに効あるものなり。又寒中冷水を浴びるに、これは湯なりと觀念し、少し熱き湯なりともこれは水なりと觀念して入浴すれば、大に凌ぎ易きこと、實地に試みられなば、思半に過ぎんなり。其他類推すべし。

### 20. 觀念映射法。

これは、我が天然師の唱道せられたる精神の靈動する實證なるが、即よく感應状態となれる被術者に、術者が角觥をとれりと觀念すれば、被術者亦それを觀念する如き、委細の説明は、精神靈動

第一編に説きてあれば茲には省くも、矯癖治療等其他に應用の範圍頗る廣き法なり。蓋、何れの法といへども、暗示の際は、皆この法に出づべければなり。

(四〇)

### 九、實驗三件

實驗は數多けれど、今はたゞ雑誌精神に出せし三件を記載せしのみ。

東京市 某

女 (四十餘年)

右は數年肺病に悩み、數ある名醫も匙を投げし程の重患にて、今春來床にのみ打臥し居たるものなるが、其の息某非常の斯道執心家にて、態々治療を乞ひに來りしを以て、十分の信仰あらば直らぬこともあるまじ、受否は望に任せんと對へしに、翌日は其患者を伴ひ來れり、其容態と云へば、顔面蒼白、些の血色なく、車内は温飽もて全身を包み、「アンカ」さへ携へ、其の息某の肩に縋りて、漸く歩を運び、見るも氣の毒の有様なりしものが、會長一座の説法に、見る／＼氣色引立ち、殊に其信す

る如來の悲願に説き至り、慥に其救済に預り居る旨述べらるゝや、ガバと泣き伏さん計りにて、從來の我慢を懺悔し、遂に會長の命にて其日より床を上げし程なりしが、其後二三十回の施術(主に説法を交へたり、所謂催眠状態に陥りしことなし)にて遂に全癒したるが、其の感謝歡喜の態、餘所目も羨しき程にて、一語一句涙と共に逃出す稱名の聲げに天にをどり、地にをどるとはかゝる有様を言ふなるべし、尤本患者は最初眞島顧問醫の診察にても、一方の肺は殆く空洞同様なりと診断せしものなるが、その全快につきては顧問醫も一驚を喫せり。

因に記す。大方の病苦は皆小我の跋扈跳梁を許すによりて生ずるなり。故に患者にして、罪惡觀の頂上に達すれば、病魔は信仰によりて焼き盡され、涙によりて洗ひ去られ、痼疾も難病も茲に絶滅すべきなり。故に本部の方針は、云ふまでもなく、心の革命を主とし、永久の生命を得しめんことを努めつゝあるなり。

福島縣石城郡 北郷 幸太郎 (五 歲)

右は父某會長の高説を傳聞し、態々福島縣より引連れ出京したるもの、二才の時、レウマチスにて腰部に激痛を生じ、爲に屈曲して歩行し居たるものなりしが、未だ五才の幼弱者なれば、直接施術は容易に出來難かりしが、其父某に添臥をなさ

(四一)

しめ、熟睡の時思念を凝らして頭部より徐に摩擦し、呼吸を圖りて靜に暗示を下し、覺醒後も一語一語確信的の明示を以て父某に手傳はして強て直立して歩を運ばしめしが、一間は二間となり、三間五間となり、六日間の施術にて大略治癒したるが、父某急用にて其翌日歸宅したり、尤治療の初より、父某に安全催眠術の方法を話し、行住座臥の注意をも與へ、心を協せて吳々も注意し置きしが、今や驅け歩きも自在となり、紙齋を上げて遊び居れりと、父某歡びの餘り、若干の寄附金をも添へ、深く御高術を感謝する旨を述べ、是非世に發表し吳れよと言ひ越したり、因に記す。齒痛のもの、概ね催眠を要せず、只手を當つるのみにて全癒するは、最早直接の痛苦のため、前後の思慮をなす邊なき切實の態度なればなり。求めよ、與へられん。叩けよ、開かれん。とか、脈離穢土、欣求淨土の如き、聖經の文句も實に絶對絶命なる欣求の態度を意味する者なるべし。

群馬縣前橋 星野龜三郎 (四十餘年)

右は二十有餘年胃病に罹り、あらゆる治療を盡し、かども其甲斐なく、足腰殆んど起たず、只病褥に餘命を繋ぎ居るのみなりしが、其婢女小川八重てふもの非常の忠義者にて、永年の看病手一つにて、身命を意とせず、主家多年の病患にて、家産

も頗る不如意となりたるを、百方計畫、今回主人を負ひて、態態出京治療を乞ひしを以て、本部にても其志を感じ、日々二回づゝ出張治療することゝしたり。患者は聞きしにまさる衰弱にて、見るも痛はしき容態なりしが、會長一座の説法と、主任毎夜の慰安及施術とにより、歩行こそいまだ充分ならざれ、殆病苦を忘れて、隨喜の涙に咽びつゝ、經濟上の都合より一應歸縣したるが、施術の感應の具合、痛苦の見るゝ除却さるゝ模様は、實に術者满腔の同情を表せざるを得ざりき。施術の結果は、所謂催眠状態にはならざりしも、其奏効の顯著なる實に患者全幅の信頼心に因らずんばあらず。それにつけても、催眠術の基礎は、實に信仰にあることを、余は今更の如く呼號せんと欲するものなり。

施術の際、思念の感應の著しきこと、驚く計りにて、ウンと思念を集注する輕重の度それゝに、其反應を呈すること、恰も電氣をかけたらんとく、術者患者の心的融合、愈熟し來るや、其感應の具合、殆狐憑の如く、體を頼はし、四肢搖蕩し、手の觸るゝ所の患部の痛みは、雪の融くるが如く、忽ちに消え去る有様、精神療法の神秘を余はつくづくこの患者に於て感得したり。殊に其歸國前には氣合法をも雜え用ひしが、其的確なる奏効にはまたも一驚を喫したり。即膝關節の痛む部分を撮

み、今直ぐ痛みを取つて上げますよ、私が手を離しますと直ぐ直つて居ますから、と言ひつゝ、氣合を計り、ヤツ」の聲諸共、撮み去る如く手を離せば、患者は「バタリ」と踏み反り、アア〜、ムツカリ直りました。これこの通り」と喜悅の叫聲を放ちつゝ、關節を屈伸させるさま、術者も呆るゝ計りなりき。又同人は時々齒痛を病み、其發作の時は、是迄二十日間位惱む者なりしが、これらは、別に就眠させもせず、對座のまゝ、患者は眼をバチつかせ居れり、ウンと思念し、腹の底より一心に絞り出づる聲を以て、南無阿彌陀佛〜と逆稱しつゝ、手掌を頬邊に當て、氣合を計り、エイ」と引き取るや、患者は電氣に打れたる如く、轉倒すると共に、熱さめ、痛も忽ち和ぎしかば、患者は、かゝる奇蹟は實に始めてなりと、恐悅がりつゝ、話し出でたり。其他かゝる例、右の患者には、非常に多かりしが、尙一つ話したきは、本書所載摩擦法の効驗なるが、殊に該患者につき感したるは、今、貴方の頭の逆上を、貴方の手指の尖端から引き抜いて上げますから、ね」といひつゝ、頭部よりして、手指を以て、軽く搔き寄する如く、拭ひ取る如くして腕部より第二臂部、手指と次第に搔き撫で、フツと息を吹きつゝ、手指より引き抜く如くせしかば、後にて患者は、其時は實際確かに痛みが抜け出る所が分つて居ました」と話すことなりしが、其後他の患者

(四四)

に試みし所、同じく其感じをすると、言ひたり。余はこれは大に理由のあることに、術者の手指の尖端を以て患者の手指の尖端に應用することは、必ず効あるべき自信あるものなるが、其理由は追て話すこと、せん、兎に角、摩擦法の中に、この手指もしくは足尖より抜き去るとき態度をなすことは、大に効能のあるものなることを實驗したり。

### 十、應問錄

〔問〕病氣ある人、他人に催眠術をほどこすも、施術中、被術者に感染することなきか。

(根岸 徳三郎)

〔答〕感染することなしとせず。殊に傳染病ならば、施術は差控ふべし。

〔問〕思念集注の方法として、深呼吸をなしつゝ、其の數を數ふるも、差支なきか。

(右 同人)

〔答〕差支なし。

〔問〕安全催眠術を施さんとして、かるくゆり起せど、患者神經過敏にて、必ず覺醒し、幾度くりかへすも、不結果なり。何とか良法なきか。

(右 同人)

(四五)

〔答〕豫備暗示法をよく應用すべし。

(四六)

〔問〕發狂者を催眠せしむる方法如何

(宮澤定太郎)

〔答〕難問なり其状態によりて一概に言ひ得べくもあらざれども成るべく反抗的態度をさけ機先を制して誘導的に熱中せば或は効を奏することを得ん但し治否は豫言し得るの限りにわらず。

〔問〕近視眼及び目星等の患者に施術し之を療する暗示の善良なるもの如何

(右 同人)

〔答〕可成生理的に其原因を察し其必至的経過に順應して誘導に或は豫期的に暗示すべし尙中堂謙吉著暗示法を熟讀すべし。

〔問〕家相方位は精神上如何なる値價あるものなるか唯單に信不信に關するものなりや。

(齋藤久三郎)

〔答〕信不信にわり然も生半可の態度をゆるさず。

〔問〕元より私が愚鈍の罪の致す所とは信じてゐますが精神的方法も物質的方法も併せ用ひますけれども大人は小兒の如く思ふ存分催眠することが出来ませんか偶々眠りましても極薄睡で如何に暗示しましても其の度が深くなりません然

かも私は未だ曾て催眠術を遊戯三昧に用ひたことはなく被術者は皆瀕死の大病人のみで術者被術者の精神は實に合的狀態であるのかかる始末で殘念に堪へません何卒御教示の程を偏に願ひます。

(倉光善作)

〔答〕大人は小兒の如くには眠らせ難し然し幾度もくゝ施術する内には能く眠るやうになるものなり何事も忍耐が大事。

〔問〕精神に缺陷なく普通の心情を有する人なれば十人が十人も必ず催眠さすことが出来るのでありますか。

(同 君)

〔答〕十人が十人眠らすことは六ヶし。

〔問〕被術者にして催眠が遅い時は凝視二十分間位迄及んでも害はありますまいか

(同 君)

〔答〕害なし。

〔問〕合意の上で催眠術を施すのに或る方法と同時に觀念の注入をしましたら如何でありませうか。

(同 君)

〔答〕其れは大に必要なり。

〔問〕催眠術施術中術者と被術者との意志聯合を計るには如何にすべきか。

(四七)

(四八) 齋 藤 單 堂

〔答〕最初懇ろに説法をなし兩者の心意融合するをもちて施術を始むべし。

〔問〕遠隔治療に於ける思念とは何をかひふ、唯單に平癒するやうにと念ずるのみか、被術者に信仰心を與へざるも可なりや。

(右 同 人)

〔答〕思念とは必ず全治せしむべしと一心に念ずることなり。二項の質問の信仰心のなき患者は無論無効とす。

〔問〕念佛とは如何なる事であらうか。及び南無阿彌陀佛の意義、字義、詳しく、御教示を願ひます。

(倉 光 善 作)

〔答〕南無阿彌陀佛の南無とは那謨、南摩、南謨とも云ひ此に譯して歸命と云ふ。善導和尚の玄義文に曰く言南無歸命亦是發願廻向之義なりと、歸命とは頼む心にて、宗乘學者はたのむ心的状態を次の如く三種に分類せり曰く

- 一、すがりまかすこゝろ。
- 二、たのみちからにするこゝろ。
- 三、こひもとむるこゝろ。

なり。阿彌陀佛に頼みまかす義なり。然れば阿彌陀佛とは如何なる佛ぞ。是れを人

格的に解せば、大無量壽經に曰く、

爾時、次有佛名世自在王如來。時有國王、聞佛說法、心懷悅豫、喜發無上正真道意。棄國捐王行作沙門。號曰法藏。高才勇哲、與世超異。詣世自在王如來所。乃至是世自在王佛。即爲廣說二百一十億諸佛刹土、天人之善惡國土、之塵沙。應其心願、悉現與之。時彼比丘、聞佛所說、嚴淨國土、皆悉親見。超發無上殊勝之願。其心寂靜、志無所著。一切世間無能及者。具足五劫、思惟攝取莊嚴佛國清淨之行。云々

而して衆生救済せんとの誓ひより、四十八願を立つ。今や法藏比丘は本願を成就し、正覺を得給ひ、阿彌陀佛と號け西方に極樂淨土を構へ、今現に説法なし給ふ。本願四十八のうち第十八願を王本願と稱し、淨土宗、真宗の重んずる所にて佛の本懷の願なりとす。其の本願に曰く

設我得佛、十方衆生、至心信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺。

右の文を觀念法門に引きて曰く

若我成佛、十方衆生、願生我國、稱我名字、下至十聲、乘我願力、若不生者、不取正覺。

又往生禮讚に

若我成佛、十方衆生、稱我名號、下至十聲、若不生者、不取正覺。彼佛今現在、世成佛。

當知本誓重願不虛衆生稱念必得往生

と知るべし是れ念佛の本據なり、稱念、稱名、念佛、皆同一の名にして此本願に乗じて御名を稱ふる事なり、以上、事相の阿彌陀の釋、及び念佛の解とす。

次に理相の方面より解釋せば、阿彌陀經に

彼佛何故號阿彌陀、舍利弗、彼佛、光明無量照十方國、無所障礙、是故號爲阿彌陀、又、舍利弗、彼佛壽命及其人民、無量無邊阿僧祇劫、故名阿彌陀、

名には體あり、名は精神の發現にあらずや、吾人、梅を呼ぶ時、口既に酸味を覺え、砂糖を呼ぶ時、甘味を覺ゆ、即ち名體不離なり、然れば、阿彌陀佛の體は如何、右の經にある如く、無量とて數限りなき光明、光明は智慧を知るべし、唯信鈔と其智慧は善惡美醜を撰はず、一切を攝取して無碍自在なり、華嚴經に、如來(佛)と名(同)智慧、無處不至、何以故、無衆生而不具有如來、智慧の底のものなり、如來の如きは一如の眞理にて一切の染汚を離れて、萬物を洞看すること、大圓鏡の如く、諸法の實相を觀察し、平等に宇宙の理法を證得し、自由自在の作用を爲す、是れ如來の智慧なり、光明なり、阿彌陀佛を盡十方無碍光如來と云ふ所以なり、また、無量の壽とは一切萬物は生滅々已する、生命なきものなるに、如來の懷に入れば滅絶にあらず、消衰にあらず、常住の生命あり、不

滅永生なり、故に壽命無量と云ふ、以上の智慧無量、壽命無量の義あり、體ありて、空間的に十方に亘り、時間的に三世に徹し、一切を漏さざる、宇宙の大精神なり、法界身なり、阿彌陀といふ三字をば、をさめ、たすけ、すくふとよむなりともいへり、觀無量壽經に曰く、

如來は是れ法界身なり、  
また、十八通に、

萬法は皆無量覺阿彌陀佛の所具に非すと云ふ事無し。

とされば、基督教の神も、バイブルも、阿彌陀の所具、八萬四千の法門も、皆、阿彌陀の名體を離れず、大我といひ、至大至剛と云ひ、大精神と云ふ、皆、阿彌陀の別號なり、問者も、阿彌陀、答者も、阿彌陀、盡天大地、皆、阿彌陀の光明、攝取界中なり、之れを理釋とす。

問、心力感通法とは如何

(笹原 仁 一)

答、精神靈動を熟讀せられたし。

問、施術の際、被術者の拇指を握れば如何なる感應ありや。

(右 同 人)

答、思念相通、直接の縁を興ふる故に感じ易し。

問、手を胸に置きて恐しき夢を見るわけ。

(右 同 人)

〔答〕一は恐しき夢を見るとの先入観念あると、一は生理上壓迫を感じて心的苦痛を惹起するに因る。

〔問〕起床の時、寝返りすれば、夢を遺忘するわけ。

〔答〕身體の激動より、心機を頓變を來すによる。

〔問〕僧仰深く、精神を一にすることを得て、催眠状態に陥ることなき患者を如何に處置せば、治病の効を奏することを得るか。

(齋藤久三郎)

〔答〕好き質問なり。精神を一にすることを得ば、更にその一を無とせよ、何も執することなければ、病氣も自覺することなく、隨て、病即無病なり。古徳のいひけん、既に心なし、何ぞ安心の要あらんやのごとく、本來無我なることを悟れば、病氣も何もあらず、善なきなり。

〔問〕催眠する者と、せぬ者との拘らず、一定の時間を経過せば之を醒覺せしむる人あり、かくて催眠せぬものに目的を達することを得るか。

(右 同人)

〔答〕暗示を障礙なく受納せば必しも催眠の必要なし、如何にしても催眠せざればそれは人力以上にて致方なし、宗教的安心の必要茲に起る。催眠術は人を皆無病になし、皆聖人に變換せしむる如き萬能のものにあらず。治療をあせり、苦悶をもかく

は皆迷なり。

〔問〕普通睡眠を催眠状態に轉せしむるには如何にすべきか。

(右 同人)

〔答〕安全催眠術の法によるに若くはなし、催眠状態になるかならぬかは人による。

〔問〕治病暗示を與ふべき催眠の深淺の度を問ふ。

(右 同人)

〔答〕催眠状態となる人には、昏睡せぬ限りは深き方よし。

〔問〕術者以外の暗示を感受することのあるわけ。

(土屋清治郎)

〔答〕術者以外の暗示は感受せずと暗示せぬ限りは、生理的の五官の機能にて無意識に感受することもあるわけなり。

〔問〕被術者が第三者の人の事情を熟知することあるは、第三者との感通あるものか、たゞしは天眼通か。

(右 同人)

〔答〕天眼通なり。



十一、神通力の應用（無盡の落札）

これは著者の弟の實驗なるが、こゝに載することゝしぬ。

薩州小牧 册

齊

奇といはんか妙といはんか、神人感格、感應現前!!! 嗚呼、天然先生一たび精神の靈動  
 靈界の秘奥を喝破せられしより、道途に委棄せられたる竹頭木屑も鏗爾として、靈  
 響を發し、塵埃堆裏の敗鼓の皮も勃如として、四肢を生ずる底の奇況を見るに至る。  
 豈快ならずや。  
 蓋、蓋十方の森羅萬象は三世を撥無して、永久に一大音樂を奏し、一大活劇を演じつ  
 つあるにも關せず、臚眼聾耳の徒眇乎たる小智を以て、漫に絶對を揣摩し、異端邪教  
 妖怪變化奇蹟魔術の名の下に、あはれ造化の一大機巧を壅閉し來りし事の愚さよ。  
 十九世紀科學の物興は殆ど巧を奪はんとするが如きも、遂に絶對無限の一小壘を  
 も摩する能はず、即知る科學は如何に發達すとも、根本的の解決を與ふるものに  
 らざるを否却て多々益煩鎖に堪へざらしめんとす、機運循環二十世紀の曙光と共に  
 に世は靈界の開拓を促し來り而して、靈性の研究は一步を進めて、遂に科學の方面

に逆襲し從來奇蹟魔術視せられたる造化の機巧を捉へ來りて却て科學者を眩目  
 せしめんとするに至る豈又盛ならずや、天然先生の偉業茲に於てか九鼎大呂より  
 も重しと謂つべし。  
 蓋、絶對は空間時間を超越す、智慧を超越す、力を超越す、乃至一切の超越的實在なり。  
 此境界に至るや一切に於て無礙なり、大自在なり、全智全能なり、天眼通、天耳通の如  
 きは實に其一小作用に過ぎざるのみ、披山倒海、掀天翻地の文字も、或は一形容語の  
 みにあらざるを信するものなり。

昔者孔夫子は晩年に至り、易を讀み、韋編三ひ絶つに至る、豈宇宙の奥秘に神會する  
 所ならざるを知らんや、實にこれ時間を超越したる易理の好例證!

もしそれ力についていはんか、孔子も至誠動天とのたまひしごとく、歌聖貫之が「力  
 をも入れずして天地をも動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ云々」の如き、  
 天人感應すれば遂に人力を超越するの好適辭!

嗚呼……(天外聲あり)早く本論に入れ、喝篤二愕然唯々

余や邊轍の乳臭、豈敢て這般の力ありといはんや、又敢て個中の消息を悟入せりと  
 いはんや、思はず冗語を連ねしは、只感激の餘に出づるのみ、却説、余は昨年夏頃よ

り斯道について桑原先生の説に感ずる所あり、試に施術すること一再、僻地敦樸、施術の結果今更の如く奏効し、四天王ならぬと常に通力に應用する五人の夜學生を得たり。昨臘十八日の事なりき。余の滯留する村の區長代理にて、兼て懇意なる福留權太郎といふもの來合し、願ふ様、明日は拙者の加入せる隣村指宿村中川の西中川孫市の無盡講定日なれば、拙者に落札する様御高術を煩したし」と述ぶるさまの如何にも殊勝氣なれば、よし、落札し得させん安心せよ、愈々當る故に、念を推して一楔語を下し、五天王を呼び各々椅子に倚らしめ、鹿爪らしく「眠れ」と命じ、緩く二の敷を口誦すると十……十二に至る、其間二分時を出でざるにはやスヤ、グウ、白河夜船、余と某とは傍にありて一心に精神を凝し思念すること暫時、一人づゝ如何に」と尋ねたり、其中一人を除く外は皆落札別條なき旨を答へぬ。余は然らば念のため今より中川へ行き籤を當る様に皆力を添へて來れ」と命じぬ。里程三里が間を十分より十五分迄の間に皆喘ぎ、歸り來りし様の身振りにて一人一人叫んで曰く「先生只今歸り來れり」と、余其模様如何を問ひしに皆曰く「拙者よく其籤を扱ひ來れり、故に他のもの如何にあせるとも明日の落札は福留氏に間違なし、安心あれ」とまで確答したり。さて明日となるや、福留は無盡へと發足せり。余は如何

あらんかと氣遣ひつゝ、抽籤時刻との午後五時半をまち佗びてありしが、既に七時半となりしも同人歸り來らざる故、再び二人を催眠せしめ其の模様を尋ねしに「否々いまだ當籤せず」と答ふるにぞ。余は落膽一方ならず、殊に其夜は何時になく余は眼氣を覺えず、時計は今や午前二時とも覺ぼしき頃、例の福留ケタ、マシク戸を叩き「師よ、師よ、やつがれ今歸りぬア、二百九圓有り難い」と余は領きつゝ、その模様を委しく問ひしに當夜にかぎり、抽籤時刻は午後十時にて、落札は大地を打つが如く、總額七百餘圓の當籤權を他に轉賣し、空手二百九圓を徒麻げに願け來れるなりと、はては「師よ！神様よ！やつがれの貧乏は今夜をかぎりなりき」と満面ホク、涙を流しての恐悦の體譽ふるに物なかりき。是に於てか余が先刻の七時半の使の未し、の不審も聞れ共々に其幸福を祝し合ひたりき。右につき余は通力作用にて遠隔の時情を洞察し得ると共に至誠通神的の念力の徹到を今更の如く感ず所感をも書加へて報告に及ぶこと耐り。

### 十一、信心療法

東京は芝公園辨天社の前に鑑蓮社といふ寺がある。數畝の境内、地幽に水清く、頗る

閑静な場所である。浄土宗で常念佛を修して居る。住持を大谷文祐師といふ。資性恬淡風姿温雅、近世の高僧徳本行者の流を慕ひ、朝夕の勤行多年一日の如く、殆念佛の權化と思はるゝ程である。世に交らず、名を求めず、得る所の收利は擧げてこれを慈善事業に費し、或は靈藥を頒與し、或は行者に施飯し、而して己を持することは頗薄く、忍辱精進の飛行世にめづらしき程である。去る明治十四年よりは不斷念佛滿八千日の願を立て、有縁無縁法界萬靈のために追善を營み、又酬四恩會を立て、其事業の一として古代より現時に至るまで震災戦争等非命の死を遂げしものゝため、全國の公衙に向つて調査を遂げ、殊に日清戰役戰死者の靈名簿の如きは、上將校より下兵卒軍夫に至るまで一人も洩さず集載し、其簿冊は畏くも 乙夜の覽に供せられしとの話なるが、八千日の立願は一昨年中にて終りたれど、尙引き續き常念佛を修し終生行と遂げんとの意氣込である。今回の戦争にも、我軍の戰死者は一々記録し置き、尙敵の死者に向つても同じく追善を營みつゝある。念佛隨喜の御方は一び行きて訪ひ玉ひぬかし、師は快く歡迎さるゝのである。七十六歳の嬰孺たる老翁、豐頬白眉、瀝々肥滿せる短軀を園庭花奔の間に運び、一沙彌を隨へ植木鉢を手にし、供佛の花枝を剪採しつゝ、時々滴らんばかりなる慈顔より罪なき哄笑を洩らさるゝ

を見聞するであらう。閑話休題、同師の確信になれる血脈ほどこしてふことがある。余が説かんとする主題はそれなるが、一種の信心療法で、そのため永年の難患が全癒したるもの實に夥しいもので、感謝狀(追善利益書)山の如くある。師は「理窟は兎まれこればかりはどなたが何と仰しやつても疑ひませぬ」と非常な執心である。余はそのいはれと方法とを聞いて節を拍て好箇の催眠術よ催眠せしむるのではないけれどもと叫んだのである。

それは、主として患者、止むを得ずんば其の身寄の者に、其の眷族中非命の死者、もしくは無縁の亡者、其他羽毛鱗介の類でも、少しにても關係せずやと思はるゝ、精靈の爲佛縁を興へ、血脈書を施して七々日間の追善廻向せしむるのである。その間は日課として一心に念佛を稱へしめ、朝な夕な汲立ての清水と淨飯とを捧げ、夕景に及んで其清水だけは足跡の印せざる樹根もしくは石上の如き清淨の地に南無阿彌陀佛くくくと一心に十遍ばかり唱へて注ぎかけ、施餓鬼の形式をするのである。さうすると不思議に患者が全癒するのである。諸君よ、直に迷信的の行爲と冷笑し玉ふなかれ。余は大に尤だと確信するのである。委細の理窟はさて措いて、少しくその形式について説明を試みやうなら。

一、人もしくは他の生物の念力は、死後にも殘留することは天然先生の御説にて分明なるが、今その死者のために追善供養等をなせば、其一念廻向の功力によりて、死者の怨念を緩和し、物理上より言へば五の力もて進み來るものに五の力を以て對すれば、力は互に消滅するが如く、所謂精靈の得脱成佛が出來ること。

二、同時に、一面施主には心靈の慰安を與へ、隨て心身の障礙も除去され。

三、念佛によりて、患者に代りて血脈を受けたるものは、その念力が患者に通じて、心を純一ならしめ。

四、日をふるに隨ひ、一枚皮をはぐ如く一種の信仰的慰安心を増し、滿願の後には最早重荷をおろしたやうに確信の地盤に安住することが出來、且つ。

五、毎朝清淨の供養をなし、其繁を厭はざるは、日常の起居を修整して放心を防ぎ、端嚴謹懇の清淨心を形式上より陶冶し、大靈に融合する心ばえを養成する好方法で、六施餓鬼の形式は彌陀の善根そのまゝの功德である。

これらは、各宗とも形式は出來る道理、例へば蓮門教、天理教等の諸加持、もしくは御神水等、皆この理由だと思ふ。そこで別段催眠せしむるでも、又殊更に説法するのでもなく、其人の宗教上の信心を應用して、病苦を除くのだから、信心療法と名づけたのである。(尤も催眠術は、術者に對する信頼心が効果の多分を占めて居る故、廣き意味にて言へば催眠療法は皆信心療法ならんけれど、余のこゝの意味は宗教上の信心の意味なり。)

序でに催眠術についての所感どもを少し述べたい。余は催眠術を廣義に解釋して、世界は實に一大催眠術場と思ふのである。蓋空間的にいへば、盡十方の萬有みな心的一元で、思念相通有情非情の相感も解し得られるし、時間的にいへば、無始劫以來因果遺傳の大法相貫通し居れば、あらゆる出來事皆偶然的ではない。實に宇宙の現象は、因々果々、連環羅網物として、感應術ならざるはなく、事として暗示的影響を與へざるはなしだ。近來に至り催眠上の特殊の徴候を見て、非常に騒ぎ立つたけれど、これは皆枝葉なのである。これらの理を夙に看破せられたる天然先生は、今や更に説法療法を唱道するに至つたのである。余が信心療法に感じたのも、前記の事實のみではない。

第一、家庭に於て無上權を有する親の勢力感化は、子に取りて大なる信心療法である。子供が轉んで泣く、親が其の痛所を摩りて「サ直つたよ」もう痛くはないよといへば、直に泣き止むの類よりして、親がこの理によく注意すれば、現在よりヨリ大なる、

ヨリ確なる教育(一種の催眠術)が出来ると思ふ。  
第二、小學校に於て、師權がよく確立すれば、これまた立派な信心療法が行はれる。余は昔て、授業中、眼球血ばしるほど頭痛のする兒童の頭を、たい摩りて「モウ直つたよ」といつただけで、間もなく快くなしたことが何回もある。

因に記す。催眠術に於て、術者の手及身體が、ヨリ多く接觸するほど利目があると思ふ。蓋相通の縁をこしらへるほど、思念も能く通ずると思ふのである。高等師範某心理學者の直話に、「入學兒童の性れの遅いものは、成るべく機會を求めて抱く法をとれ。抱けば不思議に性れてくる」といつたのは、この消息を洩したものと思ふ。余の浅い經驗でも、施術に臨んでは、先づ頭の頂邊より、足の爪先まで、一旦、残りなく撫摩してかゝると、全身寛ぎて、ヤヌ〜眠りにつきやすいよ。だ。先達ては大無量壽經を讀み、阿彌陀如來の大願中に、立派な催眠術を見出したのである。丁度その理窟なんだ。即その第三十三願觸光柔軟の章に、諸佛世界衆生之類蒙我光明(即思念法有)觸其身者(術)身心柔軟(總部)超過人天(神通)は取りも直さず催眠術の全豹を約説したものである。

右の如き理由よりして、人間の生命たる信仰の應用を研究したら、多大の効果が

あらうかと思ひまして大袈裟にも。

實驗精神療法 終

## 附 録。

### 一、催眠術と宗教。

(催眠術は狹義の他力的宗教なり。)

余は、前號、信心療法の條下に於て、宇宙は一大催眠術場なりとの意見を洩し置きたり。今や、之を反覆するにあらずと雖、前號には、單に、親權、師權の倒證に止りしを以て、更に、之を補説し、尙、進んで、催眠術は、一種の他力的宗教なるを論じ、遂に、普通催眠術は、枝葉の問題にして、其奥底に横はれる、根本的の一大催眠術を解するにあらずんば、枝葉も亦、其効を失ふべきに説及ぼし、而して、宗教てふものが、實に、その大催眠術なるべきを唱道せんと欲するものなり。一たび空間、時間、因果の問題を解し、其離るべからざる密接の關係あるに想到れる人、士は、あらゆる出來事が、皆、その範圍を逸す

る能はざるを了得せん。親權師權は更にも言はじ、政治家が時勢の趣向を察し、宗教家が人心の機微を穿ち、乃至實業家が内外の機運を審にし、永久増殖の基礎を定めんとするに於て、一び宇宙の大原理に觸接し、精神上の研究を積むに於ては、其活力に於て、其薰化力に於て、其洞察力に於て、無限の寶庫を開拓し、無窮のエネルギーを得來るあるべきを信ずるものなり。否、現に、各方面に於て成効し、優に儕輩を抜くの人士は、必ずや紛々塵裡、腦中、別に、綽々たる一乾坤を有し、靈界の一面、確に絶對に直覺し、知らず識らず、精神學の秘鑰を握り、居る人にして、未學ばずといふと、雖、余は之を學びたりといはんと欲するものなり。

更に、之を日常の行事に檢せよ、拈華微笑の玄味、廣長舌相の說法より、語默動靜、一顰一笑、皆其の反響を呈し來るを實見し、關關たる唯鳩も、呦々たる鹿鳴も、潺湲たる溪聲も、颯々たる松籟も、馬の

驅けるも、犬の吼ゆるも、瓦の碎くるも、石の轉ずるも、皆各方面に其波動を印するの現象を觀じ去り、悟り來れば、事々、皆無限の意味を有し、物々、悉精神界裡に活躍し來るの一大美觀は、何物か之に比すべきものやある否、全宇宙皆之れ、精神界裡の表現なれば、既に對待の見地を超越して、全一なり、唯一なり、何ぞ比すべきものあらんや。

嗚呼全一！嗚呼唯一！人、一び、この究竟點に遡り、身、親ら、無限の靈泉を掬し來らば、萬般の人事問題、皆庖丁の牛を解く、それの如くに、眞の解決を得、此世からなる淨邦は、茲に、始めて、建設せられんなり、精神界の研究、豈、夫れ、忽に、すべけんや。

蓋催眠術は、枝葉の問題なり、一時的の技術なり、然り、枝葉の技術に過ぎざるなり、然かも、それすら、尙、宇宙全一の問題に接觸せる人にして、始めて、與に、語るを得べきなり、之を術者の方面より

觀るも、余輩は、技術を練習する前に、先づ、其の術者の人格鍛成(精  
神圓熟)を呼號せんと欲するものなり。人格の鍛成充分なるや、威  
儀自ら備り、徳風自ら薫す。此境界に至る、何ぞ催眠と、無催眠とを  
論ぜん。片言隻語、一舉手一投足と雖、宿痾頓に除かるゝを見ん。單  
に、一瞥を與へしのみにて、優に、薰化の跡を印するを得ん。否、相隔  
つる千里なるも、其風采を想望して、宿痾の愈えしもの多々ある  
に、あらずや。催眠術も、茲に至らざれば、眞の價値を有せざるなり。  
茲に於てか、催眠術は、其意義愈々發展して、心的薰化術となれる  
を見る。心的薰化は、豈、只に、地を隔つる千里なるのみならずや、時  
を異にする幾千年と雖、尙、且、効力絶大にして、相隔る、愈、遠くして、  
光芒、却て、増大するの奇觀を呈するを見るものなり。釋尊を見よ。  
基督を見よ。孔夫子を見よ。幾千年の後、尙、且、殺活自在なる、個々の  
心靈界に於て、靈的生活の中心となり居るにあらずや。余輩、經を

誦し、大聖世尊、成道の條下に至り、其靈的薰化の形容に於て、人格  
の權化を現前に感得するを覺ゆるものなり。諸根悅豫、姿色清淨、  
光顔巍巍、威容顯曜、何たる好辭ぞ。蓋、思内にあれば、色外に顯はる。  
世尊が、菩提樹下に於て、あらゆる悪魔を降伏し、無上の正覺を遂  
げ、賜ひ、天上天下、唯我獨尊と現はれ、玉ひし盛容、想像に堪へざる  
にあらずや。余は、光顔巍巍々の語を誦する毎に、恍惚として、其威容  
に打たれ、現に、其施術(心的薰化)を受けつゝあるを感ずると同時  
に、其語句に對して、忸怩として、冷汗背を浹ほし、心竊に、修養の足  
らざるを嘆ずるものなり。  
讀者諸君、余が所論の、餘りに、茫漠に走りしを、咎め玉ふなかれ。  
いでや、催眠術が、狹義の他力的宗教なるに論じ、到らん。之を被術  
者の方面より見るに、余は、催眠術は、偏に、信仰によりて成り立つ  
ものなるを信ずるものなり。單に、心理學の一方面より論ずるの



徒は、心的豫期作用とのみ説明し去らんかなれども、心的豫期作用は、術者を要せずして、自己、自己を律し得る場合に説明を變化し得るにあらずや。苟も、方術として、術者を要する場合には、將又催眠術を要するものは自己、自己を律する能はざる、疾病者に限る以上は、術者に對する信頼心てふことを外にして、何ぞ、自力的にのみ、説明し去るを得んや。要するに、催眠術の奏効如何は、被術者が術者に對する、信仰の原簿如何にあり、否、一點の疑念ありて、全幅の信頼を捧ぐる、能はざるに於ては、終局の奏効を見ることを得ざる點より見れば、催眠術は、實に、これ、一種の他力的宗教なり。然かも、この宗教たるや、一時的なり、妖怪的なり、姑息的なり、奇道的なり、遂に永久の者ならざるを奈何せむ。

茲に於てか、更に、人生の根本義に立ち返り、余は、一大催眠術を、斯道研究の人にすいめんことを禁ずる能はず、言ふまでもなく、

早く、宗教的安立の地盤を得て、永久の生命を得んことなり。既に、永久の生命を得んか、死、猶生けるが如し、鼎鑊甘きこと、飴の如く、んば、疾病何かあらん。況んや、既に、安心の地を得るに至らば、心身の障礙は、止めんと欲すとも、輻を放れたる駒の如くに逸し去らんのみ。茲に到らば、催眠術果して、何の必要かある。

然りと雖、この境界に到る、實に、人生至難の事たり。然り、至難の事たりと雖、區々たる一疾病のために、生死を賭すべき焦眉の大問題を閑却する如きは、衷心實に、忍ぶ能はざるものあり。余は、一概に催眠術を排斥するものにあらず。又、疾病もとより死病もあらん。然かも、顧みれば、朝露の如き人生は、白骨の御文章を待ちて後知らざるにあらずや。貴賤貧富、智愚賢不肖、必ずや一度は通過すべき、肉體の死滅のために、靈的眞生命を永久闇黒裡に葬る、豈忍ぶを得べきことならんや。人生の慘劇果して、何物か之に比す

るを得べき。現金主義、肉的生活本尊の人等にありては、冷々看過すべからんも、而も、尙、苦言を呈するは、日暮れて道遠しの嘆ある世の苦悶兒に、少許たりとも慰藉を與へんと、余の婆心と知り玉へよ。前號中島師の曰へりし、煩惱の眠をさまして、眞正の安眠を得させん。微意に出づるのみ、左に、日夕奉誦すべき御和讃を掲げむ。

無明長夜の燈炬なり、

智眼くらしとかなしむな。

生死大海の船筏なり、

罪障重しとなげかざれ。

願力無窮にましませば、

罪業深重もおもからず。

佛智無邊にましませば、

散亂放逸もすてられず。

盡十方の無碍光は、

無明のやみをてらしつゝ、

一念歡喜するひとを、

かならず滅度にいたらしむ。

無碍光の利益より、

威徳廣大の信を得て、

かならず煩惱の氷とけ、

すなはち菩提の水となる。

### 二、宗教と人生。

廣き意味にていへば、人生の諸問題は、宗教によりて、始めて眞の解決を得べく、人生即宗教にして分離するを得べきものなら

ねど、今、暫く、科學哲學に對する宗教てふ狹意義よりして、聊、其の關係の論究を試みんと欲す。

本論に入るに先ち、今、少しく、宗教の廣意義と、宗教の起因及其分派とに就きて觀察せん。

抑、宗教を廣義に解すれば、豈、啻に、人生のみに止らんや。科學といはじ、哲學といはじ、宇宙萬象の根本的解釋、所謂、一切の差別的現象を撥無して、太極平等の見地に其立脚地を有するもの、實に、これ、宗教の普遍的眞意義なりとす。太極の發現は、やがて、兩儀を生じ、四象となり、乃至、一切の森羅萬象と現はれ、茲に、差別界の大美觀を形成す。其不可思議の大作用に至りては、實に、これ、絶對無限の靈力にして、最早、思慮を超へ、言語を絶す。奇と言はんか。快と叫ばんか。惟神！惟靈！思、一び、茲に到る。嗒然として醉ふの外なけん。この一大靈力の差別界に發現する點より觀ずれば、草に

は草の眞理を有し、木には木の眞理を含み、猫には猫の眞理あるべく、杓子には杓子の眞理あるべし。而して、この各眞理は、やがてこれ、草の宗教、木の宗教、猫の宗教、杓子の宗教といふを得べからん。然かも、其の眞理を、皆、宗教と名くべくんば、餘りに廣漠にして、遂に差別界を無視したる平等界に立戻るのみにして、所謂、空論と成り了せん。是に於てか、人生問題の解決に對し、特に、宗教てふ名目を附して、人生の一切を律せんと欲する所以なり。

坤輿人類多し。種屬一にして止らざるなり。しかも、横目縦鼻、皆、これ、同じ、直立談笑、他生物に異なる點は皆その揆を一にす。然らば、人類の宗教として、一にして可なるべきも、その種類と、その分派との益多きを加ふるは、そも、これ、何たる理由ぞや。蓋、宗教は、心の作用に屬すること、格物窮理の科學と表裏するものなることは、何人も知る所、而して、其の心たるや、實に、宇宙の縮圖にして、活

活靈妙の作用と現象とに至りては、他の生物無生物界の變幻錯落の現象に優るとも劣るなき不可思議の靈體にして、而して、其個靈の同じからざるは、げに、其の面體の異なるが如きなり。之を同の方面より見れば、或人が戲言せし如く、人心の同じき、其の面の如し。も確かに一面の眞理ならんも、既に、差別界を認容せば、世に同一の二物あること、決して有り得べからざるなり。而してその心たるや、他の形式的作用を以て、強迫的に外部より律し去るを得べきものにあらず。孟子が、三軍可奪帥、匹夫不可奪志といひけん如く、宗教は、所謂、冷煖自知の自覺的地盤に其根底を置かざるべからざるものなるを以て、各宗各派の分立、又實に、已むを得ざる自然の勢なり。將來、或は億萬の人類それごとくに、億萬の宗教成立するあらんも、亦知るべからず。孟子が、不得志獨行其道と叫び、伯夷が、舉世非之、力行而不惑の意氣に至りては、實に、確信的、一

大宗教心の眞體を得たるもの、彼等や、實に、確信の權化なり。苟、此の見地に到達せんか、獨自一己の信念に過ぎずと雖、彼等に於ては、其信念は世界大なり、否、宇宙大なり。豈、これ、一大宗教にあらずや。蓋、宗教の大小は、頭數を以て秤量する底のものにあらず。信念なくんば、尙然たる自稱大宗教も、徒だ、これ、一大形骸に過ぎざるのみ。觸るゝもの接するもの、一切を擧げて、之を燬くがごとき信念と、數學上、如何なる數に零を乗ずるも、皆、これを零化する如く、全世界を同化せずんば、己まざる底の同情心を有するにあらずんば、否、少くとも、假令、狹隘の誹はあれ、蕪然直進、確に、靈界一面の秘鑰を握りたるものにあらずんば、宗教と名くべきにあらずなるなり。宗教の分立、やよし、其の分派、や妨げず。否、これ、必然の情勢なるも、只、動もすれば、宇宙全一の見地を逸出し、太極平等の境界を忘却して、紛々屑々、小競合の醜態を呈するあるを以て、前に、紛

紛たる小宗教の題下に之れが戒飭を試みられし所以なり。  
 (七八)  
 いでや、本論に推し移りて、宗教心の起因と、その必要とを略述  
 し、人生の歸趣を味はんかな。  
 人生ほど不可測のものあらじ。事聽かれ計用られ、食前方  
 丈、侍妾數百人、此世をば我世とぞ思ふ時勢の寵兒にありては、宗  
 教の必要なるべきが如くなるも、賣家と唐様で書く三代目の  
 諺の如き、有爲轉變夢幻の人生は、歴史を待たずして、眼前に歴々  
 分明なる實状を供するに於ては、誰れか深夜一點の悽涼を催さ  
 ざるものやあるよし、榮華の夢未醒めざる内こそあれ、時間てふ  
 大敵は、遂に死といふ最後の權威者を送りて、一切を皆空ならし  
 めずんば措かざるにあらずや。昔し、双ヶ岡の法師は、如何に人生  
 の頼み少きを喝破されしか。誰れも知る所なれども、其の一節を  
 左に抄出せん。

萬の事は頼むべからず。愚なる人は、ふかく物を頼むゆゑに、怨  
 みいかる事あり。いきほひありとて頼むべからず。こは物先ほ  
 ろぶ財多しとて頼むべからず。孔子も時にあはず。徳ありとて頼むべからず。  
 て頼むべからず。孔子も時にあはず。徳ありとて頼むべからず。  
 顔回も不幸なり。き君の寵をもたのむべからず。誅をうくる事  
 速なり。奴したがへりとてたのむべからず。背きはしる事あり。  
 人の志をもたのむべからず。必變ず。約をも頼むべからず。信あ  
 る事すくなし。中略。人は天地の靈なり。天地はかぎる所なし。人  
 の性なんぞ異ならん。寛大にしてきはまらざる時は、喜怒是に  
 さはらずしてものためわづらはず。

讀者よ、法師の語をもて、徒に厭世の語と冷笑する勿れ。眞の厭世  
 ならずんば、眞の樂天なる能はざるなり。事物皆其の裏面を有す  
 ることを、かりにも忘るべからず。名利の後には窮境あり。權勢の

裏には墮落あり。余が所謂厭世は、口に浮世を捨てたりと稱して、心に愛慾の羈をたつ能はざる、自墮落者流、隱遁者連を指すにあらず。蓋、眞に世間を解脱して、始めて世間に對して、無碍の態度となるを得べく、心境無碍なれば、其活動や亦無限なり。故に大活動は眞の厭世家にして、初めて能くすべきなり。近代の偉傑西郷南州いはずや。

命も入らず、名も入らず、官位も、金も入らぬ人は、仕末に困るもの也。此の仕末に困る人ならでは、艱難を共にして、國家の大業は成し得られぬなり云々。

と、かく不敵の荒言の觀あると共に、而も、其の一面に於ては、上に立つもの、身を慎み、己を虚ふし、下民其の勤勞を氣の毒に思ふ様ならでは、政令は行はれ難し。云々(遺忘せしにつき、省略)の如く、情義兼ね備はる日本武士の典型を、余は、實に、南洲翁に於て之れを見るものなり。而して、これ、實に、出世間の眞意義、無我の活動の、彼れの口によりて、迸しり出でたる金玉の美音と知らずや。

兎に角、物質界は、遂に精神界に究竟の慰安を與ふるものにあらず。讀者よ、前法師の語の反面には、慥に一大光明の耀くあるを、看破せずや。否、實に一大光明土に導く唯一の繩索たるを、感知せずや。以下、又、少しく之れを説くべきも、今暫く徘徊願望の暇を與へよ。

蓋、權勢にまれ、財産にまれ、詮じ來れば、皆、情界の對象として、價値を有するに過ぎざるもの、所謂、義理の利刀、倫理上の正善は、最後に之れを截斷するを得べきなり。而も、倫理上の正善は、人類が社會的なるに於て、初めて有力なるを得るものにして、離群索居の孤島的生活に於ては、遂に何等の意義をも有せざるなり。孤島

的。生。活。に。於。て。も。死。て。ふ。一。大。厄。難。は。遂。に。か。免。る。を。得。ず。然。り。  
鳴。呼。死。！ 死。！ 死。！ 人。生。一。切。の。問。題。最。後。に。死。て。ふ。關。門。に。到。達。  
せ。ず。ん。ば。止。ま。さ。る。な。り。人。は。一。代。名。は。末。代。の。名。諺。は。死。以。外。の。名。  
譽。と。の。み。思。ひ。去。る。な。か。れ。名。は。末。代。の。義。下。に。古。來。如。何。に。永。久。の。  
生。命。を。憧。憬。し。來。り。し。よ。鳴。呼。不。死。！ 不。死。！ 不。死。！ 宗。教。の。根。本。要。  
義。實。に。斯。に。あ。り。鳴。呼。實。に。斯。に。在。り。

人生の不如意法師の言を待て後知らざるにあらず。普通に宗  
教に入るの門として、この不如意を以てし、或るものは、これを無  
常觀、罪惡觀、意志觀、智識觀に分つものあり。何れも不可なるを見  
ず。寺門に生れたるものなど、漸々薰習の力、自然に宗教の門に入  
るものあれども、余は、それらは、切實の意義に於て宗教と名くる  
を欲せざる感を抱くものなり。況んや、彼等は、却て死の問題の解  
決に對して、心的激變の興趣少く、俗人に劣る似而非信心を有す。

るもの多きにあらずや、何れかといへば、右の四種の中に於て、罪  
惡觀こそ、比較的に切實の意味を表はせば、余は、嘗て、宗教は罪惡  
觀の所生なりと叫びし事あるも、尙、死の問題の一切を通じて切  
實なるに如かざるを感ずるものなり。心的革命語を替へて言へ  
ば、永久の生命を得るを、宗教の切實なる意義と解する。余輩は、人  
生の第一の目的は、死せざるにありて、宗教はその解決を與ふる  
ものなるを信ずるものなり。

本會附屬の事業として、催眠術を施すあり。これに對して、催眠  
術は一時的なり、永久的なり、などの爭論もあれど、素、これ、泡沫に  
等しき肉體の上に止まるものにして、結局、單に、疾病に勝つに過  
ぎざるなり。よし、疾病に勝つとするも、死に勝つ能はざるにあら  
ずや、余は常に謂ふ。催眠術は、疾病に勝つ術なり。宗教は、死に勝つ  
法なり。と、此言非なるか。

宗教の教義を談じ、學理を説く。別に其の人あり。何ぞ黃吻余輩  
 の喋々を要せんや。又何んぞ、今更めかしく、宗教の必要を説くを  
 好まんや。然りといへども、近時本會に治療を乞ひ來る人士の中、  
 充分の學識ある人にして、片言宗教の事に及べば、忽擧蹙するも  
 のあり。而して、區々たる顛倒想に、自己、自己を束縛し居るを覺ら  
 ざるを見ては、衷心實に痛悼を禁ずる能はざるものあり。豈これ  
 らの患者のみならんや。滔々たる世間、皆心的大患に犯されつゝ、  
 あるなり。孟子が指不<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>人、則不<sup>レ</sup>遠<sup>レ</sup>秦楚之路。心不<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>人、不知<sup>レ</sup>恥と、慨  
 せしがごとく、迷信てふ名の下に、あはれ、人生の大問題たる宗教  
 を閉却し、我れと我が纏縛に泣きつゝあることの哀れさよ。眞宗  
 中興の祖蓮如上人、その一生を傳道に費し、今度の一大事と、  
 當時の人心を警醒されし雷音は、今、尙、耳邊に響くを聞かずや。佛  
 教八萬四千の法門、詮じ來れば、皆これ、自然の大道を闡明するに

あり。自力他力は問ふを要せざるなり。語を替へて言へば、人生の  
 執着を去るなり。尙切言すれば、生死を解脱するにあり。余は絶對  
 の他力を信ずるものなれども、所謂、自他の他力にあらずして、絶  
 對の他力なり。然かも敢て自力教を貶するにあらず。又何ぞ耶蘇  
 教を否とせんや。回教を誹らんや。究竟する所、絶對は全一にして、  
 二あるにあらざるなり。何ぞ區々たる末流の見解を問ふの違あ  
 らんや。釋尊の四十九年一字不説の眞味、今更、其の奥床しきを感じ  
 ずるものなり。達磨の不立文字、我が親鸞上人の無義の義、自然法  
 爾、皆、天來の福音にして、異語同義、分別する能はざるなり。  
 大凡、分別する能はざるものを、強いて分別せんとするが故に、  
 迷誤生じ、昏冥來る。絶對は何處迄も絶對にして、不可解なり。其の  
 迷誤煩惱は、人間の、小智を以て、即、自己の寸法を以て、絶對を揣摩  
 したる、語を換へて言へば、如來の仕事を竊みたる、靦面の冥罰な



り。何事も如來に任せ奉る。如來は必ずよきに計はせ玉はん。これ  
余が信條なり。樂夫天命復奚疑との陶淵明の語も、實にこの味を  
言ひしものと覺ゆ。

又世には成效を説くものあり。借問す。成效果して何事を意味  
するか。世に人力にて成し得る者、果して何事かあるか。言はゞ、  
人生の活動を停止する如き暴言と評する者もあらん。成る程、表  
面の觀に於ては、無理もなき評の如くなれども、少しく眞摯に觀  
じ來れば、一として人力以上、自然の大勢力が、事と現はれ、物とな  
り、力と動く、一大冥動の勢力下にあらざるものやある。嗚呼、成效  
！成效！この二字ほど、直接人心を搖動せしむるものあらざる  
なり。成效を望む、素これ、一大迷誤に過ぎざるなり。往生は如來の  
なさしめ給ふことなれば、決して自らの計らひあるべからず候  
と親鸞上人の鐵案を下し玉ひしこと、孟子が「若夫成效天也」と

曰ひ、諸葛亮が「至成敗、利鈍、非臣之明、所豫料也」との表文の如く總  
じて、如來を信じ、自然の大作用を悟れるものにおいて、成效の  
如何を憂ふることあるべからざるなり。西諺の「成效は目的にあ  
らず、結果なり」との語、亦よく、這般の消息を穿てるを見る。

余前には、人生の目的は死せざるにあり。てふことを説けり。如  
何にして死せざるを得るか。死を解脱するにあり。而して死を解  
脱するの最捷法は、如來を信ずるにあり。人生の歸趣の第一味は、  
實に如來を信ずるにあり。余は他力の妙味を鼓吹したく欲すれ  
ども、今は楮端の許さざるを如何せん。そは他日を俟ちて論ずる  
こととせん。

最後に、少しく所論を補述せんとす。何ぞや。所謂「死せざるにあ  
り」との語は、「生くるにあり」との語と一なるを知れよ。既に死せず  
んば即生くるなり。如何にして生くべきか。本誌第三號、大内青巒

居士の安慰の章の一節を更に抄出せん。某宗旨の高祖の言に、  
「入身得ること難し。佛法遇ふこと稀なり。今我等宿善の助くる  
に依て、已に受け難き人身を受けたるのみにあらず、遇ひ難き  
佛法に遇ひたてまつれり。生死の中の善生最勝の生なるべし。  
最勝の善身を徒づらにして、露命を無常の風に任することな  
かれ。」

とあり。然り最勝の善身を徒らにせざるにあり。又、  
「今度の往生を一定して、其後人間の有様に任せて世を過ぐす  
べきこと肝要なり」と、皆々心得べし。」

との如く、人間の有様に任せて世を過ぐすべきにあり。  
再言すれば、如來の最勝の善身として生れさせ玉へる大慈恩  
を喜び畏み、各其の職とする所に粉骨碎身するにあり。大乘の極  
致斯にあり。而して宗教の極致亦斯にあり。人生の歸趣亦々實に

斯にあり。

如來大悲の恩徳は、

身を粉にしても報ずべし。

師主知識の恩徳も、

ほねをくだきても謝すべし。

### 三、患者諸君に與ふるの書。

宗教と人生續篇——絶對他力に論及す。

任天泣血頓首謹みて患者諸君に告ぐる所あらんと欲す。諸君

坦壞少しく容るゝあらば幸甚。

霧を喰ひ、雲に乗り、童顔鶴髮朝に徐福と蓬萊に遊び、夕に浦島  
と龍宮に戯るゝ仙人ならばいさ知らず。人生七十古來稀の蜉蝣  
的生涯を有し、然かも、それすら、老少不定、出づる息は入る息を待

たぬ。露の命の我れ人！之を刺せば直ちに血を見少しく度を過  
 せば忽地痛苦を感じる。極脆極弱の肉身を有する吾人々類！げ  
 にや。四百四種の病苦に呻吟するは、肉の人間としては、實に無理  
 もなきことぞかし。疾痛慘怛、未嘗不呼父母と古人のいひしは、げ  
 に人間の至情、三界の凡心を喝破したる叫聲ならずや。余輩は、患  
 者諸君が痛苦を訴へ来る毎に、同情の熱涙、滂沱たるを禁ずる能  
 はざると同時に、諸君が靈の父母を呼ぶ念の、切實ならざるを異  
 しむものなり。否、病症の輕重こそあれ、身に既に痛苦を感じる以  
 上は、人間の有限微力を感じ來りて、絶對無限の大力に籍らざる  
 を得ざる實證にあらずや。否々絶對の大力は、夙に、其慈悲の御手  
 を伸ばし、久遠の哀愍を垂れ玉ひつゝあるを感知せずや。  
 肉の父母を呼ぶの至情は、最早、其間、一點の我執を容れず。惟醇  
 ！惟眞！取りも直さず、靈の父母を渴仰する衷心の喚聲と、一に

して決して二ならざるなり。

本會事業の一として、余輩精神療法を行ふ日、尙淺しといへど  
 も、不測の奇効を奏せしもの、一にして足らず。而して、其の方術の  
 處置、病勢の經過等に就て之を察するに、生理病理等、醫學的の推  
 理を逸すること、往々あるのみならず、時には、全く、相背馳するこ  
 とすらなしとせず。而して、余輩、多くは、其奏効を、思念の集注、心的  
 豫期作用等にのみ歸して、漫然として看過し來りき。日を過ぎ、月  
 を重ね、夥多の患者に接して、心的状態の變化を察し、病狀の進行  
 を察するに、閃々たる一道の靈光は、坐ろに、余をして深く思を潜  
 めしむるに至りぬ。平たく言へば、これたゞ事にあらざるを感ぜ  
 しめぬ。頃日來、施療上宿昔の疑團、否、寧ろ漫然として看過せし所  
 の精神療法に對し、革命的見解を表白するの止むを得ざるに至  
 らしめぬ。何ぞや。曰く、精神療法として、催眠術は、決して萬能のも

の<sup>○</sup>に<sup>○</sup>あ<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>ず<sup>○</sup>否<sup>○</sup>施<sup>○</sup>術<sup>○</sup>して<sup>○</sup>治<sup>○</sup>し<sup>○</sup>得<sup>○</sup>たり<sup>○</sup>と<sup>○</sup>せ<sup>○</sup>し<sup>○</sup>も<sup>○</sup>の<sup>○</sup>露<sup>○</sup>程<sup>○</sup>も<sup>○</sup>余<sup>○</sup>輩<sup>○</sup>の<sup>○</sup>力<sup>○</sup>  
 に<sup>○</sup>あ<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>ざ<sup>○</sup>る<sup>○</sup>こ<sup>○</sup>と<sup>○</sup>、<sup>○</sup>こ<sup>○</sup>れ<sup>○</sup>な<sup>○</sup>り<sup>○</sup>。然<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>ば<sup>○</sup>、何<sup>○</sup>が<sup>○</sup>爲<sup>○</sup>め<sup>○</sup>に<sup>○</sup>治<sup>○</sup>す<sup>○</sup>べ<sup>○</sup>き<sup>○</sup>か<sup>○</sup>。云<sup>○</sup>ふ<sup>○</sup>ま<sup>○</sup>  
 だ<sup>○</sup>も<sup>○</sup>な<sup>○</sup>く<sup>○</sup>、自<sup>○</sup>然<sup>○</sup>の<sup>○</sup>大<sup>○</sup>作<sup>○</sup>用<sup>○</sup>の<sup>○</sup>外<sup>○</sup>あ<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>ざ<sup>○</sup>る<sup>○</sup>な<sup>○</sup>り<sup>○</sup>。あ<sup>○</sup>い<sup>○</sup>、宇<sup>○</sup>宙<sup>○</sup>間<sup>○</sup>萬<sup>○</sup>千<sup>○</sup>の<sup>○</sup>活<sup>○</sup>  
 動<sup>○</sup>、皆<sup>○</sup>こ<sup>○</sup>れ<sup>○</sup>、絶<sup>○</sup>對<sup>○</sup>自<sup>○</sup>然<sup>○</sup>の<sup>○</sup>靈<sup>○</sup>力<sup>○</sup>の<sup>○</sup>發<sup>○</sup>現<sup>○</sup>す<sup>○</sup>る<sup>○</sup>所<sup>○</sup>、此<sup>○</sup>の<sup>○</sup>間<sup>○</sup>、毫<sup>○</sup>釐<sup>○</sup>の<sup>○</sup>人<sup>○</sup>力<sup>○</sup>を<sup>○</sup>容<sup>○</sup>  
 れ<sup>○</sup>ざ<sup>○</sup>る<sup>○</sup>な<sup>○</sup>り<sup>○</sup>。其<sup>○</sup>の<sup>○</sup>人<sup>○</sup>力<sup>○</sup>と<sup>○</sup>感<sup>○</sup>ず<sup>○</sup>る<sup>○</sup>所<sup>○</sup>の<sup>○</sup>も<sup>○</sup>の<sup>○</sup>は<sup>○</sup>、只<sup>○</sup>、一<sup>○</sup>に<sup>○</sup>、自<sup>○</sup>然<sup>○</sup>の<sup>○</sup>大<sup>○</sup>力<sup>○</sup>に<sup>○</sup>  
 順<sup>○</sup>應<sup>○</sup>す<sup>○</sup>る<sup>○</sup>に<sup>○</sup>あ<sup>○</sup>り<sup>○</sup>て<sup>○</sup>、鵠<sup>○</sup>の<sup>○</sup>毛<sup>○</sup>、羊<sup>○</sup>の<sup>○</sup>毛<sup>○</sup>、ほ<sup>○</sup>ど<sup>○</sup>も<sup>○</sup>、人<sup>○</sup>間<sup>○</sup>の<sup>○</sup>力<sup>○</sup>に<sup>○</sup>て<sup>○</sup>、自<sup>○</sup>然<sup>○</sup>力<sup>○</sup>を<sup>○</sup>  
 變<sup>○</sup>易<sup>○</sup>し<sup>○</sup>能<sup>○</sup>ふ<sup>○</sup>も<sup>○</sup>の<sup>○</sup>に<sup>○</sup>あ<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>ざ<sup>○</sup>る<sup>○</sup>こ<sup>○</sup>と<sup>○</sup>を<sup>○</sup>切<sup>○</sup>に<sup>○</sup>感<sup>○</sup>じ<sup>○</sup>來<sup>○</sup>れ<sup>○</sup>り<sup>○</sup>。因<sup>○</sup>果<sup>○</sup>の<sup>○</sup>理<sup>○</sup>法<sup>○</sup>  
 萬<sup>○</sup>法<sup>○</sup>相<sup>○</sup>互<sup>○</sup>の<sup>○</sup>關<sup>○</sup>係<sup>○</sup>は<sup>○</sup>、皆<sup>○</sup>こ<sup>○</sup>れ<sup>○</sup>、絶<sup>○</sup>對<sup>○</sup>の<sup>○</sup>計<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>ひ<sup>○</sup>に<sup>○</sup>し<sup>○</sup>て<sup>○</sup>、施<sup>○</sup>術<sup>○</sup>し<sup>○</sup>て<sup>○</sup>治<sup>○</sup>癒<sup>○</sup>せ<sup>○</sup>  
 し<sup>○</sup>む<sup>○</sup>る<sup>○</sup>も<sup>○</sup>、只<sup>○</sup>、絶<sup>○</sup>對<sup>○</sup>に<sup>○</sup>順<sup>○</sup>應<sup>○</sup>せ<sup>○</sup>し<sup>○</sup>む<sup>○</sup>る<sup>○</sup>緣<sup>○</sup>を<sup>○</sup>與<sup>○</sup>ふ<sup>○</sup>る<sup>○</sup>も<sup>○</sup>の<sup>○</sup>、否<sup>○</sup>、そ<sup>○</sup>の<sup>○</sup>緣<sup>○</sup>を<sup>○</sup>與<sup>○</sup>  
 へ<sup>○</sup>し<sup>○</sup>む<sup>○</sup>る<sup>○</sup>も<sup>○</sup>、亦<sup>○</sup>こ<sup>○</sup>れ<sup>○</sup>、絶<sup>○</sup>對<sup>○</sup>の<sup>○</sup>作<sup>○</sup>用<sup>○</sup>た<sup>○</sup>る<sup>○</sup>を<sup>○</sup>感<sup>○</sup>じ<sup>○</sup>つ<sup>○</sup>い<sup>○</sup>あ<sup>○</sup>る<sup>○</sup>も<sup>○</sup>の<sup>○</sup>な<sup>○</sup>り<sup>○</sup>。  
 故<sup>○</sup>に<sup>○</sup>、精<sup>○</sup>神<sup>○</sup>療<sup>○</sup>法<sup>○</sup>に<sup>○</sup>し<sup>○</sup>て<sup>○</sup>病<sup>○</sup>氣<sup>○</sup>の<sup>○</sup>治<sup>○</sup>否<sup>○</sup>を<sup>○</sup>豫<sup>○</sup>言<sup>○</sup>し<sup>○</sup>得<sup>○</sup>る<sup>○</sup>こ<sup>○</sup>と<sup>○</sup>の<sup>○</sup>、決<sup>○</sup>し<sup>○</sup>て<sup>○</sup>  
 能<sup>○</sup>は<sup>○</sup>ざ<sup>○</sup>る<sup>○</sup>よ<sup>○</sup>り<sup>○</sup>す<sup>○</sup>れ<sup>○</sup>ば<sup>○</sup>、施<sup>○</sup>術<sup>○</sup>萬<sup>○</sup>能<sup>○</sup>を<sup>○</sup>言<sup>○</sup>ひ<sup>○</sup>能<sup>○</sup>ふ<sup>○</sup>の<sup>○</sup>理<sup>○</sup>な<sup>○</sup>く<sup>○</sup>、寧<sup>○</sup>ろ<sup>○</sup>、治<sup>○</sup>せ<sup>○</sup>ざ<sup>○</sup>  
 る<sup>○</sup>も<sup>○</sup>の<sup>○</sup>は<sup>○</sup>、治<sup>○</sup>せ<sup>○</sup>ざ<sup>○</sup>る<sup>○</sup>も<sup>○</sup>の<sup>○</sup>と<sup>○</sup>し<sup>○</sup>て<sup>○</sup>、其<sup>○</sup>間<sup>○</sup>に<sup>○</sup>、無<sup>○</sup>限<sup>○</sup>の<sup>○</sup>意<sup>○</sup>味<sup>○</sup>を<sup>○</sup>有<sup>○</sup>す<sup>○</sup>る<sup>○</sup>こ<sup>○</sup>と<sup>○</sup>

な<sup>○</sup>る<sup>○</sup>べ<sup>○</sup>く<sup>○</sup>、而<sup>○</sup>し<sup>○</sup>て<sup>○</sup>、患<sup>○</sup>者<sup>○</sup>は<sup>○</sup>、病<sup>○</sup>苦<sup>○</sup>の<sup>○</sup>治<sup>○</sup>否<sup>○</sup>を<sup>○</sup>外<sup>○</sup>に<sup>○</sup>し<sup>○</sup>、否<sup>○</sup>、一<sup>○</sup>切<sup>○</sup>を<sup>○</sup>絶<sup>○</sup>對<sup>○</sup>に<sup>○</sup>乘<sup>○</sup>  
 託<sup>○</sup>し<sup>○</sup>、順<sup>○</sup>應<sup>○</sup>し<sup>○</sup>て<sup>○</sup>、そ<sup>○</sup>こ<sup>○</sup>に<sup>○</sup>無<sup>○</sup>限<sup>○</sup>の<sup>○</sup>慰<sup>○</sup>安<sup>○</sup>を<sup>○</sup>得<sup>○</sup>べ<sup>○</sup>く<sup>○</sup>、永<sup>○</sup>久<sup>○</sup>の<sup>○</sup>生<sup>○</sup>命<sup>○</sup>、亦<sup>○</sup>、新<sup>○</sup>に<sup>○</sup>得<sup>○</sup>  
 ら<sup>○</sup>る<sup>○</sup>べ<sup>○</sup>し<sup>○</sup>。茲<sup>○</sup>に<sup>○</sup>到<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>ば<sup>○</sup>、病<sup>○</sup>苦<sup>○</sup>そ<sup>○</sup>の<sup>○</sup>ま<sup>○</sup>い<sup>○</sup>、無<sup>○</sup>病<sup>○</sup>と<sup>○</sup>な<sup>○</sup>る<sup>○</sup>べ<sup>○</sup>く<sup>○</sup>、一<sup>○</sup>切<sup>○</sup>の<sup>○</sup>病<sup>○</sup>苦<sup>○</sup>  
 茲<sup>○</sup>に<sup>○</sup>始<sup>○</sup>め<sup>○</sup>て<sup>○</sup>絶<sup>○</sup>滅<sup>○</sup>す<sup>○</sup>べ<sup>○</sup>き<sup>○</sup>な<sup>○</sup>り<sup>○</sup>。蓋<sup>○</sup>精<sup>○</sup>神<sup>○</sup>療<sup>○</sup>法<sup>○</sup>の<sup>○</sup>奧<sup>○</sup>秘<sup>○</sup>、こ<sup>○</sup>の<sup>○</sup>外<sup>○</sup>に<sup>○</sup>あ<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>ざ<sup>○</sup>  
 る<sup>○</sup>べ<sup>○</sup>き<sup>○</sup>を<sup>○</sup>、余<sup>○</sup>は<sup>○</sup>、絶<sup>○</sup>叫<sup>○</sup>せ<sup>○</sup>ん<sup>○</sup>と<sup>○</sup>欲<sup>○</sup>す<sup>○</sup>る<sup>○</sup>所<sup>○</sup>以<sup>○</sup>な<sup>○</sup>り<sup>○</sup>。  
 以<sup>○</sup>上<sup>○</sup>、所<sup>○</sup>論<sup>○</sup>少<sup>○</sup>し<sup>○</sup>く<sup>○</sup>廣<sup>○</sup>漠<sup>○</sup>に<sup>○</sup>失<sup>○</sup>し<sup>○</sup>て<sup>○</sup>、直<sup>○</sup>接<sup>○</sup>痛<sup>○</sup>苦<sup>○</sup>に<sup>○</sup>泣<sup>○</sup>く<sup>○</sup>患<sup>○</sup>者<sup>○</sup>諸<sup>○</sup>君<sup>○</sup>に<sup>○</sup>は<sup>○</sup>、  
 或<sup>○</sup>は<sup>○</sup>切<sup>○</sup>實<sup>○</sup>の<sup>○</sup>感<sup>○</sup>を<sup>○</sup>與<sup>○</sup>へ<sup>○</sup>ざ<sup>○</sup>る<sup>○</sup>か<sup>○</sup>の<sup>○</sup>感<sup>○</sup>あ<sup>○</sup>れ<sup>○</sup>ば<sup>○</sup>、更<sup>○</sup>に<sup>○</sup>、手<sup>○</sup>近<sup>○</sup>き<sup>○</sup>所<sup>○</sup>よ<sup>○</sup>り<sup>○</sup>、諸<sup>○</sup>君<sup>○</sup>  
 を<sup>○</sup>警<sup>○</sup>醒<sup>○</sup>す<sup>○</sup>る<sup>○</sup>あ<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>ん<sup>○</sup>と<sup>○</sup>欲<sup>○</sup>す<sup>○</sup>。  
 諸<sup>○</sup>君<sup>○</sup>！昔<sup>○</sup>者<sup>○</sup>、一<sup>○</sup>休<sup>○</sup>禪<sup>○</sup>師<sup>○</sup>元<sup>○</sup>旦<sup>○</sup>に<sup>○</sup>際<sup>○</sup>し<sup>○</sup>、枯<sup>○</sup>髑<sup>○</sup>體<sup>○</sup>を<sup>○</sup>竿<sup>○</sup>上<sup>○</sup>に<sup>○</sup>貫<sup>○</sup>き<sup>○</sup>、戸<sup>○</sup>毎<sup>○</sup>に<sup>○</sup>、  
 御<sup>○</sup>用<sup>○</sup>心<sup>○</sup>く<sup>○</sup>と<sup>○</sup>叫<sup>○</sup>び<sup>○</sup>廻<sup>○</sup>り<sup>○</sup>し<sup>○</sup>事<sup>○</sup>、誰<sup>○</sup>れ<sup>○</sup>も<sup>○</sup>知<sup>○</sup>る<sup>○</sup>有<sup>○</sup>名<sup>○</sup>の<sup>○</sup>話<sup>○</sup>な<sup>○</sup>る<sup>○</sup>が<sup>○</sup>、余<sup>○</sup>輩<sup>○</sup>は<sup>○</sup>、  
 蓮<sup>○</sup>如<sup>○</sup>上<sup>○</sup>人<sup>○</sup>の<sup>○</sup>今<sup>○</sup>度<sup>○</sup>の<sup>○</sup>一<sup>○</sup>大<sup>○</sup>事<sup>○</sup>の<sup>○</sup>叫<sup>○</sup>聲<sup>○</sup>と<sup>○</sup>共<sup>○</sup>に<sup>○</sup>、現<sup>○</sup>に<sup>○</sup>、沈<sup>○</sup>痛<sup>○</sup>に<sup>○</sup>、鼓<sup>○</sup>膜<sup>○</sup>を<sup>○</sup>打<sup>○</sup>つ<sup>○</sup>  
 を<sup>○</sup>感<sup>○</sup>じ<sup>○</sup>來<sup>○</sup>り<sup>○</sup>て<sup>○</sup>は<sup>○</sup>、更<sup>○</sup>に<sup>○</sup>、諸<sup>○</sup>君<sup>○</sup>の<sup>○</sup>耳<sup>○</sup>邊<sup>○</sup>容<sup>○</sup>捨<sup>○</sup>な<sup>○</sup>く<sup>○</sup>、御<sup>○</sup>用<sup>○</sup>心<sup>○</sup>を<sup>○</sup>叫<sup>○</sup>ぶ<sup>○</sup>を<sup>○</sup>禁<sup>○</sup>ず<sup>○</sup>  
 る<sup>○</sup>能<sup>○</sup>は<sup>○</sup>ざ<sup>○</sup>る<sup>○</sup>な<sup>○</sup>り<sup>○</sup>。

醫家は、肉身の病苦を四百四病といひ、佛者は、心的煩惱を八萬四千と稱す。然かも、其の輕重一ならず。隨て、受術者の心的感受、亦同じからず。本會が、患者に對して、實驗する方術、亦同じからず。故に、今、殊更に、諸君に向ひて、説かんとする條件も、一律なるを得ずといへども、只、根本無明に向つて一鍼を投じなば、自餘の輕症は、自、解け去るべきを信すれば、茲に、余は、衷心の披瀝を試みんとする所以なり。

何をか根本無明といふ。釋尊は教へて曰く、諸の苦は身あるに因ると、既に身あり、三毒五慾隨ひて起る。生の從來する所、死の趣向する所、更に明かならず。八萬四千の煩惱競ひ起るに至るなり。然かも、身は苦の本たる故に、現在の肉身を捨てよ、徒に世間を厭へよとの眞意にあらず。只、生死を解脱し、肉にありて肉に着する勿れとの意なり。蘇東坡がいひけん、人以顛倒想、出沒生死之中も

げに、さる事ぞかし。されど、一口に生死とはいへ、生ある中は諸慾望の起るは免れ難き所、唯、よく、死を以て之に臨むによりて、初めて之を警醒するを得べし。

蓋、如何なる病苦も死より重きはなし。頃日胃痛及心臓辨膜閉鎖不全など、即、所謂、醫家不治の症と目せらるゝものゝ來る毎に余は、非常に、心を動かしつゝあり。而して、それらの多くは、無宗教の人にあるがごとし。而して、醫師の宣告を受くると同時に、忽、其度を失ひ、遂による所なきに至るや、必ず、何か一の絶対依憑物を攫まんとするが如し。これ、實に、宗教的求道心が、人類衷心の希求に出づるを知るに足る。何よりの證左にあらずや。而して、其心的煩悶の度は、憔悴したる顔色と共に、坐ろに涙の泣然たるを禁ずる能はざるなり。

患者諸君！請ふ唾眉刮目せよ！醫家不治の症は、萬一の治癒

なきを保し難し、現に、某肺患二人は、皆醫師の宣告を受けし以來、忽、藥療を却け、一人は、成田の不動に、水垢離を取りて全治し、一人は、死ぬ覺悟にて、無暗に、嗜好の飲食を攝取して、遂に健體に復し、共に、現に、生存せるを余は目撃せり、其他、之に類するの實例乏からず、然るに、吾人は、醫師の宣告以上、例へ、大地を打外すとありとも、遂に、免るゝ能はざる、一大不治の症なる、死といふものを、眼前に、控へ、居るを、氣付かずや、而して、この不治の症たるや、一年有半を、待たざる、瞬刻の後には、治者、患者、忽ち、地を換ふるも、測るべからざる、然かも、確に、何時か來るべき、一大症にあらずや、然り、死の免かれ難きは、誰れも知る所、然かも、誰人も、必、百年の生命を保ち得るか、の如くに、誤信して、坤圓球上、一秒間、幾萬の北邙山上の烟間は、皆、自己の身の上なるを、感ぜざるもの、滔々として、皆、これなり。

も、尙、且つ、徒に、死屍を、哭するに、過ぎずして、自家頭上に、感ずるもの、すら、極めて、稀れなるを見ては、余は、今更の如く、御用心を、叫ばざるを得ざるなり、而して、この大症たるや、呱呱の聲を、擧ぐると共に、いと、嚴かに、宣告されし者にあらずや、余輩、之れを、思ふことに、諸君に、施術することの、空恐しきを感じると共に、切に、解脱の門に、走らざるを得ざるを、感ずるものなり、  
熟々、觀ずれば、吾人は、實に、念々に、生れ、念々に、死するなり、而して、其、念々の、念て、ふものも、亦、捕捉するを得ず、吾人は、遂に、如露如幻、一切、空なり、禪家の、所謂、本來、無我なり、四大、五蘊の、假和合に、過ぎざるなり、  
引きよせて、むすべ、草の、いほりなり、とくれば、もとの、野原なり、けり、  
茲に至りて、余は、一の自己、一の自力を見出す能はず、滿眼映する

所。唯。一。絶。對。あ。る。の。み。然。か。も。平。等。と。差。別。と。は。體。元。と。二。あ。る。に。あ。ら。ず。唯。絶。對。平。等。の。見。地。に。立。ち。て。差。別。界。の。解。決。を。な。す。も。の。即。宗。教。に。し。て。而。し。て。萬。人。が。萬。人。宗。教。の。埒。外。に。逸。す。る。能。は。ず。し。て。疾。痛。慘。怛。未。嘗。不。呼。父。母。の。最。後。の。叫。聲。を。發。す。る。所。以。な。り。

唯。そ。れ。絶。對。他。力。な。り。生。け。る。も。死。す。る。も。病。む。も。苦。し。む。も。樂。し。む。も。悲。し。む。も。皆。こ。れ。絶。對。の。妙。用。な。れ。ば。一。切。を。舉。げ。て。之。に。乘。託。し。た。る。時。茲。に。所。謂。無。量。壽。と。な。る。な。り。疾。患。の。治。否。は。最。早。問。ふ。所。に。あ。ら。ざ。る。な。り。故。清。澤。滿。之。師。一。大。鐵。案。を。下。し。て。絶。對。他。力。の。大。道。を。唱。道。さ。れ。て。曰。く、

自。己。と。は。他。な。し。絶。對。無。限。の。妙。用。に。乘。託。し。て。任。運。に。法。爾。に。此。現。前。の。境。遇。に。落。在。せ。る。も。の。即。是。な。り。

唯。そ。れ。絶。對。無。限。に。乘。託。す。故。に。生。死。の。事。亦。憂。ふ。る。に。足。ら。ず。死。生。尙。且。つ。憂。ふ。る。に。足。ら。ず。如。何。に。況。ん。や。之。よ。り。而。下。な。る。事。項。

に。於。て。お。や。追。放。可。也。獄。牢。甘。ん。ず。べ。し。誹。謗。擯。斥。許。多。の。凌。辱。豈。意。に。介。す。べ。き。も。の。あ。ら。ん。や。我。等。は。寧。ろ。只。管。絶。對。無。限。の。我。等。に。賦。與。せ。る。も。の。を。樂。ま。ん。か。な。

嗚。呼。何。た。る。大。確。信。ぞ。や。又。和。讚。に。い。は。ず。や。

煩。惱。具。足。と。信。知。し。て、  
本。願。力。に。乘。ず。れ。ば、  
す。な。は。ち。穢。身。す。て。は。て、  
法。性。常。樂。證。せ。し。む。

絶。對。無。限。の。妙。用。に。乘。託。す。と。い。ひ。本。願。力。に。乘。ず。と。い。ふ。蓋。眞。正。の。精。神。療。法。こ。の。外。に。あ。ら。ざ。る。べ。き。を。余。は。確。信。す。る。も。の。な。り。

余。は。更。に。有。名。な。る。蓮。如。上。人。白。骨。の。御。文。章。を。掲。げ。諸。君。が。よ。く。よ。く。今。度。の。一。大。事。に。御。用。心。あ。ら。ん。こ。と。を。望。む。も。の。な。り。

夫。人。間。の。浮。生。な。る。相。を。つ。ら。く。觀。ず。る。に。お。ほ。よ。そ。は。か。な。き。も。の。は。こ。の。世。の。始。中。終。ま。ほ。ろ。し。の。ご。と。く。な。る。一。期。な。り。さ。れ。ば。い。ま。だ。萬。歲。の。人。身。を。う。け。たり。と。い。ふ。こ。と。を。き。か。ず。い。ま。に。

い。た。り。て。た。れ。か。百。年。の。形。體。を。た。も。つ。べ。き。や。我。や。さ。き。人。や。さ。き。け。ふ。と。も。し。ら。ず。あ。す。と。も。し。ら。ず。を。く。れ。さ。き。だ。つ。人。は。も。と。の。し。つ。く。す。ゑ。の。露。よ。り。も。し。げ。し。と。い。へ。り。さ。れ。ば。朝。に。は。紅。顔。あり。て。夕。に。は。白。骨。と。な。れ。る。身。な。り。す。で。に。無。常。の。風。き。た。り。ぬ。れ。ば。す。な。は。ち。二。つ。の。眼。た。ち。ま。ち。に。と。ち。一。つ。の。息。な。が。く。た。え。ぬ。れ。ば。紅。顔。む。な。し。く。變。じ。て。桃。李。の。よ。そ。ほ。ひ。を。失。ひ。ぬ。る。と。き。は。六。親。眷。屬。あ。つ。ま。り。て。な。げ。き。か。な。し。め。ど。も。更。に。そ。の。甲。斐。あ。る。べ。か。ら。ず。さ。て。し。も。あ。る。べ。き。こ。と。な。ら。ね。ば。と。て。野。外。に。を。く。り。て。夜。半。の。け。ふ。り。と。な。し。は。て。ぬ。れ。ば。た。ゞ。白。骨。の。み。ぞ。の。こ。れ。り。あ。は。れ。と。い。ふ。も。中。々。を。ろ。か。な。り。さ。れ。ば。人。間。の。は。か。な。き。事。は。老。少。不。定。の。さ。か。ひ。な。れ。ば。た。れ。の。人。も。は。や。く。後。生。の。一。大。事。を。心。に。か。け。て。阿。彌。陀。佛。を。ふ。か。く。た。の。み。ま。い。ら。せ。て。念。佛。ま。う。す。べ。き。も。の。な。り。あ。な。か。し。こ。く。

(100)

四肢健全の人々にありては、以上の縷説を耳にすべくもあらざるべく、また、厭世的の線言と擧聲さるゝは必定なるべきを思へれど、瀕死の重患者にありては、こゝの見地に到らしめずんば、實に、永久浮む瀕なきを信ずればなり、而かも、健全なる諸君といへども、實に、自身確かなる瀕死の重患者なるを自覺せずや。彌陀觀音大勢至、大願のふねに乗じてぞ、生死のうみにうかみつゝ、有情をよばふてのせ玉ふ。然り、眼を擧ぐれば、逆惡洩らさぬ、攝取の大慈力は、正しく、頭上に覆ひ玉ひ、物狂はしきまでに招喚し玉ふ御聲を聞かずや。げに、この有情を喚うてのせ玉ふ、一大願船にあらずんば、余は、末法五濁の群萌救濟の方法を見出すに苦るしむものなり、和讃に

本師道緯禪師は、

聖道萬行さしおきて、

(101)



唯○有○淨○土○一○門○を、  
本○願○圓○頓○一○乘○は、  
煩○惱○菩○提○體○無○二○と、

通○入○す○べ○き○道○と○と○く、  
逆○惡○攝○す○と○信○知○し○て、  
す○み○や○か○に○と○く○さ○と○ら○し○む。

とあり又涅槃經に佛徳を讚嘆しては、

如○來○爲○一○切、常○作○慈○父○母、當○知○諸○衆○生、

是○皆○如○來○子、世○尊○大○慈○悲、爲○衆○修○苦○行、

如○人○著○鬼○魅、狂○亂○所○爲○多。

と説き和讃には更に佛凡融合の味を左の如く歌ふ。

子○の○母○を○お○も○ふ○が○ご○と○く○に○て、衆○生○佛○を○憶○す○れ○ば、

現○前○當○來○と○を○か○ら○ず、如○來○を○拜○見○う○た○が○は○す。

嗚○呼○大○慈○の○父○母○は、靈○の○泉○を○頌○た○ん○と○て、永○久○の○生○命○を○與○へ○ん○と

て、萬○徳○圓○滿○の○御○名○を○廻○向○し○玉○ふ、余○輩○感○極○り○て、言○ふ○所○を○知○ら○ず

和○讃○に○よ○り○て、又○讚○し○奉○ら○ん○か○な。

百○千○俱○胝○の○劫○を○へ○て、

百○千○俱○胝○の○し○た○を○い○だ○し、

し○た○ご○と○無○量○の○こゑ○を○し○て、

彌○陀○を○ほ○め○ん○に○な○ほ○つ○き○じ。

超○世○の○悲○願○き○し○し○よ○り、

わ○れ○ら○は○生○死○の○凡○夫○か○は、

有○漏○の○穢○身○は○か○は○ら○ね○ど、

こゝろ○は○淨○土○に○あ○そ○ぶ○な○り、

終りて臨みて、絮説縷言、諸君の清聴を漬せしを謝す。願くば慈

光長へに、諸君の上にあれ。任天泣血、謹みて白す。南無阿彌陀佛。

四、救濟論。

再び患者諸君に與ふ。

苦しめる者に和樂を與へ、悲しめる者に慰安を與ふるは、物質界、精神界の何れにまれ、救濟の普通意義なりとす。然らば、和樂とは、慰安とは果して如何なるものなる乎。

富國論の著者、アダム・スミス氏、嘗て曰く、余は、世界中、最大幸福の人を見たり。そは、苦役に従事せる、無期徒刑の一囚徒なりき。其囚徒たるや、隻手萎し、隻脚踏たる、一不具漢なり。剩へ、鐵鎖をもて繋かれ、鬼の如き看守に役せられ、つゝあるも、其容態は、嘻々として、喜色を満面に堪へ、恰、世界の幸福を、我獨り集めたらん。面地にて、欣躍して、苦役に従事し、つゝ居たり。余は、これこそ、世界最大の幸福者なることを思ひぬ。

讀者よ、地を劃して獄となすも、入るを欲せざるに、而かも、現世の地獄の人となり、苦役苛責の中にありて、呻吟すべき底の一囚徒が如何に、無碍の靈界に、自在逍遙する消息を察せずや。

傀儡師胸にかけたる人形箱

鬼を出さうか、佛出さうか。

苦樂己れより之れを求めざるはなし。地獄の猛火、忽、清涼の徳風となるは、げに、心機轉換の妙用とや。いはまし、願ふに、對峙の見地にある限りは、遂に常住の眞樂を見出し得べからざるなり。執事、元是迷契理、亦非悟苦。即樂煩惱、即菩提。げに、鬼を出すも、佛を出すも、己が心よりなりけり。

果して然らば、眞の和樂もしくは慰安てふものは、差別界に着眼し、執着せる限りは、遂に、得らるべきものにあらざるを、知れよ。或る人が言ひけん、差別界の樂は、例へば、腫物を搔きて、其快を覺ゆるが如く、遂に、絶對の樂にあらず。健康者が、健康其物の樂を、自覺せざるごとく、絶對の樂境、永遠の樂地は、苦樂以上の眞樂なり。對峙の境界、其處には、神の國なく、嚴淨土なし。而も、一び、絶對を

味ひ來れば、神の國は必しも天上にあらず。嚴淨土は西方十萬億  
士にあらずして、隨處天上、所遇極樂と化し來らんなり。  
茲に於てか、事々皆救濟の意義を有し、物々悉救濟の德音を齎  
し來る、小經の、其國衆生、無有衆苦、但受諸樂、故名極樂の眞味、躍々  
として、實現し來るを見るべきなり。  
蓋救濟は如何なる形式を以て、吾人に臨むべきか、實に窺測すべ  
からざる所に屬す。或は苦悶てふ形式を以て、心的自覺を促し、或  
は、疾病てふ形式を以て、機縁を醇熟せしむ。皆これ、久遠劫より盡  
未來際、一貫して動かさずべからざる、自然の大潮流、絶對の大威神  
力たらざるは、あらず。さきに我が默堂が、消極的の愛を唱導しけ  
ん。ごとく、こゝに自然力を認め來れば、一切の苦悶、一切の疾病、皆  
これ、神の攝理、如來の慈悲と感ぜ來りて、救濟の靈泉、混々として  
盡きざるを感ぜずんばあらず。

嗚呼、神を信ずるものは至幸なる哉。如來を喜ぶものは至福な  
る哉。唯信ずべし。唯喜ぶべし。否、信せざるを得ず。喜はざるを得ざ  
るなり。苦悶を除かんと勉むるものは、實に神を疑ふなり。疾病を  
治癒せんとあせるものは、如來の仕事を竊むなり。只々神に任す  
べし。如來によるべし。久遠の哀愍は、夙に諸君を覆ひつゝあるに  
あらずや。語を重ねて、大聲疾呼して言はん。諸君、意を安んぜよ。救  
濟は必定なり。と。救濟論を作る。

五、信仰論

得たるが如くにして、忽ち去り、強て之を捉へんとすれば、影を  
攫むが如く、捕へたりと思ふときは、は、や、虛假のものとなる。嗚呼、  
獲がたきは、信仰なるかな。究めがたきは、悟境なるかな。  
信仰といひ、悟境といふ、字義異なりといへども、將亦、表情の差

異はありといへども、究竟する所一に歸するを信ずれば、便宜上一括して、之れが研究を試みんと欲す。

信仰や、悟境や、世人、忽、宗教に連想して、或は頭より之をけなす人もあらんかなれ共、少しく眞摯に觀じ來れば、人生の歸趣、いつれかは、この見地に到達せでやむべき。人間大小の活動、何物か信仰の範圍を逸し得べき。汝、無宗教の人よ、汝の一步足を動かすに就て見よ。踏出す三尺の前面、大地の陷没せざるべきを信ずればこそ、足を踏み出すを得るにあらずや。かく言は、直ちに、それは無意識なり。先天的なり。かゝるものを信仰と名くべくんば、宗教と名くべくんば、余又論なし。と嘲笑せん。然り。無意識なり。先天的なり。然かも、それをそれとして活躍せしむる。或物てふ觀念は、遂に没却するを得ざるにあらずや。余は、今、かゝる問題を捕へて、宗教の必要を論せんと欲するものにあらざるも、宗教の極致として

は、實に、無意識に存し、自然法爾にありて、而も、此處、大意識あり、大威力あるを認め來らずんば、あらず。而して、前述の如き、如何なる些細の點といへども、皆、これ、大威力の化現たり。攝理たるを思へば、余輩は、如何に無宗教者といへども、宗教を否定する言下より、躍々として、無碍光裏に俯仰するの人たるを觀せずんば、あらざるなり。

さば、は、れ、信仰の必要を叫び、宗教の必須を云爲せんとする、多くは、かゝる生存上の本能に存するにあらずして、少くとも、想像推理等、理性的の本能發展し來りて、其の満足現實の不可能なる點存するよりして、如何にか其の解決を爲さざるべからざるを以て、信仰てふもの、茲に、始めて、其叫聲を發たざるを得ざるなり。かりに、前述の如き、生存上の本能は、暫く之を措かん。借問す。汝、科學者よ、汝は、原々子を以て、物質の極となすか。思想の利刃を用

おなば、原々子以下無限に之を分割し得るにあらずや。無限に分割して果して常住の物質を認め得るとなすか。汝、哲學者よ、認識論の究極は遂に不可解なるにあらずや。本有觀念といひ、大我の聲といひ、靈力の發現といひ、遂に汎神論に歸して、一切を靈的に解せざれば、説明し能はざるにあらずや。

余は敢て、科學哲學の研究其物を否定せんとするものにあらずるも、振り返りて、人類が人類として、其天職を盡す上に於て、悠悠として、濁浪中に棹すに於て、それらの理窟的研究其物を、最後の標的とすることの無意義なるを思ふと共に、遂に安住の境界には、窮理の皆無不必要なることの嘆聲の出づべきを信ずるものなり。

にて得たる信仰は、又、理窟にて敗らる。信仰は、しかく脆弱なるものにあらず。信仰の極致は、實に、金剛不壞なり。而して、それは、理窟以外、各自の心靈に自得するにあるのみ。不可稱なり。不可説なり。砂糖の旨きは、何故に旨きにあらず。旨きが故に旨きなり。旨きが故に旨きを信ずる、之れ、信仰なり。何故に旨きは、旨きの味に於て、實に一指をも染むる能はざるなり。乃、知る。信仰、決して窮理の能くする所にあらずるを。

章を尋ね、句を摘み、月に嘯き、花に酔ふの順境には、與に信仰を語るに足らざるなり。亦、隨て、宗教の必要を認めずといへども、濁浪天を排して至り、櫂折れ、楫挫くるの時、天を仰いで嘆ぜざるもの幾何かある。事志と違ひ、計空しく齟齬するの時、信仰にあらずんば、宗教にあらずんば、何物かこの急に應ずるを得べき。信仰、茲に於てか、始めて光を發ち來る。

毒箭既に身にあり、抜かずんば死す。その時に及んで誰れか、その箭の何れより來り、誰れによりて造られしやを穿鑿するの愚をなすものあらんや。然かも、無宗教の徒、その愚を敢てせんとす、憫むに勝ゆべけんや。

蓋、信仰は直截なり、眞劔なり。各自心靈の實感なり。凡慮の揣摩すべからざる絶対を計ふは、遂に信仰に入るの道にあらず。

信仰の極致(信心の體得)——悟境は、思慮を超へ、言語を絶す。既に、自信仰を得たりと誇る如きは、未、眞に、信仰を獲たるの人にあらず。親鸞上人、晩年、信仰愈圓熟す。尙、且つ、

淨土眞宗に歸すれども、

眞實の心はありがたし、

虛假不實のわが身にて、

清淨の心もさらになし。(愚禿悲嘆述懷)

(一一三)

と嘆き、

賢者の信は内賢にして外愚なり。愚禿の信は内愚にして外賢なり。

と懺悔し、更に、善導大師の「外に賢善の相を現じて、内に虚假を懐くことなかれ」の語を、自家實驗上に翻案打成して、

外に賢善の相を現ざるを得ざれば、内に虚假を懷けばなり。とまで極言せるにあらずや。又嘆異鈔には

何れの行も及びがたき身なれば、とても、地獄は、一定すみかぞかし、

と、絶叫し居らるゝを見よ。右、説く所、信仰上の味としては、怪訝に堪へざるべきかなれども、眞正の罪惡觀は、實に、眞正の信仰の所生なればなり。所論、少しく、岐路に入りぬ。尙、信仰と罪惡觀との關係は之を異日に譲らん。

(一一四)

蓋、信仰の極致は、絶對と同化するにあり、同一不二なるにあり、絶對を對象視するうちには、未醇乎たる信仰にあらず、全く絶對に同化するれば、はや對象としての絶對なく、信仰なし。

(二四)

南無といへば、阿彌陀來にけり、一つ身を、

我れとやいはん佛とやいはん、(親鸞上人)。

唯不可思議なり、自然法爾なり、無義の義なり。

この道理を心得つるのちは、この自然のことは、つねに、さたすべきにはあらず、つねに、自然をさたせば、義なきを義とすといふことも、なを、義のあるべし、これは、佛智の不思議にてあるなり、(鸞師)。

たゞ不思議と信じつる上は、とかくの御はからひあるべからず候、(同上)。

嗚呼、信仰や、茫漠たり、悟境や、際涯なし、然れば、吾人は、遂に、絶望

すべきか、あらず、く、絶大の大徳音は、茲に至りて、はや、吾人の頭上に響くを、感知し來るなり。

而して、這般の境界は、實に、理を窮めて後、達すべき底のものにあらざるなり、鸞師、八十八歳の御消息に、

故法然聖人は、淨土宗の人は、愚者になりて往生すと候ひしこと、たしかにうけたまはり候ひしうへに、ものもおほへぬ、あさましましき人々のまいりたるを御覽じては、往生必定すべしとて、笑ませたまひしを見まいらせさふらひき、文沙汰して、さかしくしきひとのまいりたるをば、往生いかゞあらんずらん、と、たしかにうけたまはりき、今に至るまで、思ひあはせられ候也、云々。

とありて、悟道上、智解の、却て、障礙となるを説くを見よ、又、法然上人の、一枚起請文を讀まば、如何に、眞智の開發の、文字の上にあら

(二五)

ざるを知らん。

もろこし我が朝にもろくの智者たちのさたし申さるゝ、  
観念の念にもあらず又學問をして、念の心をさとりて申す  
念佛にもあらず唯往生極樂のためには、南無阿彌陀佛と申  
して、うたがひなく往生するぞとおもひとりて、申すほかに  
は別の子細さふらはずたゞし、三心四修と申すその候は、皆  
決定して、南無阿彌陀佛にて、往生するぞとおもふうちに、こ  
もり候ふなりこのほかに、おくふかきことを存せば、二尊の  
あはれみにはづれ、本願にもれ候ふべし念佛を信ぜん人は、  
たとひ一代の法をよくく學すとも、一文不知の愚鈍の身  
になして、厄入道の無智のともがらに同うして、智者のふる  
まひをせずして、只一向に念佛すべし。(一枚起請文)  
嗚呼一切經五回の繙讀を了へ當代の碩徳を大原に説伏し、智

慧第一と呼ばれたる法然房が四十餘年出離解脱の大煩悶より、  
一朝靈覺によりて頓悟し一向專修の易行道を唱道して、自愚癡  
の法然房と名のり、愚鈍念佛一代を風靡したるすさまじき勢の  
裏には、實に文字以上の靈感、耳朶を劈かずんばあらず、恰もルツ  
ソ一が「自然に返れ」の大旗幟を翻へして佛國の片隅より、全歐洲  
の思想界を席捲したるに、さも似たらずや。  
げに蘇東坡が嘆じけん、人皆生子欲聰明、我爲聰明誤一生、云々  
の如く學ぶこと愈多くして、眞智愈暗み、知ること益多くして、却  
て益解する能はざるなり、然かも、凡身智性の慾は、忽ちに承引す  
る底のものにあらずとせば、大に疑ふべし、大に困むべし、疑  
ひ疑ひ疑ひ盡し、困み困み、困み盡して、遂に、人力の腑甲斐なきを  
悟らんなり。  
法然上人の



造るも造らざるも、罪體なり。  
念ふも念はざるも、妄念なり。  
と宣ひけん、人力盡き、闇極りて、茲に始めて、絶大の德音にこそ、接するを得るなれ。

以上、論ずる所、實に、信仰論の前提に過ぎず。余は、今、少しく、信仰の意義を闡明し、悟境の経過を論じ、併せて、信後の修養を述べたくほりすれども、讀者は、前々號よりの、余が宗教觀を併せ讀まれなば、略、了解せらるべきを信すれば、一先、茲に、筆を擱く。筆硯勿々論旨、頗、雜駁を極む。請ふ、諒せよ。信仰論を作る。

盡十方の無碍光は、  
無明の闇を照しつゝ、  
一念觀喜する人を、  
必滅度に至らしむ。

信心よろこぶそのひとを、  
如來とひとしときたまふ。

大信心は佛性なり。  
佛性すなはち如來なり。

### 六、續信仰論。

「ざるを得ぬ」主義に論及す。

余は、前號に於て、余が信仰觀の一端をもものし置きたり。彼れや主として、信仰が心的實驗界裡のものにして、智解窮理の範圍外のものたることにつき、縷言せしに止りたれば、今回は、信心獲得の眞味と、其の経過とを述べ、信後の行動の論評を試みんと欲す。嗚呼、信仰く。余、今や、紙上に臨み、再度の信仰論の敘述を試みんとす。筆を投じて、撫然たること、その幾回なりしやを知らず。さな

きだに、跋扈跳梁する意馬心猿を呵して、故らに觀念を構成せんとするも、信仰や、遂に、人爲的思惟の對象ならざるを如何せん、筆を執りて、之を語句に上せんとするも、描寫愈密にして、却て益摸糊たるの奇觀なき能はず、蓋思惟既に能はず、豈筆舌の能くする所ならんや、況んや、才疎に質鈍なる我れ、修養の道途にある一豎子、何んぞ厚顔にも、群賢の前に法を説くの資格あるものならんや、忸怩交々至りて、筆端益鈍る。己みなんか、記者の責任を如何んせん。如かず、與に共に研究して、所謂、最勝の善身を徒らにせざらんにはと、茲に、再び、信仰を論ぜんとする。

余嘗て、煩悶の餘、一夜、靈感に觸れ、親しく大悲の救濟を感じ來りて、十方洞開の刹那の快趣は、慥に、余の心的經過に一時期を劃せしが、然かも其の時や、信仰を得んとするに切なりと謂はんよりも、寧ろ、煩悶の苦を除かんとするに眼めたるの感ありしなり。而

して、期待せざりし靈の手は、遂に、余をその慈光裏に攝取し玉ひき。其後幾閱月、積疊の煩惱は時に辛竦の餘威を振ひ、輕重の度それぞれに、逆襲するとなしとせず。その輕且小なるものは、思を大悲の境界に馳するか、但しは、その當時の感興を追懷するときは、煙散霧消することありて、信仰の眞味はこゝなんめりと、心に凱歌を奏しつゝあるも、その重且大なるものに至りては、恰も、鐵索もて、十重二十重に縛めたらんごとく、最早、平素の所謂信仰を闇外に閉ざし去りて、もがけど、あせれど、如何ともせんすべなく、こぞと再び信仰を盛り返さんとすれば、信仰は韋馱天の如く走り去りて影だも留めず。かゝる境界に、余は暫く、再び、異様の苦悶を嘗めたりき。

嗚呼、さきには苦悶に堪えざらんとて、思はず信仰を味ひ、今や、信仰を捕へんとして、再び苦悶す。昨是なるか、今非なるか、はた、絶

對の何處迄も余等を慰まんとての惡戯かあらず。さきに靈感を味ひしは、實に機縁の醇熟せしもの、語を換へて言へば、人力盡きて慈光に攝取されしもの、既に慈光の掌裏にあり、寸毫も自己あるを許すべきにあらず。後者の再び苦悶を重ねしは、實に自己に力を假せし冥罰にして、我れと我れ、疑宮胎城に墮して、七寶殿裡、五百歳の牢獄を現前せしもの、將又鐵鎖を脱して、かへりて金鎖に縛せられしもの、近角師が信界の監獄と唱へられけん、げに好適辭なるを見る、鬼に角に、信仰は得んとして得られるものにあらず。如來廻向の信心で、ふ語のしみ、身に感ずるを覺ゆるなり。

さらば如何にして信仰を得んかとは、世の苦悶兒が常に訴え來る所、實に適切の叫聲たらずんばあらず。されど、余は、如何に此間に答ふべきかを知らず。只佛智不思議なり。自然法爾なり。唯佛

と佛とのみ知らしめすとのみ答ふるの外はなきなり。蓋這般の境界は、吾人凡慮の揣摩し能ふ所にあざればなり。もし之を揣摩し得て、人毎に信仰を獲得するを得ること、坊間の商品同様たらしめば、人格の變換、亦土偶のその如くに變易改造することを得、五百の羅漢も、千體の觀音も、乃至は十方恒沙の諸佛も、忽ちに作爲せられて、嚴淨土は頃刻に現出し、敢て社會主義者の絶叫を俟つまでもなかるべきも、そのこゝに至らざるは、實に、絶對不思議の佛智の妙用たらざるなきを知らんや。

余は、絶對他力を叫ぶ故に、余輩の眼に映ずる所、聖道自力の禪宗の如きも、皆他力海中の一波に過ぎざる耳。禪の一派が「我なく佛なし」の通語も、彼等が佛陀を構成的に差別界に作爲して、自ら差別界を撥無したる際に發する嚙語に過ぎざるなり。彼等の佛陀は、彼等の佛陀のみ、佛陀の佛陀にあらざるなり。「我なく佛なし」

以上、愈々、一大佛陀の攝取裏たるを悟らざるものなり。我が默堂が問ふものも阿彌陀答ふるものも阿彌陀、一切萬法、みな阿彌陀の所具たらざるはなし」と叫びけん。話頭思はず岐路に入りぬ。

然らば、信仰に對する態度は如何に。そは自然法爾なりたゞ、

佛智不思議と信じつる上は、兎角の御計らひあるべからず候。

との鸞師の語を繰り返すを禁ずる能はず。

計らふべからず。少しの計らひなき所、自己の力の皆無なる所、其處に無限の力は働くなり。自己の力を恃まば、其極遂に有限なるを知らざるべからず。而して自力の跋扈する範圍内には、大悲無限の御力は遠慮し玉ふものなるを知らざるべからず。嘆異抄に其の消息を洩して、

一、善人なほもて往生を遂ぐ、いはんや悪人をやしかるを世の人、つねにいはいはく、悪人なほ往生す、いかにいはんや善人をやと、

この條、一旦そのいはれあるにたれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆゑは、自力作善の人は、ひとへに他力をたのみ心かけたるあひだ、彌陀の本願にあらずしかれども、自力のころをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、眞實報土の往生を遂ぐるなり。煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるよとあるべからざるをあはれみたまひて、願をおこしたまふ本意、悪人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因なり。よて善人だにこそ往生すれ、まして悪人はとおほせさふらひき。

とあり。味ひ來れば這般の趣味津々として溢れ來るを感ぜずんはあらず。

然も、計らはさらんとして努むる如きは、亦一種の計らひたるを免れず、再び金鎖に繋がるいなり、再び監獄に墮するなり。要只、實に

一切を絶對に乘託するにあるのみ。

親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしと、よき人のおほせをかうふりて、信ずる外に別の子細なきなり。

嗚呼、實に「信ずるほかに別の子細なきなり」

讀者よ、千古に照耀するこの十四字が、天地のあらんかぎり、日月の照らさんかぎり、常に各人の心琴に共鳴すべきを感知せずや。讀者は、尙以下引用する所を讀まば、信仰の獲得上、思半ばに過ぐべきを信ずれば、繁を厭はずして之を掲げん。

自然法爾の事

自然といふは、自はおのづからといふ。行者のはからひにあらず。然といふは、しからしむといふことばなり。しからしむといふは、行者のはからひにあらず。如來のちかひにてあるがゆゑ

に法爾といふ。法爾といふは、この如來の御ちかひなるがゆゑに、しからしむるを法爾といふなり。法爾はこの御ちかひなり。けるゆゑに、おほよそ行者のはからひのなきをもて、この法の徳のゆゑに、しからしむといふなり。このゆゑに、他力には義なきを義とすとしるべきなり。

自然といふは、もとよりしからしむるといふことばなり。彌陀佛の御ちかひの、もとより行者のはからひにあらずして、南無阿彌陀佛とたのませたまひて、むかへんとはからはせたまひたるによりて、行者のよからんともあしからんともおもはぬを、自然とは申ぞと、さふらふちかひのやうは無上佛にならしめんと、ちかひたまへるなり。無上佛とまをすは、かたもなくまします。かたちもまします。ぬゆゑに、自然とはまをすなり。かたちましますとしめすときには、無上涅槃とは申さず。

かたちもましまさぬやうをしらせんとて、はじめに彌陀佛と申すぞとき、ならひてさふらふ彌陀佛は自然のやうをしらせんれうなり。この道理をこゝろえつるのちには、この自然のことはつねにさたすべきにあらざるなり。つねに自然をさたせば義なきを義とすといふことは、なほ義のあるになるべし。これは佛智の不思議にてあるなり。

如何に圓轉滑脱、環の端なきが如きを見よ。又嘆異抄には、念佛まをしさふらへども、踊躍歡喜のこゝろ、おろそかにさふらふこと、またいそぎ淨土へまゐりたきこゝろのさふらはぬは、いかにとさふらふべきことにてやさふらふやらんと、まをしいてさふらひしかば、親鸞も、この不審ありつるに、唯圓房おなじこゝろにてありけり。よく／＼案じ見れば、天にをどり、地にをどるほどに、よろこぶべきことをよろこばぬにて、いよ

いよ往生は一定とおもひたまふべきなり。よろこぶべきこゝろをおさへてよろこばせざるは煩惱の所爲なり。しかるに佛かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおほせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけりとしられて、いよく／＼たのもしくおぼゆるなり。また、淨土へいそぎまゐりたき心のなくて、いさゝか所勞のこともあれば、死なんざるやらんと、こゝろぼそくおぼゆることも、煩惱の所爲なり。久遠劫より、いままで流轉せる苦惱の舊里はすてがたく、未だむまれざる安養の淨土はこひしからずさふらふこと、まことに、よく／＼、煩惱の興盛にさふらふにこそ、なごりをしくおもへども、娑婆の縁つきて、ちからなくしてをはるときに、かの土へはまゐるべきなり。いそぎまゐりたきこゝろなきものを、ことにあはれみたまふなり。これにつけてこそ、いよく／＼大

悲大願はたのもしく、往生は決定と存じさふらへ。踊躍歡喜のころもあり、いそぎ淨土へまゐりたくさふらはんには、煩惱のなきやらんと、あやしくさふらひなましと云々。とあり。如何に、大悲を仰ぐ信念の無限なるかを見よ。略言すれば、依然佛智不思議なり。自然法爾なり。尙、信仰の自然を歌ひし法歌を以てこの段を結ばん。

たのませたのまれたまふ彌陀なれば

たのむころもわれとおこらず。

余が信仰觀を筆舌に上せば上の如し。もしそれ、その後の經過に至りては、正信偈の、

已能雖破無明闇 貪愛嗔贈之雲霧

常覆眞實信心天 譬如日光覆雲霧

雲霧之下明無闇 獲信見敬大慶喜

卽橫超截五惡趣 (中略)

憶念彌陀佛本願 自然卽時入必定

唯能常稱如來號 應報大悲弘誓恩

の如し。茲に於てか、稱名の念佛も佛恩報謝の意味を帯びて進り出づべきなり。鸞師は、稱名さへも自力を嫌はるゝは、寔に、故なきにあらざるを感ぜずんばあらざるなり。然らば、信後の行動は如何。余がこゝに唱導せんとするは、實に、ざるを得ぬ。主義なり。余は、一切の行動、このざるを得ぬにて、始めて眞意義を有するを發見するものなり。ざるを得ぬ。主義は、本能主義なり。現在主義なり。余は、ざるを得ぬ以外、本能以外、現在以外に根據を置く主義は、之を否定するものなることを斷言して憚らざるものなり。以下逐次之を説くべきも、まづ難者の序幕よりして之を破らん。

難者は詰問すらく、他力信仰は一切自力を捨てよといふ。然らば、枯木死灰なり。如何にして活世界に活動するを得んやと、然り外、観こそ枯木死灰なれ。眞正の活動は、實に、此處に胚胎するものなるを知らずや。さばれ、誰人も、兎も角、生命あるにあらずや。呼吸を呼吸するにあらずや。飲食を攝取するにあらずや。呼吸や、飲食や、皆「ざるを得ぬ」に出づるなり。余は各般の行爲も結局然かあらざるべからざるを信ずるものなり。蓋し行爲に苦痛を伴ふは、皆その責任を自覺するによる「ざるを得ず」して爲す行爲は、最早意識を超越す。即、無意識的自律的活動なり。而して、その行爲たる、少しの責任を感じざるなり。「ざるを得ず」して爲す行爲は、ざるを得ざらしむる主體なきを得ず。其主體は、即、絶對如來にして、實に、責任の主體たり。既に、一切の責任、如來にあり。茲に於てか、吾人の行爲に、些の苦痛なきと共に、一切の行

爲皆如來の行爲なり。萬般の境界、皆如來の命法なりと感じ來りては、如來大悲の計らひの如何にも讃仰に堪えざるを感じずんば、あらざるなり。「ざるを得ぬ」行爲は、顧慮する所なし。故に本能主義なり。過去を顧みず。未來を慮らず。故に現在主義なり。「ざるを得ぬ」行爲は、弘誓の佛地より進出す。故に、如何なる事をなすも可なり。最早、倫理上の桎梏を脱して、無碍自在なり。故に、平重盛の煩悶の如き、曾子が戰戰競々として、深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し、今、我、免るることを得たりと、大息しけん。不安心の態度は、毫もあるなし。大自在なり。無所障礙なり。嗚呼、如來を信ずるものは、幸なる哉。蓋、現在を捨て、行爲の價値を認むること能はず。本能をすて、眞正の行爲を爲し能ふの理なく、もし、それ「ざるを得べき」行爲に至りては、遂に破滅の期あるを免れざればなり。



所論頗る暴に似たりといへども、余はいまだ、足らざるを感じるものなり、余は、更に、筆硯を洗ひて、今度は、専ら、真正の本能主義の鼓吹に勉むるあらんを期す。  
嗚呼、ざるを得ぬ「主義なる哉」。更に附言す。本能主義なる哉。現在主義なる哉と、余は更に「ざるを得ずして、此の論をなさしめたる恩恵を慈父に感謝し奉る。南無阿彌陀佛。

(一三四)

七、今日一日の記

(一) 今日一日の記

- 一、今日一日、三つの恩を忘れず、不足の思をなまぬこと。
  - 二、今日一日腹を立てぬこと。
  - 三、今日一日、うそをいひ、無理をなまぬこと。
  - 四、今日一日、人の悪をいはず、己れの善をいはざること。
  - 五、今日一日の存命を喜び、家業を大切に勤むべきこと。
- 右は、今日一日の懐みにて候。

これは、南條文學博士の談柄中にありしものなるが、同博士嘗て、名古屋滞在中、某處

にて、ふと手にせられしもの、よしにて、誰れの書とも分らず、思ふに非常なる高德の箴句なるべしとて、いたく感せられ、其後は、隨處に話題として引用せられ、殊に彰善會長高崎正風男のごときは、家族どもの座右銘とせんとて、即座に筆寫し歸らし程なりきと、昨頃、法話の節、談話ありたり。  
誦み來れば、趣味津々として盡きざるを覺ゆ。しかも實踐道德の規範、人間處世の要道、蓋しこの外に出でざるべし。己れ聊かこれが評論を試みんかな。  
劈頭第一、報恩の主旨と、己れの分に安んずべきこととは、實に大乘佛教の大綱を唱破せるものにて、苟も人間の生存をして眞の意義を有せしめんとせば、まづ萬有に報謝するの念慮を有すべきこと、尤も肝要のことなればなり。考へても見よ、一紙半錢も詮する所、自己の所生にあらず、皆萬有の救助を受けつゝあるものにあらずや。眞に心に感じ來れば、有難涙こそこぼるれ。不足などの言はれたものにあらざるなり。萬有に報謝する念はもとよりなれど、世間の道徳としては、まづ君父師の三大恩を推さざるを得ず。三つの恩は、佛法僧の意味か知らざれども、博士はこれを君父師として説かれたり、穩當の意見なるべし。愚夫愚婦に多きを責むるは無理なれば、さしあたり三つの恩としたるなるべし。然して、三つの恩を十分に報ずるとき人は、

(一三五)

萬有に對しても必ず親切なる人なればなり。不足の思をなさぬこと、即己れの分を守ることは、心の平和を得る基にして、やがてこれ社會の秩序を保ち、人類の幸福を來す所以、所謂真正の自由の發展も實にこれに基くなり。近世の傑士大石良雄が、元祿十年にかきしもの、中に「主人と親とは無理なるものと思へ、下人は足らぬものを知るべし」とあり。流石は良雄なり。宜なり。彼れが赫々の功を遂げ、今上よりして「節を守り、法に死す。百世の下人をして感奮興起せしむ。云々」の誄辭を賜はりしこと、兎まれ、その心掛けあらば、世渡りの障礙はなかるべし。

第二項、腹を立てぬこと。即怒を戒めたる、これも尤のことなり。凡そ、人の心意を傷害すること、怒の情より過ぎたるものなかるべし。よく記臆せぬ話なれども、昔時、或る行者忍辱精進の行を遂げ、殆菩薩の境界にありしが、惡魔一日人と化し來りて、手足を殺ぐ程の慾望を提出し、行者が苦もなくこれに應ずるを見、最後に眼球を所望して曰く「美なるかな空に輝く星の如し、余にその美玉を與へよ」と。流石の行者も躊躇したれども、遂に之を抉出して與へたり。惡魔之を掌上にのせ、盤整して曰く「余さきには美玉と思へり。されどかゝる汚穢のものなりしか。あな穢らはし」と。て、大地に抛

擲してまた顧みず。行者茲に於て思へらく「余が、かくも忍びに忍びたるものを、よくも、むざ／＼とされしものかな」と。一念瞋恚の焰起りしが、最後、そのため、永年所修の功徳一朝にして破壊したりと聞く。こはこれ、極端の例なれども、瞋恚の情はまこと火の如き者にして、多年修養し來りたる徳もこの焰に逢へば忽ち燒盡さるゝげに怖ろしきものなりけり。語に「人は忍なり」といへり。また、梵語娑婆の支那譯は勘忍の意味なりと聞く。良雄もいへらく「勘忍者一生之相續」と。徳川家康の遺訓にも、勘忍は無事長久の基、怒りは敵と思へ」とあり。實踐の餘瀝、味は盡さざるなり。それにつけても思出さるゝは、具原益軒の雅量にぞある。彼れ、一日、人の庭園の花卉を荒らし、に奴の之を懲らさんと申出でしに對へて、余は怒らんが爲に植ゑたるにあらす。樂まさんが爲に植ゑたるなり」といひ、遂に一の問ふ所なかりきといふ。吾人はこの雅懷に接しては、最早漸愧の情を超過して、只霽々たる春風に包まれるゝを覺ゆ。あつゝしむべきは怒の情なりけり。

附記、西班牙の僱謔に「もし人怒るときは十を數へよ、甚しく怒るときは百を數へよ」といへり。兎角激情は永續するものにあらざれば、これらは怒りを抑ふる好方法ならんか。

第三項、これまた終世守るべき要道にして、孔子が「君子は欺くべし、罔ゆべからず」といひけんごとく、虚偽は一時は欺惑するを得んも、永遠に欺きおほさるゝものにあらず。最直接に利害を感ずる商法のごときも、なるほど顧客の多きに乘じて奸策を用ゐば、一時の利を攫取するを得んも、信用一び地に墜ちば、忽ち貧富地を易ふるを見ん。現時の日本商人、ことにこの弊あり。外人はアンリライアブルヂヤツプ(信頼すべからざる日本人)と言ひて、日本商人を其市場より驅逐しつゝ、あり。邦家のため塞心すべきにあらずや。

うそをいふは、一面には己れの良心を欺くなり。これ實に一切罪惡の根本にして、如何なる些事たりとも一び己れの心を欺罔することに忍ぶるに至るや、千丈の堤も螻蟻の孔より潰ゆるがごとく、滔々として知らず識らず大罪を犯すに至るなり。初一念こそ最大切なれ。故に孔子も君子は屋漏に愧ぢずとも、其獨りを慎むともいひて、非常に戒められたり。凡そ法律道徳の綱にはかゝらずとも、宗教の綱、即良心の苛責を免るゝことは人生最難のことにして、やがてこれ修養の極致なり。西諺にも「良心の安慰は中夜の樂聲なり」とあり。世間すべての美事善行、皆このいつはらぬ心情に其根底を有せざるなく、其萌芽を發せざるはなきなり。

又無理をなさぬことゝあり。愈々出で、愈妙なり。あゝ他力の大道、茲に至りて發現し來れり。うれしきかな喜ばしき哉。無理をなさぬとは人為的細工を加へず、一に自然の天命に一任することなり。善きも惡しきも、身も心も、罪も苦も、過去も現在も未來も、すべて如來にまかせ、一切の責任を如來に托する時、前のいつはらぬ心情即ありのまゝのはたらきが、初めて出來得るなり。只「うそをつくな」といふは、眞正面より切り込んだとて、勢自力作善となり、動もすれば拵へた善、即力味心のある善の外成し得ぬ弊に陥る傾あり。必ずや絶対の地に安住し、自然に發露し來る活動にあらずんば、究極の善にあらざるなり。何れの罪惡か無理をなすことによりて得しものにあらざるなき。何れの苦惱か自ら作りし桎梏にからまれざるものぞなき。一切の苦は皆この無理をなすより來る。嗚呼樂的生活をなさんとするの人よ、他力の大道を措いて將何かある。

第四項、これまた社交の要道にして、實に平和の福音なり。人は兎角自己をかざる自惚心が自然にあるものなるが、甚しきに至りては、自己が惡と知りつゝも、尙之を辯護し曲庇するの傾あるを見る。これに反して、他の欠點罪惡はいたく目につくものにして、動もすれば美點を稱揚することよりは、短所を剔抉するを快とする傾ある

ものなり。又或は猜疑の余り、其美點を抹殺せんとするを往々見ることもしなきにあらず。悪んぞ知らん、他人の仕打は自己内心の反影なることを。古歌、

我が善きに人の悪しきのあらばこそ、人の悪しきは我が悪るきなり。

のときは實にこの消息を道破したるものにして、汲めども盡きぬ味のせらるゝなり。さて他の惡を吹聴することもさることながら、言はぬさきの憎つくいと思ふ心を起さぬこと殊に肝要なり。苟一點他の惡に氣付く心の起りし時は、同時に自己の周圍に一の圈を劃するなり。故にこの人は何處に至りても皆敵ならざるはなく、愈他の惡を感じ、苦悶に苦悶を重ね、此世からなる地獄に墮落するは、此種の人なり。此に反して、其初一念に於て、一轉自己に反省し、自己の親切の足らざりしを感ずるの人は、怡々和樂、隨處極樂の人なり。然し「他を惡と思ふな」「自己を反省せよ」と冷かに理を以て責めたりとて、意馬心猿は言下に承引する底のものにあらず。前項にもいひし如く、餘儀なくして爲すが如きは依然一種の苦痛たるを免れず。要するに道徳律は一種の桎梏に外ならず。道徳律もしくは自力的宗教を以て心身を律し得ることとは、生知安行の聖人ならばいざ知らず、到底普通のものにあらず。恰自己の腕にて自身を撻げんとするとき、力む程一方には根張り強くなるを免れざるなり。自

力にて悟道し得たりとする人も、焉んぞ知らん悟道の對象、禪の如きは對象なきが如くなるもそのなきものが矢張り對象なり。は、正しく人力以上無限絶對の活動のみにして、即何時の間にか他力に攝取され居るものならんとは、閑話休題、唯絶對他力の一道ありて、餘儀なくしてなすが如き些の苦痛なく無限の慈悲に打たれ、滿身喜愛の念に充ちて、己を忘れて無意識に活動し、自然に道に合ふ底の最後の眞境に到達するあるのみ。心理學にて、絶對意志、もしくは絶對我は、無意識なる自律的活動なりとしてあるが、この境界を指すなり。倫理學上の本務も、最上善も皆この事なり。

さて、又、己れの善をいふことは、人の惡をいふに比して他に害を及ぼさざるが如きも、慢心ほど精神的に人を殺すものはあらざるなり。それ、修養には限りなし。霎時にも底止せむか、沈滞し、腐敗し、はては墮落するは、その常態なり。蓋徳に進むの基點は實に自己を不完全と感ずる點にあり。佛教にて懺悔を最高の徳とするも、儒教の謙讓を尊ぶも、耶穌教の心の貧きものは幸なりといふも、自を高うするものはさげられ、又、自を卑うするものは上げらるといふも、皆これなり。其他、これについては、古來東西とも幾多賢哲の聖訓あれば、殊更に論ずるにも及ばざることなるが、余は、近

頃殊に感ずるは親鸞上人の語にぞある。その教行信證の信の卷に「かなしきかな愚  
 禿鸞、愛慾の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚のかすに在ることをよろこ  
 ばず、眞證の證にちかづくことをたのしまず、はづべしいたむべし」とて、いたく懺悔  
 せられ、又嘆異鈔の「何れの行も及びがたき儀なれば、とても地獄は一定すみかぞか  
 し」とて、飽くまでも卑下せらるゝ如き、嗚呼絶大の人格を有して、遺響遠く傳はり、其  
 の流に浴するもの、現時六十餘州に浴きほどの高徳親鸞上人にして、なほ此の語あ  
 り、吾人豈愧死せざらんとすとも得んや。  
 第五項は、法然上人が「うけがたき人身をうけ、遭ひ難き佛法に遭ふことを得るは、喜  
 びが中の喜びなり」と云々といはれしごとく、思へば、吾人生を人間に稟けたるは、億萬  
 載の一遇はおろか、げに無窮時の一遇といはれ、いはれもせん、考へ來れば、一日の存  
 命は、實に無限の味のせらるゝなり、倫理上、生存主義などを云爲するものあれど、死  
 に角生存てふ事實ほど、人世に切實なるものはあらじ、最大疑問たる死てふものゝ  
 如き、實にこの生存と表裏する大問題なるを知らずや、死に角生存はそのもののみ  
 にも、積極的の意味あることは、生物、ことに人類の通性なり。されどもこの第五項  
 の意味は、しかく淡泊の意義ならず、實に第一項と關聯して、絶對の實在に對して、報

恩感謝の意を寓せたる、抑ふる能はざる喜愛の心を指すものなり、喜愛の念横溢し  
 て、始めて生存に附帶せる眞の解決を得、感謝の意體物として、茲に家業に盡瘁せざ  
 らんと欲すとも得べからざる剛強の活動となるなり、和讃にいはずや、「如來大悲の  
 恩徳は身を粉にしても報すべし、師主知識の恩徳もほねをくだきても謝すべし」と、  
 かへすゝも有り難きは佛陀の慈愛にこそ。  
 前五項を總括するに、最後に「右は今日一日の慎にて候ふ」の鐵律を以てす。嗚呼これ  
 あるかな。嗚呼今日一日なる哉。時間は空間と同じく、千古の疑問にして、無  
 限不可解、捕捉すべからざるものなれども、死に角現在てふものありて、吾人にこの  
 不可思議物の靈體を感知せしむ。時間は實に永久の現在なり。此の意味よりして、吾  
 人は千古の偉人に面り接することを得ずとも、現存せる人格を仰ぎ、人型にあらす  
 其の遺訓を聴きつゝあるなり、佛教に、彌陀如來は極樂世界に在して、今現に説法さ  
 れつゝありと説くは、實にこの消息を洩したる者、親鸞上人の一切の群生界無始劫  
 より乃至今日、今時まで汚穢不善にして、清淨の心なく、眞實の行なしといはれしも、  
 蓮如上人の御文章を通じて、今度の一大事と仰せられ、御言葉なども、誦し來れ  
 ば、今更の如く覺ゆるなり、淨土宗にては、念死念佛といひ、念々刹那に死すべきを説

くも、武士道の開山、山鹿素行が、武士は、門を出づる毎に死を覺悟す。何ぞ、殊更に、死後の用意を須るんや、と言ひしことも、一層の妙味あるを感ずるなり。總じて、現。在。の。一。念。に。安。住。し。得。る。人。は。永。久。極。樂。の。人。なり。

以上五項、人生直截の大道を、今日一日にて戒飾す、箴言の當を得たる最上乘のものならんか、嗚呼、今日一日なる哉。

嗚呼、無限の時間、無限の空間、善もあれば悪もあり、善もなければ悪もなし。要は安心立命の場處を求むるに過ぎざるなり。有か有にわらず、無か無にわらず。有無定むべきか否、有無定むべからざるか否、既に一念より生ずれば還た一念より滅せむかな。今日一日の二十四分の一、二十四分の一の六十分の一の又六十分の一、その又何萬分の一の時と雖、安心こそ得たけれ、いかにしてか安心すべきか。只、外物の悪を認めざること、己れの悪を知ること、報恩報謝に粉骨碎身すること、これより外に道のあるべきかは、此文無名氏の作並に宅間君の詳註實に敬々服々、蓋是れ、千載不磨の寶典、吾人日常の坐右の銘、(天然拜讀)

## 八 立身解

立身てふことは果して何を意味するであらうか。凡そ、人生を支配する最廣く、最長くして、而して、眞の解決を得るに最困難なる問題で、之に過ぐるものはないであらう。よく、案ずれば、この問題たるや、遂に、人生最後の究竟點に達せずんばやまぬ問題ではなからうか。余、この數年、來、境遇の變に搦て、加へて、この問題について幾多の煩悶を増し、近來、漸く、自得せんとしつゝ、あるを感ずるものである。で聊か立身解を試みたい。

立身といへば普通に富貴權勢名譽等をさしていふことなるが、例せば、巨萬の資を擁し、肥馬輕裘、意氣揚々たる人、世人一般に之を羨望するも、其實狀を察すれば、妻妾内に闖ぎ、放恣外に慕り、細民動もすれば其肉を喰はんとするの思をなす。これを果して眞の立身とすべきであらうか。又、佞口辯才時流に高ぶり、政界に馳聘して、名士と呼ばれ、僥倖にして高官を獲得す。人之を榮達と欽慕す、而も黃白の爲に、其節を二三にし、淫亂貪慾恬として耻づるを知らず、これをしも人生の榮達と名くべきものか。これらに比すれば、名譽といふとはまづ取り所があると云はねばならぬ。軍人が其行爲の極點を名譽とする如き、まづ罪のない方ではあるが、これとても余は思議すべき一だらうと思ふのである。さしあたり立身てふもの、窮極地は芳名を竹帛

に垂るゝといふことが皆人の是認する所であらうと思ふ。これは實に孔夫子が立身行道、舉名後世以顯父母之名、孝之終也といはれたのが、遂に萬世を誤つたので、余は實に遺憾に思ふのである。否、孔子の時代には、それが適當の言であつたであらう。何故なれば、春秋時代は實に名義の混亂した時代であつたから、大義名分を明にせんと爲に、正名てふことを重んぜられたのであらう。春秋を作られたのも、其眞意からであつたのだ。所が後世、腐儒が其眞意を誤つた。そののみでなく、一般に孔子の眞意を誤つて遂に懐古的退歩的の儒教となしてしまつたのだ。閑話休題、その罪のなような名譽といふものが、果して取り所のあるものかどうか、人世の窮極の目的は果して名譽にあるだらうか、根武川石に名をほりつけて後世に残しても、桑田爲海の變はあてにならない。それより愷なは青史だ。否、人口だ、人口に語りつぎ、いひつぎ行けば、人類の存する限りは滅する氣遣はない。然し、人間の眞價値と云ふものが、果して世に分るものであらうか。古人が、蓋棺而事初定と言つたけれども、余は決して首肯しない。又、時代の精神といふものは、其時代のもの、で、萬世の標準ではない。魯氏必しも逆賊ではなく、三成必しも佞臣ではない。況んや善惡の標準てふものは、これは千古未決の問題である。倫理學者が古來口を酸くして論ずるも、一定不變の

説が何處にあるか、昨是非紛々擾々却つて、庸人俗士が、小刀細工の爲に、簡易無造作な世界を七面倒になすのみではないか。然らば名譽といふものも、あてにはならない。前に述べし富貴權勢の如きは、兎に角衆目を惹く所より、人見て立身とするであらうし、又物質的の快樂もあるならんが、精神的の快樂が必しも伴ふとは限らない。否、寧ろ苦痛の場合が多いのである。樂しみは夕顏柳の下涼みにはとて、もかへられまいよし、立身とした所で苦痛なるものならば、立身もさほど恃むべきものでもない。況んや、余輩の見によれば、職業に貴賤なく、要只丈夫の慮る所の職分を忠實に盡す人こそ、最尊貴なる人と思ふのである。この意味よりして、余輩は、流汗滴々、晝間に働く人を、驢馬に鞭つ、曠職の宰相よりも、いくら尊ぶか、知れない。況んや、又浮世をつくづく観するに、富貴と云ふも、榮華といふも、皆これ、盧生、黃梁の一夢にて、有爲轉變頼み少きは、げに浮世の真相であるよし、富貴利達を眞の立身とした所で、一寸先は闇の世界にとても、永久のあてにはならぬ。さすれば、世は塞翁が馬の譬に洩れずして見れば、遂に何事も「アキラメ」主義でなければならぬ。茲に於てか、余は、盡人事俟天命との主義を標榜して、實に過去數年間を經過したのである。甚しきは、消息盈虛與時

に垂るゝといふことが皆人の是認する所であらうと思ふ。これは實に孔夫子が立身行道、舉名後世以顯父母之名、孝之終也といはれたのが、遂に萬世を誤つたので、余は實に遺憾に思ふのである。否、孔子の時代には、それが適當の言であつたであらう。何故なれば、春秋時代は實に名義の混亂した時代であつたから、大義名分を明にせんが爲に正名てふことを重んぜられたのであらう。春秋を作られたのも其真意からであつたのだ。所が後世腐儒が其真意を誤つた。そののみでない一般に孔子の真意を誤つて遂に懐古的退歩的の儒教となしてしまつたのだ。閑話休題、その罪のないうような名譽といふものが、果して取り所のあるものかどうか、人世の窮極の目的は果して名譽にあるだらうか、根武川石に名をほりつけて後世に残しても、桑田爲海の變はあてにならない。それより慥なは青史だ。否、人口だ、人口に語りつき、いひつき行けば、人類の存する限りは滅する氣遣はない。然し、人間の眞價値と云ふものが果して世に分るものであらうか。古人が蓋棺而事初定と言つたけれども、余は決して首肯しない。又時代の精神といふものは、其時代丈のもので、萬世の標準ではない。魯氏必しも逆賊ではなく、三成必しも佞臣ではない。況んや善惡の標準てふものは、これは千古未決の問題である。倫理學者が古來口を酸くして論ずるも、一定不變の

説が何處にあるか。昨、是非紛々擾々、却つて庸人俗士が、小刀細工の爲に、簡易無造作な世界を七面倒になすのみではないか。然らば名譽といふものも、あてにはならない。前に述べし、富貴權勢の如きは、兎に角衆目を惹く所より、人見て立身とするであらうし、又物質的の快樂もあるならんが、精神的の快樂が必しも伴ふとは限らない。否、寧ろ苦痛の場合が多いのである。樂しみは夕顏棚の下涼みに、はともかへられまい。よし立身とした所で、苦痛なるものならば、立身もさほど待ひへきものでもない。況んや、余輩の見によれば、職業に貴賤なく、要只、丈夫の慮る所の職分を忠實に盡す人こそ、最尊貴なる人と思ふのである。この意味よりして、余輩は、流汗滴々、畦間に働く人を、駟馬に鞭つ、職の宰相よりもいくら尊ぶか、知れない。況んや、又浮世をつくづく、觀するに、富貴と云ふも、榮華といふも、皆これ、虛生、黃梁の一夢にて、有爲轉變、瓶み少きは、げに、浮世の真相である。よし、富貴利達を眞の立身とした所で、一寸先は關の世界にとても、永久のあてにはならぬ。さすれば、世は塞翁が馬の譬に洩れずして見れば、遂に、何事も「アキラメ」主義でなければならぬ。茲に於てか、余は、盡人事、俟天命との主義を標榜して、實に過去數年間を經過したのである。甚しきは、消息盈虛與時



行、世上窮通何處邊ぞと東湖を學んで大に瓢に親んだこともある。  
 あ、盡人事後天命、言や美なり間然する所なしである。然るに余は遂に蹉躓した。余は今では所謂蹉躓を喜んで居る。又或る意味では確に向上である。新生命を得たのである。決して負惜みではない。無論、余の利口でない點もあるのであらうが、よしんば利口であるとした所で、盡人事後天命主義ではとても窮極の解決は出来るものでないことを余は今に於て感ずるのである。

所謂アキラメ主義は、立身の眞の意義に近き點に於ては、前數者の俗的立身に比しては數等地を抽で居るも、これは實に絶望主義である。オヤ又俗臭が出たか否、少くとも退歩主義である。社會に貢獻する點より言へば、俗的立身主義と甲乙はない。最崇高なるべき佛敎が古來因果律を一面にからまれて、遂に厭世的亡國的腐敗的に陥つたのは實にこの方面のみに出た一大弊害である。親鸞上人出で、大に其眞意義を闡明されたけれども、繼承者流は又ぞろ融通の利かぬ無開な非現世的になしてしまつた。然し、それはまた無理もない點もある。法然上人親鸞上人の時代は所謂鎌倉時代で、關東武士が花の上臈を馬蹄にかけて、踏みこじり、京洛畿内乃至邊陲の地に至るまで、矢叫びの聲、劔太刀の音のみで、人命今日明日を計られぬ修羅の巷

であつたから、とても現世に安穩の生活が出来ぬ所から、未來を死後にかぎり微かながらも一縷の望をつないだ點は多とすべきである。言ふまでもなく、往生は字の如く往て生るゝにて、心機一轉悟入したとき、即永久の生命を得るので、この消息は孔子がうまく言はれて居る。朝聞道夕死可矣とは、こゝだ。兎に角、希望のない、即絶對の光明を認めぬ無意味のアキラメ主義よりも、死後ながらも一道の光明を與へた點は實に、今より有り難く思ふのである。嗚呼、光明なる哉、希望なる哉、未來なる哉、光明なれば希望なし、希望なれば未來なし、人世未來なきこと、何物の悲惨か之にすぎんやである。エピクテタスが「死の門戸は常に開いて居る」といひしも、ソクラテスが道義の爲に從容毒を仰ぎしも、光ソクラテ氏は靈魂不滅説を唱へし人なれども、乃至は極端なる唯物論者中江篤介氏も、余輩の目より見れば、確に絶對の光明に攝取され居るを認むるのである。中江氏が「楠公重盛は死んで既に久しきも、路傍の馬の糞は天地と共に悠久なり」との名語を洩されたのであるが、天地と共に悠久なりとは、問ふには落ちず、語るに落ちて居るではないか。余は物心一如の靈魂不滅論を草して見んかと思ひつゝ、あれども、それはまづさて措いて、兎に角、無意味のアキラメ主義を抱く人は、多くの場合、遂に一大苦悶に陥るか、さなくとも一生快々とし

て過すかたしは遁世の西行法師的となるか何に致せ一轉機を下さねば結句不健全の生活に終るは余の經驗を俟つて後知らざるなりである。嗚呼一轉機なる哉一夫大光明の慈母は現前したまへり淨邦緣熟の機は來れり苦悶の兒よ奚ぞ睡を醒さる懊惱の子よ何ぞ眼を刮らざる招喚の御聲は確に耳に響くにわらずや何ぞ走りて其の慈懷に眠らざる。

親鸞上人其秘境を開示されて曰く、

ひそかにおもんれば難思の弘誓は難度海を度する大船無碍の光明は無明の闇を破する惠日なりしかればすなはち淨邦緣熟して調達閻世をして逆害を興せしむ淨業機あらはれて釋迦韋提をして安養をえらばしめたまへりこれすなはち權化の仁ひとしく苦惱の群萌を救濟し世雄の悲まさしく逆謗闡提をめぐまんとおぼす中略あゝ弘誓の強緣多生にもまうあひがたぐ眞實の淨信億劫にも得がたしたまへり行信を得ばとなく宿緣をよるこへ云々。

と又和讃にいはずや、

大聖おのくもろとも凡愚底下のつみ人を逆惡もらさぬ誓願に方便引入せしめけり。

と。嗚呼逆惡もらさぬ一夫大願力は百川海に朝宗するかとくありとあり一切の群生海を率ゐて現に引入せしめつゝある一夫大光明の現前せるにも拘らず今迄氣付かざりしことの悔しさよ余はこれ迄アキラメ主義を抱きつゝありしにも拘らず俗語の、

あきらめられたとどうあきらめられたあきらめられたあきらめられた。の境界にて過せし來りしが遂には人力を極め盡して此世からなる奈落の底黒闇開塞冷々生氣わはや全く絶滅せんとする刻瞬間忽焉として一抹の靈火の點せらるゝを覺ゆるや一道の光明廓然として九天に啓け燦爛たる淨邦は茲に現出し來れり顧みればさきの苦悶は偏に慰籍の因なりしを悟り其他一切の事物皆無限の意味を有せざるはなきに至つたその時のうれしさをいつたら御文章の、うれしさをむかしはそでにつみけりこよひは身にもあまりぬるかな。でいやもう嬉しい嬉しいの情を超過してたゞ豆大の熱涙の點々滴下するを禁じ得なかつたはては心身恍惚身はこれ極樂世界の眞只中花降り香薫じ微妙の音楽十方に聞え河沙界の聖衆吾が勝友となりて現前したまふを實驗したのだ。

思はず宗教に論及した否とよ、余は宗教にあらざるは究竟の解決は決して得られ  
 るものでないことを確信するものである。區々たる立身問題は、余が宗教問題に引  
 入る方便なりしことを、今更叱りたまふことなかれ。  
 嗚呼宗教、余は宗教てふ意義を復活させたいのである。今迄の宗教は、實に抹香  
 臭かりしなり。實にアメン臭かりしなり。汝は念佛臭きにあらざるやとな笑ひたま  
 ひを、呵々宗教てふものは、しかく狹隘なるものにあらず。宗教は實に一大心理であ  
 る。一大倫理である。一大哲學である。否、一切を網羅したる超越的實在(敢て學とはい  
 はず)である。人生も茲に至らざれば、恰も底の如しである。  
 立身何物ぞ、一倫理界の片隅に盤居すべき顛倒想に過ぎないではないか。余は立身  
 解は宗教に入りて始めて、眞の解決を得べき觀を持つものである。敢て之を大方に  
 披瀝す。

悪筆舞文諸君定めし望洋の感おらせらるゝならんが、余は更に語を續ぎ、補綴して  
 此の稿を終へんと思ふのである。今暫くの間の御辛抱を願ひたい。  
 人事を盡すてふことも決して悪い主義とはいはぬ。然し考へても見よ。人間が果し  
 て人事を盡すことを得るものなるか。例せば慈善といはんか。無限の慈悲に比して、

果して如何程のことかある。言語に上すことさへも出来るか。人智で計ればこそ其  
 處に量といふもの成り立つが、無限は全く人智以上である。恒河沙數無量である。又  
 智慧といはんか。人智も其極に至れば殆んど奇蹟の感あるかなれども、人智よりし  
 てこそ奇蹟なれ。絶對無限の智慧よりすれば、一擧手の勞ほどもないのである。當り  
 前の小理窟に過ぎないのである。諸君、二と二は四である。成る程、人智では四に過ぎ  
 ないが、余は絶對の智慧に至りては、二と二は五なり、六なり、七なり、八なり、無限なり  
 といふものである。現に四以上のものもあることを氣付き玉はずや、即有機的組織  
 の事業例せば工場等の如きは、二の力ある人二人合力すれば、確的に四以上の事業  
 の擧りつゝあるではないか。閑話休題、人の社會に處するに於ては、常に不如意の嘆  
 あるは免るべからざる現狀なるが、小は家族間に於ても、圓滿に押通すことを得る  
 は極めて稀なるは實際の事實である。家族ごころか、一身を律するに於てすら之れ  
 を心意の活動上に檢せよ。たとへば智の働きに於て見よ。かくすればかくなるべき  
 はずのものが、越中禪向ふから外るゝではないか。情の働きに於て見よ。坊主悪んで  
 一點袈裟を憎む考は起らないか。意の働きに於て見よ。情動き、智計り、尙且つ反對の  
 行爲をなしつゝあるではないか。げに王陽明が「破山中之賊、易破心中之賊難」と嘆じ

たように親鸞上人が今日今時まで眞實の行なしと大息されし如く、吾人罪惡の凡夫必ずやその奥底にSomethingを要せざれば解決は出来ぬではないか。それを現んや盡人事俟天命とすまじ込んだ日にや、險至極である。

凡そ、人生問題で、最重要なるは、生死問題なれども、多くの場合、人生に桎梏を與ふるものは、實に、倫理問題である。一體全體、絶對の御計らひたる善惡てふことを、自己にて判断するは、そも、嗚呼の至りである。善惡の絶對的判断は、到底、人智にては不可能のことである。親鸞上人の仰せに、

善惡のふたつ、總じてもて存知せざるなり。そのゆゑは、如來の御こゝろによしとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらぬ、如來のよしとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、あしきをしりたるにてもあらぬと、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもて、そらごと、たはごと、まこととあることなきにたゞ念佛のみのまことにておはします。云々。

と、流石は親鸞上人だ。烟眼炬の如く、三世を貫き、十方に亘り、動かすべからざる眞理ではあるまいか。上人晩年、愈圓熟の時代には、遂に無義の義、自然法爾を大に鼓吹せられたではないか。

嗚呼、人世問題に眞の解決を得たくほりせば、斷じて此の桎梏を去れ、始めて與に語るべしだ。余は近來本能主義を鼓吹したく考へつゝ、あれども、こは別の問題として、まづ、余が立身解を御目に掛け申す。

### 九、猫の説法。

少しく異様な標題なれども、時は七月十一日の事なりけり。同人編輯事務に忙しき今日此頃、さなきだに、患者は踵を接して來り、さして狭くもなけれど、時正に梅雨の晴れといひ、療病所内所せきまで暑つ苦るしき折り、任天は一患者の施療をすまし、綴りかけの新體詩を終らんとて、階を下り來れば、默堂は今まさに、一胃癌の患者を捕へ、しきりに、生死事大、無常迅速の理を、懸河の辯を揮ひて説きつゝあり。六疊の事務室内、有り合せの痰吐壺に、夏菊の一もと二もと挿したる默堂の所爲のやさしさよ。かたへに下婢の今しも持參したらん午餐の膳部の列べられあり。下婢、今や、玄關を出でんとして、顧みて高笑ひするに、訝る間なく、小風呂敷包の座上に遺せるあると、よく見れば、小猫を包み、闘つけたるが、任天さんへと戯れたるにぞありける。小猫は、包まれながら、首だけ出し、たわいもなく、睡り居るなりけり。其の様のいぢら

し、殊勝さ。余は、獸堂が患者に成佛の理を説く言葉尻を捕へ、見よ、方々、佛はこゝにこそおはすれ」と叫びぬ。獸堂大嘆!!! 患者呆然!!!

嗚呼、この小猫こそ、誠に佛なりけれ。吾れ人は萬物の靈長など、とて大きな顔はすれど、貪慾の激浪は、朝に眞性を晦まし、瞋恚の火焰は、夕に法財を燬き、魑魅魍魎、梁塵履御和讃の、

悪性さらにもやめがたし、心は蛇蝎の如くなり。

の如き、浅ましき境界に流轉しつゝあるに、あらずや皮一重はき來れば、誠と鼻向けならぬ五濁の凡夫なりけり。今小猫の天を忘れ、地を忘れ、己れを忘れて、野聲囁々たる有様を見ては、まことや、彼れは、天真の佛性を以て、即大宗教を以て、余輩に説法し、人界の濁濁を笑ひつゝあるに、あらずや人間の言辭こそ發せされ。元言辭は人間にのみ通用する、不確なる、狹隘なる、表示的假象に過ぎざれば、それより以上の確かなる大音聲を以て、確かに余等に法を説きつゝあるを感じ來りては、人間果して猫に優れるか否。吾れ人は、確に猫以下の動物なるかなと、余は覺えず。小猫の頬邊近く接吻するを禁ずる能はざりき。余の語終るも、小猫は、野聲依然たり。客は點頭語なし。語盡き、客去る。起て椽端に涼を納るれば、積日の旱りに殆んど枯れなんとせし庭の小

池の昨夜の驟雨にて、濁り勝ちなる勺水を底面淺く貯へ、其池端を覆へる兩三株の萩の落葉の、兩三點水面に浮ぶを追ひつゝ、噉嚼する一尾の金魚!「あ、こゝにも又佛ありけり」と笑ひつゝ、獸堂を顧みれば、はや、一切を佛の化現と感じ來りし、刹那の余が眼には、獸堂の瘦姿も、さながら、觀世音の清容と見え、結び繞らす竹垣は、七重欄楯、七重羅網、七重行樹の周匝圍繞するかの如く、屋敷に友呼ぶ鴉の聲も、さながら、雜色之鳥が迦陵頻伽の聲を弄するかと疑はれ、金沙布地、常作天樂の彼佛國土を忽ちに現出せしぞ、不思議といふも、おろかなり。歩を返して事務室に入る。小猫の野聲依然たり。余よりて、ビスケットの一片を竊かに其鼻端に接するに、小猫應せず。茄子の漬物を握み、之を近くるも依然たり。要こそあれと「みずた煮」の罐の中より、残りの小さき干蝦を取りて之を近くるに、暫くして、鼻息は少しく變になり、口端の鬚髯、忽ち上下に搖蕩し始め、ニヤーンの聲諸共、忽ちムツクと動き始めぬ。余はその蝦を投げ與へて、再び之れある哉」と獸堂を顧みぬ。

猫のビスケット漬物に應せずして、蝦に應ずるを見て、或はそれ、獸の本性を現はしたり。佛忽ち魔となれり」と言はん。されど、説者よ、余に言はしめよ。

獸の本性即佛の本性に、あらずや。吾人々類は、各其本然の性を晦まして、虚偽譎詐の

行○動○を○な○し○て○自○ら○得○た○り○と○す○る○に○お○ら○ず○や○外○に○賢○善○精○進○の○相○を○現○じ○て○内○に○虚○假○  
 を○懐○く○も○の○に○お○ら○ず○や○道○徳○と○い○ひ○倫○理○と○い○ふ○實○に○天○が○孔○子○孟○子○な○ど○の○大○世○話○燒○  
 を○世○に○下○し○て○暫○く○小○供○欺○し○を○す○る○玩○具○に○過○ぎ○す○何○れ○か○善○？○何○れ○か○惡○？○眇○た○る○人○  
 間○社○會○の○五○十○步○百○步○の○戲○論○に○過○ぎ○さ○る○の○み○弘○誓○の○佛○地○よ○り○自○然○流○露○し○た○る○真○正○  
 の○本○能○主○義○に○お○ら○ず○ん○ば○與○に○語○る○に○足○ら○さ○る○な○り○願○く○は○ニ○チ○エ○を○起○し○來○れ○ゴ○  
 ル○キ○ー○を○伴○ひ○來○れ○と○氣○焰○萬○丈○當○る○べ○か○ら○ず○默○堂○亦○笑○て○之○に○和○す○願○れ○ば○小○猫○は○口○  
 端○を○甜○り○つ○い○長○尾○を○蜿○蜒○と○波○う○た○せ○去○り○て○椽○端○に○踞○す○余○等○亦○著○を○執○り○て○膳○に○  
 就○く○

(二五八)

附 錄 終。

明治三十八年十月十四日印刷  
 明治三十八年十月十七日發行

精神療法  
 定價 金參拾錢

著 者 宅 間 巖

發 行 者 辻 太  
東京市神田區小川町九番地

印 刷 者 河 本 龜 之 助  
東京市京橋區築地二丁目二十番地

印 刷 所 國 光 社  
東京市京橋區築地二丁目廿一番地



發行所

東京市神田區小川町九番地  
電話本局二千四百三十二番

開 發 社



桑原俊郎君著

# 第五版 精神靈動 精神論

定價金 五拾錢  
郵税金 六錢

本書は世人が久しく渴望せられたる精神靈動第二編にして靈妙不可思議なる精神の何物なるかを一々實例を以て詳細明確に説明したるもの第一編を讀まれたる人は此書に依り更に催眠術の原理原則を窮め趣味と實益とを併せ得べきは勿論荷も精神を研究せんと欲するものは必ず一讀すべき良書にして所説の妙實驗の奇世人の奇妙不思議と思惟せし事柄も直ちに氷解し一の疑團なく其の快言よべからざるものあらんを企て購讀あらんことを

目次 第一章 精神と物質との關係 第二項 我心と他の生物との關係 第三項 我心と無生物との關係 第四項 第二章 精神の所在 第五項 個體精神 第六項 共通精神 第七項 精神の活動 第八項 精神の含不合 第九項 第三章 精神の強弱 第七項 精神と物質との關係 第八項 思惟 第九項 不動精神 第十項 至大至剛の力 要論 結

東京府師範學校教諭 小林晋吉君著

# 新刊 小學校理化實驗の心得

定價金 拾五錢  
郵税金 貳錢

從來小學校に於ける理化學教授に關する書籍尠からずと雖徒に理化器械の使用法實驗法等を説明するのみにて、特に尤も必要なる理化學的實驗の準備、同跡始末、簡易器械の製造法、器械の小修繕及保存法等を記述するもの頗稀なり本書は其等必要の事項を極めて平易に説明し又其實驗に要する器具は卑近にして且つ實習し易きもののみを採擇したれば學者にして一たび之を繕かば能く其智識技能に通熟し小學校に於ける理化學の實驗は遺憾なく之を行ふことを得べし請ふ續々購讀の榮を賜はんことを

天然逸人 桑原俊郎君著

# 第四刊 精神靈動 宗教論

定價 金 四十五錢  
郵稅 金 六錢

精神靈動第三篇愈々出づ是れ桑原天然氏が嘗て精神研究會の會長となり其宗教觀を説述せられたるもの故あつて其前半のみにて擱筆せられたるを今回新に其後半を加へ、更に大訂正を施されたるもの逸氣俊爽優に凡俗に超然たり之を讀み之を味はば、無宗教家は忽ち宗教家となり病者は忽ち壯健となるべし請ふ續々御購求あらんことを

目次 序論 第一項 無神無靈魂の人に告ぐ 第二項 宗教は果して迷信か 第三項 宗教を云爲するは何ぞ 第四項 宗教は如何なる時に起るか 第五項 人世は如何、宇宙は如何 第六項 神佛、天帝とは何者ぞ 第七項 極樂、天國、地獄、とは如何なる處か 第八項 善、惡 第九項 宗教の儀式 第十項 他力、自力 第十一項 宗教家の争闘 第十二項 信仰とは何ぞ 第十三項 靈魂(心、精神)の滅不滅 第十四項 葬式、祭禮 結

渡邊龍聖君著

# 訂正 六版 倫理學序論 一名批評的倫理學

全洋裝 菊版  
定價金 六十錢  
郵稅 六錢

本書は、渡邊先生が、古來よりの倫理學說の立て方を説明し、批評的に其長所と缺點とを示し、遂に之を最近の最も進歩せる倫理學說に總合せられたるものにて、總論に倫理學の性質を説き本論に在來の倫理學說を八つに分ちて一々之を批評し、遂に自己實現說に歸入し、結論に此說を實際に應用する道徳的生活に及ばれたり



湯本武比古君序 精神靈動著者桑原俊郎君著

# 版五 實驗記憶法

全 壹 冊  
定價 金參拾錢  
郵稅 金四錢

成功を望むもの、安心を望むもの、腦の改造を欲するもの、心機一轉を欲するもの、鈍を鋭に頭を  
穩に、平凡を俊傑に、暴戾を溫柔に化せしめんと欲するもの、禍を轉じて福とし、悲を轉じて樂と  
せむことを欲するものは、是非とも斯書を讀まざるを得ず。記憶なるかな。記憶なるかな。人生と  
何れに進むも記憶より始まらざるは無し。本書の價值、既に定評あり。敢て自贊の要を見ず、幸に  
一讀せられんことを望む。

## 目次

第一章 記憶の必要 ●第二章 記憶の強弱 ●第三章 記憶の悪しき徵候 ●第四章 記憶の悪い結  
果 ●第五章 心理學上記憶の説明 ●第六章 記憶の悪くなる原因 ●第七章 記憶を良くする方法  
精神靈動著者 桑原俊郎君并開序  
陸軍通譯官 中堂謙吉君著

# 訂正 催眠術 暗示法

全 一 冊  
定價 金十五錢  
郵稅 金二錢

暗示の催眠術に最緊要缺くべからざる所以は、桑原君著の精神靈動第一編を讀まれたる諸士の諒知  
せらるゝ所ならんも唯其暗示法の該書に詳述せられざるを最も遺憾とせり、本書は桑原君の門人に  
て、該術に精通せる中堂謙吉君が自家の實驗と桑原君の指導により、催眠術の精髓骨子たる暗示の  
方法を詳細明瞭に遺憾なく記述せられたるもの請ふ續々購讀の榮を賜はんことを

滋賀縣師範學校校長 山路一遊君校閱  
同 校 訓 導 山本萬治郎君  
同 校 訓 導 豊田 穰君 合著

# 小學校 戰時教育資料

全 一 冊  
定價 金貳拾五錢  
郵稅 金四錢

本書は戰時に於ける教育資料として日露戰爭の由來は勿論國民一般及學校生徒の戰時心得及其他各  
種の戰爭に關する有益なる教育的材料を選擇し能く之を排列して談話體に記述せられたるもの戰時  
に於ける教育者は是非一本を購ひて座右の必須參考とせらるゝに適當なるを信す。

醫學博士 佐々木政吉先生序及講演  
東京府師範學校校長 瀧澤菊太郎君編纂

# 版四 冷水養生法

(一名簡易無費長壽法)  
定價 金拾八錢  
郵稅 金四錢

本書は同君廿年來自他の實驗に依りて冷水養生法の簡易無費にして然かも衛生上世人の豫想せざる  
偉効あることを確信し之を全國に普及せしめ一般國民に裨益する所あらんと欲し該法に關する學理  
實驗上の結果及實施方法等に於ける佐々木醫學博士の詳細なる講演文學博士重野先生五十四ヶ年間  
繼續施行の結果殆ど天下無比の健康を得られたる實話を始め實施者廿餘名の有力なる報告、所見等  
を編纂したるものにして尙讀者の便を圖り假名を附したれば少しく文字ある者には容易に讀むこと  
を得べし

幕内椿三郎君著

# 催眠學獨修

菊判全一册  
定價金貳拾五錢  
郵税金四錢

本書は、哲學上より、催眠學の原理を説き、心理學、及び、生理學に由り、催眠状態の現象に關する、其の應用を、治病矯正と、系統的に編輯し、綱を掲げ目を分ち、秩序正しく、演繹したるもの、而して、其の應用を、治病矯正と、教育上とに及ぼし、且つ、實驗の例を載せ、學理と、實驗とを照合し、其の如く、斯學の神髓を概括したるものは、未だ嘗て見ざる處なり、教育家、種々世に行はるる、醫師、其他如何なる、業に従事する者も、此の書を一讀せば、裨益する處渺からざるべし。

天然逸人 桑原俊郎君著

# 再版 安全催眠術

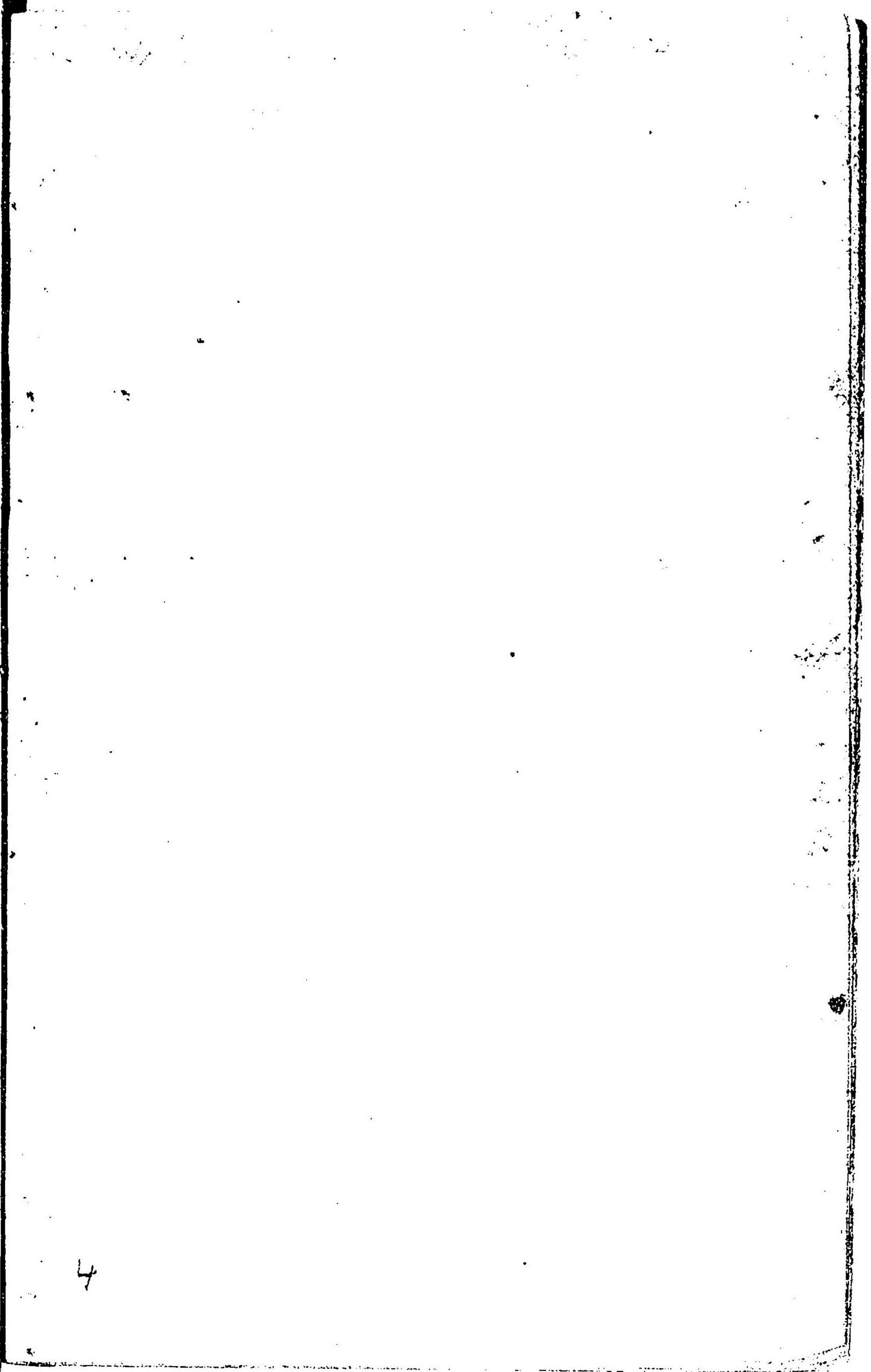
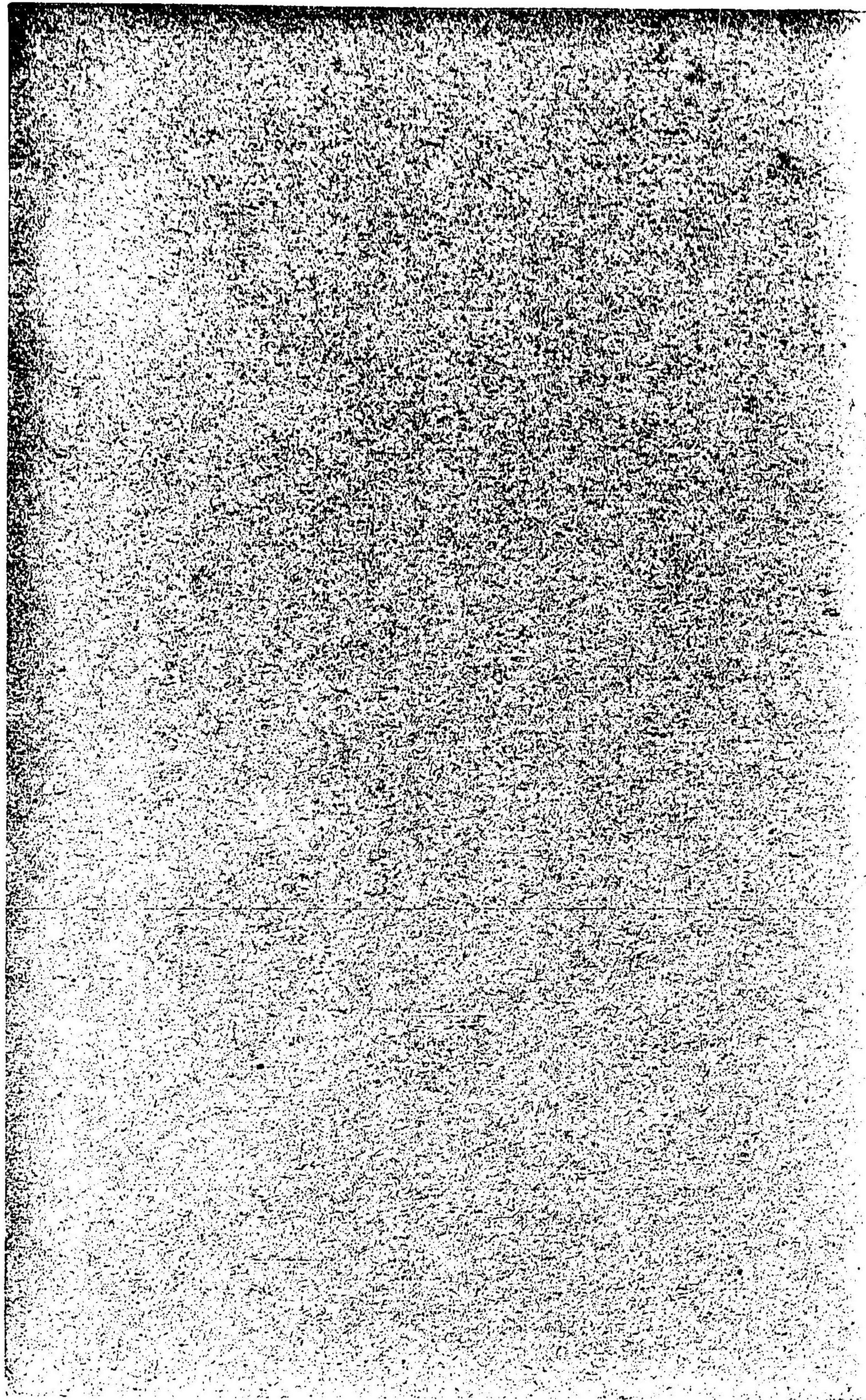
菊判全一册  
定價金參拾錢  
郵税金四錢

瓜田に履を納れず、李下に冠を整さず。好で危きに近くべからず。催眠術の流行、今や其の極點に達し、利弊交々至る。豈恐れざるべしや。本書は、治病上、斯術が絶大の効驗あるを説くと同時に、毫も批難攻撃を受けざるやう、毫も弊害なきやうに、斯術を利用し、以て大幸を求むべきことを論ぜり。杖は倒れざる先に頼るべく、術は災に罹らざる前に擇ぶべし。此の方法に依るときは、催眠術は、利ありて害あるを知らず、益ありて損あるを見ざるなり。眞に斯書は天來の福音、空前の好著なり。今や再版成る。速に購讀して至幸至樂を覚めよ。

## 目次

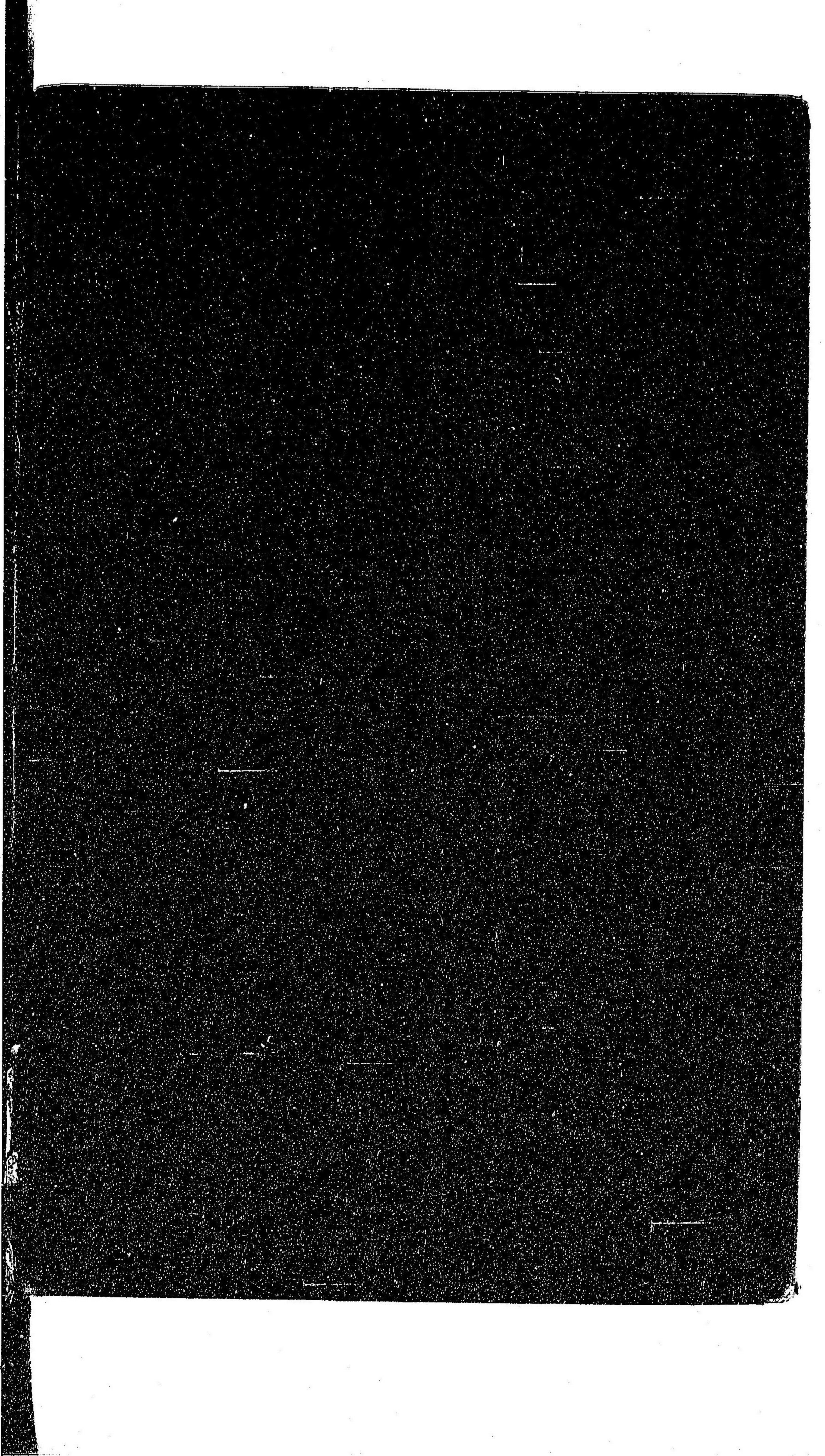
- 第一章 人生の目的(樂的生活)
- 第二章 催眠術の價值
- 第三章 催眠術は何故に病を醫し得るか。

- 第四章 安全催眠術
- 第五章 結論



60

186



058628-000-0

60-186

実験精神療法

宅間 巖/著

M38

CBC-0153

